

令和三年三月

豊山学報

第六十四号

真言宗豊山派総合研究院

目次

仏教と道教の十王信仰と儀礼	田中文雄	一
インド後期密教における数珠―『サンヴァアローダヤタントラ』第12章 および註釈書『パドミニー』の校訂テキストと訳註―	倉西賢亮(憲一)	四四・(111)
『底哩三昧耶王成就法』校訂テキストと和訳(1)	横山裕明	八八・(67)
『金剛頂経』和訳(五)	高橋尚夫	一五四・(1)
執筆者紹介		一五五
編集後記		一五六

仏教と道教の十王信仰と儀礼

田 中 文 雄

一、祖霊祭祀

今日でも東アジアでは、死者の追善供養が盛んである。その中でも、閻魔を中心とする十人の冥王が死者の生前の罪過を審判し、その行き先を決めるといふ十王法事は中心的な信仰である。さて、このような信仰と儀礼は、いつ頃一般化したのであろうか。

唐代の仏教の中陰法事と、その影響を受けた道教の追善についての記述が史書にある。玄宗時代の宰相であった姚崇(六五〇〜七二一年)が子孫に伝える遺言の中で、仏教と道教の中陰法事について、以下のように触れている。

若未能全依正道、須順俗情、從初七至終七、任設七僧齋。若隨齋須布施、宜以吾緣身衣物充、不得輒餘財、爲無益之枉事、亦不得妄出私物、徇追福之虛談。

道士者、本以玄牝爲宗、初無趨競之教、而無識者慕僧家之有利、約佛教而爲業。敬尋老君之説、亦無過齋之文、抑同僧例、失之彌遠。汝等勿拘鄙俗、輒屈於家。汝等身没之後、亦教子孫依吾此法⁽¹⁾云。

姚崇は知識人で、合理主義者だったようで、「本意ではないが、自分の死後、世間と同じように、初七日から四十九日まで七人の僧を招いて法要をおこなうのはしかたがない。しかし、遺した身のまわりの物を布施として、妄りにその他の出費をしてはならない」という。また、「道士は本来は不死の根源を宗とするもので、時勢にあやかろうとする教えではない。それをよく知らない者が、僧たちが（追善供養で）利益を得ているのに心ひかれ、仏教を模倣して（追善の）やり方を作り上げた。老君の説いていることを検討してみても、齋（法要）については書かれていない。そもそも僧と同じことをするのは、これ（道教の教え）から遠く離れている」ともいう。「この遺言は子々孫々に伝えるように」と述べることから、姚崇が生きた時代、七〜八世紀には仏教の中陰法事が一般化していたこと、道教も同様な追善法事をおこなっていたことが読み取れる。ただし、ここでは仏教・道教とも中陰（四十九日）までの法事で、十王法事にまでは言及されない。

いつ頃から十王法事があつたのかを確実に示す史料はない。仏教の中陰（中有）の考え方と、中国の死者埋葬法、初めの七回（初七日から四十九日忌まで）は仏教的な転生可能日であり、以後の三回（百日〔卒忌〕⁽²⁾・小詳〔一周忌〕⁽³⁾・大詳〔三回忌〕⁽⁴⁾）は中世中国の埋葬システムが合わさって、十回の冥界裁判という祖霊祭祀へと発展したと考えるのが妥当であろう。また、仏教でも道教でも十王への祭祀は「預修」「逆修」の法会にも用いられた。つまり、死者も生者も冥界裁判を信仰し、システム化した宗教儀礼となっていたともいえる。

二、十王の出自

今日見られる十王像や十王図では、各王は中国中世の官服を着た役人の姿をしている。つまり、インド的な尊容は全くなく、各王の姿に大きな相違は見られない。十王経関係を除けば、仏教文献にまとまった形で組み

合わされた十王は記述がない。

十王は『リグ・ヴェーダ』や『アタルヴァ・ヴェーダ』に登場する閻魔王（Yama）に、来歴不詳の九王（秦広王・初江王・宋帝王・五官王・變成王・泰山王・平等王・都市王・五道転生王）が加えられている。ただし、平等王は慧琳（七三七〜八二〇年）の『一切経音義』に「閻魔は梵語の鬼趣……翻じて平等王となす」（大正蔵巻五四、三二八c）と記されるから、閻魔の異訳であることがわかる。

また、泉芳璟は「十王経の研究」⁽⁵⁾で、『佛祖統記』に十王の内六王については記述があるという。「閻羅・五官は『提謂経』に、平等（王）は『華嚴感應傳』に、泰山（王）は『譯経圖紀』と『孝經援神契』に、初江（王）は『夷堅志』に、秦廣（王）は『夷堅志』に見える」（大正巻四九、三三二b）という。泰山王は霊山と神で、地獄とも関係づけられるが、出自についての出典は中国撰述經典や、緯書（預言書）であったり志怪小説集（怪異を集めた書）であったりする。

泰山王が十王の一人になるまでの神格について考察すれば、その名称のもととなる泰山（岱、太山、大山とも記述される）は、山東省中部の名山であり、中国の五つの霊山、五岳の一つで東岳とも言われる。古くから天と地を繋ぐ特別な場所と認識され、秦の始皇帝をはじめ多くの帝王が、「封禪」（王者による天地の祀り）をおこなった。また死者の霊魂が集まる山としても信仰されていたようで、後漢の『博物志』には「泰山は一名、天孫という。天帝の孫という意味である。この山は主に人の魂魄を召し、人の生命の長短を知ることができる」と、『孝經援神契』には「泰山は）主に人の魂魄を召す。東方は萬物が始めてなるところだから、人の壽命の長短を知ることができるとある。つまり、東岳・泰山は五行説ですべてが萌生する東方にあるから、人間の生死に関わる神のいるところとされる」⁽⁷⁾。つまり、十王は仏教とも道教とも民間神ともいえない神々である。

三、仏教の十王経

十王の冥界裁判が記述される経典が『十王経』であるが、いくつかのバージョンがある。また、これらはインドに原典のない中国撰述(疑偽)経典である。大まかに分類すれば、以下の三種類に分けられる。

第一は比較的短いバージョンで、唐宋から宋初にかけて手写されたものが、中国のはずれの敦煌に残されている。この敦煌写本には、経典を書写した人の名前や、願文を明記したものがあり、死者供養のための写経といえる。

第二は同じく敦煌に残された「帯図本」ともいわれるもので、経典の本文に彩色した図画を挿入した『十王経』である。特に、大英博物館S三九六一本、フランス国立図書館P二〇〇三本と、日本の長尾美術館本(佐藤汎愛・将来)が著名である。これらは経文に絵を入れて民衆に冥界裁判の様子を示したもので、後の「十王図」と同じように布教のために用いられたと考えられる。

上記二種のような形態のバージョンは敦煌に限ったことではなく、全国的にあったと推測するが、地理的・気候的な条件から敦煌に大量に残ったといえる。

第三は、唐僧の道明和尚(襄州・開元寺、八世紀末頃)が、冥界へ誤って連れて行かれ、その後蘇生したという入冥譚(臨死体験記)に基づき、四川の成都府にあった大聖慈寺の藏川(未詳、九世紀頃か?)という僧が撰述したといわれる『佛説預修十王生七経』(以下『預修生七経』と略)⁽⁸⁾と『佛説地藏菩薩發心因縁十王経』(以下『發心因縁経』と略)である。後経は各王ごとに「本地仏」が配されており、また文中に日本語が混入されており、日本撰述という見解もある。確かに中国で発見された『十王経』には本地仏が記載されない。ただし、預修について

は「十齋日」(毎月十日間、齋戒して滅罪を祈る)には、仏が降臨するという記述はある⁽¹¹⁾。

『預修生七経』と『發心因縁経』では、後経の方が圧倒的に長文である。そのため、経の中心部分を構成する各王の偈頌⁽¹²⁾について比較してみた。

	十王生七経	發心因縁経
秦廣王	一七亡人中陰身 驅將隊隊數如塵 且向初王齊儉點 由來未渡奈河津	一七亡人中陰身 駭將墜墮數如塵 且向初王齊儉點 由來未渡奈河津 召於亡人坐門關 死天山門集鬼神 殺生之類先推問 鍔杖打體難通申
初江王	二七亡人渡奈河 千羣萬隊涉江波 引路牛頭肩挾棒 催行鬼卒手擎叉	二七亡人渡奈河 千群萬隊涉江波 引路牛頭肩挾棒 催行馬頭腰擎叉 苦牛色牛牛頭來 乘馬苦馬馬頭來 無衣寒苦逼自身 翁鬼惡眼出利牙
宋帝王	亡人三七轉恹惶 始覺冥途險路長 各各點名知所在 羣羣驅送五官王	亡人三七轉恹惶 始覺冥途險路長 各各點名知所在 群群驅送五官王
五官王	五官業秤向空懸 左右雙童業簿全 輕重豈由情所願 低昂自在昔因縁	五官業秤向空懸 左右雙童業簿全 輕重豈由情所願 低昂自在昔因縁
閻羅王	五七閻王息靜聲 罪人心恨未甘情 策髮仰頭看業鏡 始知先世事分明	五七閻王息靜聲 罪人心恨未甘情 策髮仰頭看業鏡 悉知先世事分明
變成王	亡人六七滯冥途 切迫坐人執意愚 日日只看功德力 天堂地獄在須臾	亡人六七滯冥途 切迫坐人警意愚 日日只看功德力 天堂地獄在須臾
大山王	七七冥途中陰身 專求父母會情親 福業此時仍未定 更看男女造何因	七七冥途中陰身 專求父母會情親 福業此時仍未定 更看男女造何因

平等王	都市王	五道 轉輪王
亡人百日更恓惶 身遭枷械被鞭傷 男女努力造功德 從茲妙善見天堂	亡人百日更恓惶 身遭枷械被鞭傷 男女努力造功德 從茲妙善見天堂	亡人百日更恓惶 身遭枷械被鞭傷 男女努力造功德 從茲妙善見天堂
一年過此轉苦辛 男女修齋福業因	一年過此轉苦辛 男女修齋福業因	一年過此轉苦辛 男女修齋福業因
六道輪迴仍未定 造經造佛出迷津	六道輪迴仍未定 造經造佛出迷津	六道輪迴仍未定 造經造佛出迷津
極惡極善不來處 微惡微善爲亡寶	極惡極善不來處 微惡微善爲亡寶	極惡極善不來處 微惡微善爲亡寶
依佛經力定二報 以追修福登金人	依佛經力定二報 以追修福登金人	依佛經力定二報 以追修福登金人
後三所歷是開津 好惡唯憑福業因	後三所歷是開津 好惡唯憑福業因	後三所歷是開津 好惡唯憑福業因
不善尚憂千日內 胎生產死天亡身	不善尚憂千日內 胎生產死天亡身	不善尚憂千日內 胎生產死天亡身
邪見放逸過 愚癡無智罪 常在三途獄	邪見放逸過 愚癡無智罪 常在三途獄	邪見放逸過 愚癡無智罪 常在三途獄
猶如車輪迴	猶如車輪迴	猶如車輪迴

これらの偈頌は死後に受ける苦難の階梯を順次語句にしたもので、各十王の裁定の厳しさを表現している。『発心因縁経』の方が幾分か増幅されている。両経は軌を一にしたもので、民衆に声で聞かせることを目途としている。ある意味、十王法事の説解と説戒の台本といってもよいと考える。つまり、冥途での苦難を実感することにより、追善（預修も含めて）を推奨する経典であろう。死者儀礼において、直接読誦されるのではないと考える。つまり、個々の法要には、別の読誦経典が用いられていた。

四、『道蔵』内の十王文献

道教文献の『無上黄籙大齋立成儀』⁽¹²⁾ 卷一「建齋総式第二」には、

經曰、開度七祖、救拔三途、黄籙大齋最爲第一。……若專度先祖、則要亡者七七、百日、大小祥遠忌之日相合。

という。もともと、「黄籙齋」は、個々の死者を追善するのではなく、祖霊の救済と安寧を祈願する儀礼であった。上記の文献は、四十九日、百日、一周忌と三回忌といった十王儀礼と黄籙齋が融合したものと考えることができる。これは、単に道教が仏教を模倣したというより、十王信仰を儀礼の内部に取り込み、新たな展開をしたと考えられる。

道教の十王文献については、これまでに吉岡義豊⁽¹³⁾、Stephen Teiser⁽¹⁴⁾の論考や、John Lagerwey⁽¹⁵⁾の解釈がある。しかし、黄籙齋の文献との関係は指摘するものの、その過程の研究にまで及ぶものではない。特に、黄籙齋の神々が十王と融合することについて、吉岡は「本迹」、つまり日本成立の『発心因縁経』の「本地仏」と同じように解釈している。

それでは、道教の十王法事が依拠する経典は何であったのか。道教の一切経である『道蔵』には、以下の十王に關係する文献がある。

- ① 『太上救苦天尊說消愆滅罪經』⁽¹⁶⁾
- ② 『元始天尊說酆都滅罪經』⁽¹⁷⁾
- ③ 『地府十王拔度儀』⁽¹⁸⁾
- ④ 『十真君醮儀』（『靈寶領教濟度金書』卷四一）⁽¹⁹⁾
- ⑤ 『十王醮儀』（同書卷一七二）

①と②とは、十王の追善法事を標榜する文献で、それぞれの神（前者は救苦天尊、後者は元始天尊）が死者の救済を説くという形をとり、各忌日を担当する十王の名を記す。仏経との相違点は、十王それぞれへの偈頌がな

いことと、十王と道教神(真君)が同体であると主張することである。道教の十王経の特徴は、忌日と十王名、真君名を述べていることである。十王の道教神(真君)としての名前は、次表のようになる。

忌日	十王名	①の真君名	②の真君名
一七日	秦廣王	太素妙廣真君	同
二七日	初江王	陰德定休真君	同
三七日	宋帝王	洞明普靜真君	同
四七日	五官王	玄徳五靈真君	同
五七日	閻羅王	最勝輝靈真君	同
六七日	變成王	寶肅昭成真君	同
七七日	泰山王	玄徳妙成真君	等觀明理真君
百日	平等王	無上正度真君	同
小祥	都市王	飛魔演慶真君	同
大祥	轉輪王	五化威靈真君	五化威徳真君

この道教の『十王経』に登場する真君の来歴は、神々の系譜を記述した『真靈位業図』⁽²⁰⁾などには見えない。しかし、この真君名(多少の文字の異同があるが)が定型化し、後の道教儀礼で道教神へ死者の救済を願う一連の様式をもたらした。

一方、③④⑤は、十王法事の儀礼科儀書(マニュアル)である。しかし、成書年代がはっきりしているのは、④と⑤である。これらが収録される『靈寶領教济度金書』は、甯全真(一一八一年没)が伝授し、一三〇二年に

林靈真が編集したものである。

④「十真君醮儀」は追善儀礼、⑤「十王醮儀」は預修儀礼のマニュアルであり、儀礼の基本的構造はほぼ同じである。この儀礼は、「歩虚」「灑浄」に始まり、香煙に託して道士の身体神を天上世界に送り出す。「三献」⁽²¹⁾をおこない、続いて十王への拝礼をおこなう。この拝礼は、実際は十王の凶像の前に進み、そこで香を焚き祈りをささげるという行為である。

④の場合は、「孝子引旛、詣第一殿、上香設拜……」とあるように、遺族が故人の依り代(象徴)としてのハタを持ち、十王の凶像の前に移り、香をあげ礼拝する。⑤の場合は、「引弟子詣第一殿、上香設拜……」とあるように、預修を受けようとする施主自身が道士に導かれて、凶像の前に進み拝礼して文書を奉じる。この儀礼の時の十王の凶像が配置されていたことになる。⁽²²⁾

③の『地府十王拔度儀』は、「道士」や「施主」「亡過」(死者)の名を入れれば、そのまま次第(プログラム)となる。また、施主がどう行動し、どう道士の文言に唱和するかについても書かれる。具体的には、三官や三清という高位の道教神への帰依を組み込み、「酆都」の地獄観にそって「十王真君」について述べる。この儀軌では、十王への具体的な拝礼法として、神々への偈頌が書かれる。真君とは別の道教神名が、忌日にあわせて記述される。

第一殿(初七日)の拝礼では、
焚香供養、冥府第一宮、泰素妙廣真君、世人所謂秦廣大王。其中地獄、長蛇吐焰、鐵狗噴煙。亡人一七、先到此宮。天尊哀憫、救度亡魂、出離冥途、迺稱偈讚。

玉寶皇上天尊。茫茫苦海實堪哀、惡業於身手自裁。魂魄已歸司命府、幽關鎖閉幾時開。長蛇吐焰炎如火、鐵狗噴煙陣陣來。稽首諦聽三寶頌、普令超度出泉臺。和不可思議功德爾時、真人聞是頌已、懽喜踴躍、仰謝天尊、再稱偈讚。

九幽拔罪天尊。無邊聖力不思議、盡釋幽牢拷對詞。一道祥光來引接、亡靈隨逐上丹墀。和願薦此亡靈、往生極樂國。(傍線は筆者による、以下同じ)

と真君とは異なる天尊の名と、韻文の偈頌が記述される。次表のように、十王それぞれに天尊が配当される。

忌日	A	B	C	D
第一宮(一七日)	秦素妙廣真君	秦廣大王	玉寶皇上天尊	九幽拔罪天尊
第二宮(二七日)	陰德定休真君	初江大王	玄真萬福天尊	十方救苦天尊
第三宮(三七日)	洞明普靜真君	宋帝大王	太妙至極天尊	朱陵度命天尊
第四宮(四七日)	玄德五靈真君	件官大王	玄上玉晨天尊	法橋大度天尊
第五宮(五七日)	最聖耀靈真君	閻羅大王	度仙上聖天尊	火鍊丹界天尊
第六宮(六七日)	寶肅昭成真君	變成大王	好生度命天尊	金闕化身天尊
第七宮(七七日)	泰山玄妙真君	泰山大王	太靈虛皇天尊	逍遙快樂天尊
第八宮(百日)	無上正度真君	平等大王	無量大華天尊	隨願往生天尊
第九宮(周歲)	飛魔演化真君	都市大王	玉虛明皇天尊	乘功託化天尊
第十宮(大祥)	五靈威德真君	轉輪大王	真皇洞神天尊	寶華圓滿天尊

AとBの配当は他の十王文献と同じであるが、CとDの十天尊が付加されていることがわかる。

五、二つの十天尊

前述の『地府十王拔度儀』のCとDの天尊の名は、その他の道藏文献にも多く登場する。これらについて、

再度検討してみたい。

Cの天尊は、六朝末から唐代にかけて成立したと思われる『太上洞玄業報因縁經』⁽²³⁾巻四の「持齋品第七」では、
 立春日、元始天尊遣度仙上聖天尊、將始青天君、神仙兵馬無殃數衆、教化人間、開度衆生。春分日、元始天尊遣玉寶皇上天尊、將青靈始老帝君、神仙兵馬無殃數衆、教化人間、開度衆生。立夏日、元始天尊遣好生度命天尊、將始丹天君、神仙兵馬無殃數衆、教化人間、開度衆生。夏至日、元始天尊遣玄真萬福天尊、將始丹靈真騰君、神仙兵馬無殃數衆、教化人間、開度衆生。立秋日、元始天尊遣太靈虛皇天尊、將始素天君、神仙兵馬無殃數衆、教化人間、開度衆生。秋分日、元始天尊遣太妙至極天尊、將皓靈皇老帝君、神仙兵馬無殃數衆、教化人間、開度衆生。立冬日、元始天尊遣無量太華天尊、將始玄天君、神仙兵馬無殃數衆、教化人間、開度衆生。冬至日、元始天尊遣玄上玉宸天尊、將五靈玄老帝君、神仙兵馬無殃數衆、教化人間、開度衆生。

と八天尊の記載がある。八つの節日に元始天尊が異なる八天尊を人間(現世)に派遣し救済するという。

上記の場合は季節に関係するが、方位と関係づけて十天尊を記述する文献もある。隋・唐以前の僧院生活の規範を窺い知れる『洞玄靈寶三洞奉道科戒儀始』⁽²⁴⁾巻六の「常朝儀」(日々の勤行規則)では、

至心歸命東方玉寶皇上天尊、至心歸命南方玄真萬福天尊、至心歸命西方太妙至極天尊、至心歸命北方玄上玉晨天尊、至心歸命東北度仙上聖天尊、至心歸命東南好生度命天尊、至心歸命西南太靈虛皇天尊、至心歸命西北無量太華天尊、至心歸命上方玉虛明皇天尊、至心歸命下方真皇洞神天尊。各長跪執簡、當心懺悔曰
 ……

と十方への拜礼に十天尊を想定する。

六朝時期までに成立した道教經典の類書の『無上秘要』⁽²⁵⁾では、教力所の言及がある。巻三五「授度齋辭宿啓儀品」

は『金籙經』から、卷三七「授道德五千文儀品」は『洞神經』から、卷三九「授洞玄真文儀品」は『靈寶經』から、卷四八「靈寶齋宿啓儀品」では『金籙經』から引用として、

至心歸命東方玉寶皇上天尊
 至心歸命南方玄真萬福天尊
 至心歸命西方太妙至極天尊
 至心歸命北方玄上玉晨天尊
 至心歸命東北度仙上聖天尊
 至心歸命東南好生度命天尊
 至心歸命西南太靈虛皇天尊
 至心歸命西北无量太華天尊
 至心歸命上方玉虛明皇天尊
 至心歸命下方真皇洞神天尊
 至心歸命過去高上玉皇天尊
 至心歸命見在元始天尊
 至心歸命未來太極天尊
 至心歸命玉京玄臺紫微上宮
 至心歸命一切真仙得道聖衆

と、十方天尊に、他の神々が付加されて記載される。

また、『太上三十六部尊經』⁽²⁶⁾では「太清境中精經」の記述として、

天尊告十方天尊曰、汝今以我之氣化身下東方。若有一劫人民見世受苦、則玉清隆福天尊救度一切災難。過往魂爽未得超生、則曰玉寶皇上天尊救度一切沈滯。南方延壽益算天尊濟生、玄真萬福天尊度死。西方八卦護身天尊齋生、太妙至極天尊度死。北方消災解厄天尊齋生、玄上玉晨天尊度死。東北方紫清賜福天尊齋生、度仙上聖天尊度死。東南方長生保命天尊齋生、好生度命天尊度死。福生無量天尊齋生、太靈虛皇天尊度死。西北方九宮捍厄天尊齋生、無量太華天尊度死。上方保命護身天尊齋生、玉虛明皇天尊度死。下方興大福力天尊齋生、真皇洞神天尊度死。

とある。「度死」の神であるから、十の方角にいて死者を救済する役割をもっていた。

Dの天尊も、十方に配当されていないが、死者儀礼である鍊度に関わるようだ。『太上三洞表文』⁽²⁷⁾卷下の「九天尊鍊度表」には、「太一救苦天尊」「十方九天尊」「九幽拔罪天尊」「朱陵度命天尊」「火鍊丹界天尊」「法橋大度天尊」「金闕化身天尊」「逍遙快樂天尊」「寶華圓滿天尊」といった鍊度を祈る九神が記述される。

また、『靈寶領教濟度金書』卷五九、科儀立成品の「九鍊返生儀」では、

第一鍊 謹召守雄抱雌大將、引領亡故某人、詣太乙救苦天尊座前。
 第二鍊 謹召守雄抱雌大將、引領亡故某人、詣九幽拔罪天尊座前。
 第三鍊 謹召守雄抱雌大將、引領亡故某人、詣轉輪聖王天尊座前。
 第四鍊 謹召守雄抱雌大將、引領亡故某人、詣法橋大度天尊座前。
 第五鍊 謹召守雄抱雌大將、引領亡故某人、詣火鍊丹界天尊座前。
 第六鍊 謹召守雄抱雌大將、引領亡故某人、詣金闕化身天尊座前。
 第七鍊 謹召守雄抱雌大將、引領亡故某人、詣朱陵度命天尊座前。
 第八鍊 謹召守雄抱雌大將、引領亡故某人、詣逍遙快樂天尊座前。

第九録 謹召守雄抱雌大將、引領亡故某人、詣寶華圓滿天尊座前。

と九天尊が記述される。十方救苦天尊、隨願往生天尊、乘功託化天尊の名はないが、並び順などは『地府十王拔度儀』に近いものがある。

また、同書卷四、聖真班位品の「左右三百六十位」では、左班(左側)には九幽拔罪天尊、朱陵度命天尊、逍遙快樂天尊を配置するとあり、右班(右側)に火鍊丹界天尊、法橋大度天尊、金闕化身天尊、隨願往生天尊、寶華圓滿天尊を配置するとある。しかも、後者の右班では、前述の各方位の十天尊も配置される。

六、十方の天尊と死者儀礼

十天尊は『黄籙齋十天尊儀』⁽²⁸⁾や『黄籙救苦十齋転經儀』⁽²⁹⁾『黄籙十念儀』⁽³⁰⁾といった黄籙齋の文献では、天尊と方位に対して儀礼を行うことが述べられており、これは十王の科儀書と一致する。しかも、これらの文献には十王名や、その道教の真君名は出てこない。

『黄籙齋十天尊儀』の目的は、「今齋主某修建道場、用資亡没」と文献の初めの部分に記述されるように、追善の法要次第である。この文献には、以下のように、太上道君の言葉に続き、天尊名とその偈頌を載せる。

玉寶皇上天尊。東方聖境妙難思、瑞氣盈鎖翠微。九炁天君興善念、青靈始老握神機。蒼龍昇降隨煙靄、曷谷霽澄瑩日輝。玉寶天尊垂妙力、亡魂升度金扉。和不可思議功德。

玄真萬福天尊。南方聖境號丹天、中有真人體自然。飛霧上騰三氣遠、景風低拂五雲旋。蟠桃爛漫應千載、火棗芬芳定劫年。萬福天尊垂救度、苦魂今得從朱軒。和不可思議功德。

太妙至極天尊。西方聖主號靈君、七氣天中別有春。瓊樹參差凝湛露、瑤光零落散輕塵。龜臺聖母遊遊遍、

鳳闕仙鄉致宴迎。太妙天尊來接引、靈魂有路謁羣仙。和不可思議功德。

玄上行宸天尊。北方真境號仙鄉、快樂由來日月長。環拱紫微懸列象、昭垂星斗燦靈光。雙鬢童子持金簡、

五老真人誦玉章。玄上天尊來救度、普令亡爽得生方。和不可思議功德。

度仙上聖天尊。良維聖境異羣方、長樂慈尊誦九章。閩闕九重凝曉色、琪花千樹散春芳。樽桑地勝飛煙煖、

浴日波澄翠淡光。上聖洪恩垂惠照、亡魂平步陟仙鄉。和不可思議功德。

好生度命天尊。朱門碧瓦巨晴空、玉榜金書異極宮。靄靄飛煙珂影外、雍雍仙駕珮聲中。鸞鳴鳳嘯悠揚遠、

珠藥瑤葩剪刻工。魂爽恍如輕舉至、六銖仙袂自生風。和不可思議功德。

太靈虛皇天尊。坤維雄鎮宅仙真、坐死嘉生四季新。鴛瓦虬簷開月殿、龍樓鳳閣俯星津。深根未斷還年藥、

至藥多逢浩劫人。此境堪迎靈魄去、五雲深處好爲鄰。和不可思議功德。

無量太華天尊。雲衢直與帝闈通、複閣重樓翠積中。桂影飄香乘玉露、月華分彩映朱宮。瑤臺絳闕塵晴漠、

縹渺彤霞拂波穹。普濟真人朝太極、追資靈爽得無窮。和不可思議功德。

玉虛明皇天尊。上方聖境大羅天、一炁分三本自然。玉珮金璫朝太上、霓旌絳節擁真仙。秘文不墜神玄化、

長樂天隨浩劫仙。願度亡靈除積業、雲霞高舉五雲駟。和不可思議功德。

真皇洞神天尊。三山仙洞煙霞、閩苑蓬壺景物嘉。千載不資金鼎藥、四時親賞玉蘭花。魚龍漫衍滄溟闊、鸞

鶴徘徊景異奢。從此神儀遊路遠、勝遊宴處是仙家。和不可思議功德。

また、『黄籙救苦十齋転經儀』は、前文献の儀礼より少し長めの法事となる。「入壇至、東方跪奏」、「つまり東向きに跪く。そして、職位を述べ拝礼した後「奏啓東方玉寶皇上天尊、東郷救苦真人童子、无鞅真衆」とある。更に、「請聖、散花、宿命讚、陞座、演第一遍經」といった神々への奉獻をおこなう。儀式は同様に、「南方跪奏」、「西方跪奏」、「北方跪奏」、「東北方跪奏」、「東南方跪奏」、「西南方跪奏」、「西北方跪奏」、「上方跪奏」、「下方跪奏」と続く。

この跪いて祈り、追善の願いを「奏啓」するのは、それぞれの方位の天尊になる。

『黄録十念儀』は、最も簡略化した追善の法要で、「道場衆等十念如法」では、「稽首東方主、玉寶皇上尊」「稽首南方主、玄真萬福尊」「稽首西方主、太妙至極尊」「稽首北方主、玄上玉晨尊」「稽首東北主、度仙上聖尊」「稽首東南主、好生度命尊」「稽首西南主、太靈虛皇尊」「稽首西北主、無量太華尊」「稽首上方主、玉虛明皇尊」「稽首下方主、真皇洞神尊」といった神格への信奉を説く。ここでは、神は天尊ではなく「尊」と記述される。

上記の科儀書とは別に、唐宋期に撰述されたと思われる『太上洞玄靈寶救苦妙經』⁽³¹⁾にも、各方位に配当される十天尊が記述される。この經の經主は「救苦天尊」で、

慶雲開生門、吉祥煙塞死戸。初爻玄元始、以統祥感機。救一切罪、度一切厄。とその功德を述べ、

十方諸天尊、其数如沙塵。化形十方界、普濟度天人。委氣聚功德、同聲救罪魂。と十方天尊の役割を示す。つまり、十方天尊の救済者としての尊格が存在した。

十方の世界観は、「東西南北」ではなく「東南西北」（太陽の順行）の順番で、さらに四維と上下を加える。これは仏教が道教にもたらしたものであるが、道教儀礼の中では各方位にいる神に祈願することで、十王とは別に死者を供養する方法があつたといえる。

七、十王と十方

『道藏』未収録の文献を収めた『蔵外道書』には、いくつかの十王法事の専門マニュアルがみられる。『上清靈寶濟度大成金書』巻一〇には、三種の十回の追善法要の儀軌が収録される。⁽³²⁾『青玄十真妙齋轉經儀』の注釈

では、「小歩虚第一首、詣東方神位前。奏請東方玉寶皇上天尊、奉請一七泰素妙廣真君、奉請東方風雷地獄主者、散花獻齋。宣拔幽魂真符、宣闕、宣疏、焚疏化紙歸座」とある。「歩虚」は、神への祈りの賛歌を唱えながら、儀礼空間を行道する行為である。即ち、儀礼執行者が（道士）が観念的に神界へ参入することを意味する。以降の神々も次表のように省略された書き方ながら記述される。

東方	玉寶皇上天尊	一・七	泰素妙廣真君	東方風雷地獄主者	
南方	玄真萬福天尊	二・七	陰徳定休真君	南方火翳地獄主者	
西方	太妙至極天尊	三・七	洞明普靜真君	西方金剛地獄	
北方	玄上	四・七			溟冷
東北方	度仙	五・七			鑊湯
東南方	好生	六・七			銅柱
西南方	太靈虛皇	七・七			屠割
西北方	無量太華	百日			火車
上方	玉虛明皇	小祥			普掠
下方	真皇洞神天尊	大祥	五化威靈真君	下方糞穢地獄主者	

同書同巻の他の二つの「十真齋儀」も、ほぼ同様な十方天尊の儀礼を説明する。

また、①『廣成儀制十王転案集』、②『廣成儀制十王大齋右案全集』、③『廣成儀制十王絞經全集』、④『廣成儀制正申冥京十王集』、⑤『廣成儀制十王告簡全集』、⑥『清微十王転案儀制全集』⁽³⁸⁾などもある。この様に多種の科儀書が収録されるのは、「十王法事」が一般化し、死者儀礼に多用されていたという証左となろう。

①『廣成儀制十王転案集』には、「第一殿秦廣大王、姓・蕭、二月初一日生」「第二殿楚江大王、姓・曹、三

月初一日生」「第三殿宋帝大王、姓・黄、二月二十八日生」「第四殿五官大王、姓・韓、正月初八日生」「第五殿閻羅天子、姓・麻、三月初八日生」「第六殿變成大王、姓・昌、二月二十七日生」「第七殿泰山大王、姓・崔、三月初七日生」「第八殿平等大王、姓・于、四月初一日生」「第九殿都市大王、姓・侯、四月初七日生」「第十殿轉輪大王、姓・薛、四月二十二日生」と、俗姓と聖誕日も記述される。⁽³⁹⁾
 これらを概観すれば、『地府十王拔度儀』の天尊と同じ名前を出したり、十王の所在を十方(四方・四維と上下)に次のように配当するものがある。

一七日	秦廣大王	太素妙廣真君	玉寶皇上天尊	東方
二七日	初江大王	陰德定休真君	玄真萬福天尊	南方
三七日	宋帝大王	洞明普靜真君	太妙至極天尊	西方
四七日	五官大王	玄徳五靈真君	玄上玉晨天尊	北方
五七日	閻羅大王	最勝輝靈真君	度仙上聖天尊	東北方
六七日	變成大王	寶肅昭成真君	好生度命天尊	東南方
七七日	泰山大王	玄徳妙成真君	太靈虛皇天尊	西北方
百日	平等大王	無上正度真君	無量大華天尊	西南方
小祥	都市大王	飛魔演慶真君	玉虛明皇天尊	上方
大祥	轉輪大王	五化威靈真君	真皇洞神天尊	下方

この様に、十殿を十方に配当するのは、仏教とは異なった様式、つまり宇宙観、冥界観の異なる法要があったということになる。『蔵外道書』の文献でもいくつかの形式があるので、六つの科儀書を整理すると次表のようになる。

文献名	天尊名	方位
① 廣成儀制十王転案集	○	○
② 廣成儀制十王大齋石案全集	×	×
③ 廣成儀制十王絞經全集	×	×
④ 廣成儀制正申冥京十王集	×	○
⑤ 廣成儀制十王告簡全集	○	○
⑥ 清微十王転案儀制全集	○	○

天尊名が記述される文献は、十王とそれに付随する天尊への拝礼が、同様な比重で行われていた儀礼を述べている。また、天尊を特定の方位に当てるのは、十王法事と習合する以前からの黄籙齋の特長ともいえる。しかも、各忌日にそれを担当する神だけに祈るのではなく、すべての神々を拝礼の対象とする。

さて、道教儀礼では、古くから十方に天尊を想定し、その神への拝礼が重要な要素になっている。たとえば、六朝末の『無上秘要』⁽⁴⁰⁾巻五十四の「黄籙齋品」では(『下元黄籙簡文靈仙品』を引いて)、その儀礼壇の設えを、

當於中庭開壇、四面四隅、上下方合十門、中央縱廣令長二丈四尺、四面標纂榜題門位、上下整飭。十門畢、當於十門外開天門・地戸・日門・月門四隅、合作四門、縱廣令長三丈二尺、名四界都門、安八卦標榜、上下整飭。法師一人於中央行道。

と述べる。つまり、初期道教の儀礼空間と同じように、その中に神像などの祭祀対象を設置することなく、方位を以て神々のパンテオンと交信しようとするものである。十門は、その象徴といえる。齋をおこなう道士は、壇の中央で繞巡し、十方に上香し、叩齒の後に祝文を読み、神々の降臨を請い、十方の天尊に九祖の父母の往生を祈願するとある。この場合、十方天尊は上記の十王に付随する神を指してはいないが、十方に神々を想定

した儀礼である。

早期のインド仏教で仏像が作られなかったのと同様に、初期の道教では神像や神画を用いず、方向や香火によって神格を想定して祈りを捧げた。むしろ、神像のないことが道教の儀礼空間の特徴ともいえる。

唐の仏教者の法琳の『辨正論』⁽⁴¹⁾巻六では、

『陶隱居内傳』云、在茅山中立佛道二堂、隔日朝禮。佛堂有像、道堂無像。王淳『三教論』云、近世道士取活無方、欲人歸信。乃學佛家制立形像、假號天尊、及左右二真人置之道堂、以憑衣食。梁・陸修靜之爲此形也。

と道教の神像の使用を批判している。つまり、本来の道教の儀礼空間には神像はないが、陸修靜が仏像を模倣して形像を作ったというのである。しかし、陸修靜がこのような形式を作ったというのは、歴史的真相とは異なる。陸修靜自身は著書の『陸先生道門科略』⁽⁴²⁾で、

灑掃精肅、常若神居。唯置香爐・香燈・章案・書刀四物而已。必其素淨、政可湛百餘錢耳。比雜俗之家、床座形像幡蓋衆飾、不亦有繁簡之殊、華素之異耶。

と道教者の儀礼空間の「靖室」では、香炉、香燈、机、筆記用の刀の他は置かず、神像や莊嚴具など飾らないと主張する。

また儀礼空間について、陶弘景の『登真隱訣』⁽⁴³⁾巻下の〈入靜法〉には、

某正爾燒香、入靜朝神、乞得八方正氣、來入某身、所啓速聞徑達帝前。畢、乃燒香行事、燒香畢、初向再拜。という。つまり、儀式の場には神像画などはなく、象徴としての香炉のみが設置されていた。しかも、「北向再拜」「東向再拜」「南向再拜」とあり、あわせて四方の諸神への拜礼があった。道教修行の空間で、同じように方向による神の想定は顕著である。朱法満の『要修科儀戒律鈔』⁽⁴⁴⁾巻一〇では、

四靖室者。科曰、道民入化、家家各立靖室、在西向東、安一香火西壁下。天師爲道治之主、入靖、先向西香火存師、再拜、三上香、啓願。次北、次東、次南。訖便出、勿轉顧。科曰、朝半入小治、先向西拜天師、轉向東拜太上。訖出宮闕籙、東向奏章。科曰、朝拜半入治、先向北拜太上、次向東拜九氣丈人、次向南道德君、次向西拜天師。小治並同。

という。つまり、西は「天師の座」で「香火」によって象徴される。他の方向も神像がなくともそれぞれの神が想定されていた。時代が下れば神像や神画が祭祀の対象となるが、方向を重視する。そのため、十王儀礼で方位の重視が受け継がれたのであろう。

八、結び

地獄を死後世界という側面からとらえれば、道教では古くから「九幽」という死者の魂が閉じ込められる場所が想定された。「九」は大地が九層からなるという概念で、天上世界の「九天」や「九霄」に対する語で、黄泉(あの世)の世界の「九泉」とほぼ同じで大地の底を意味した。九幽地獄は九つの方向、つまり四方、四隅と中央にある。普通は東は幽冥、南は幽陰、西は幽夜、北は幽豊、東北は幽都、東南は幽治、西南は幽閔、西北は幽府、中央は幽獄であり、この地獄から死者の魂を救い出すのが九幽拔罪天尊という神だといわれる。

しかし、燃燈を用いて祖霊を地獄から救い出す儀礼のマニユアルである『黄籙破獄燈儀』⁽⁴⁵⁾には、

上元金籙簡文、真仙品格、然燈威儀、科式至重。今齋官某人修建黄籙齋、兼點九幽燈、奉用追薦亡過某人。恭以風雷地獄一切冥官、廣賜慈悲、溥垂開度。伏願黑風殄影、霹靂停聲、戈戟早息於飄飛、肢體不至於分散。使其幽扃輝耀、地獄澄清、拔度亡魂、早超明境。謹懺東方風雷地獄之難、所有符命、謹當告下。

舉玉寶皇上尊
 稱揚上徹十方界 懺念下達九幽中 燈光照耀於東方 風雷地獄悉開曉 飛飛戈飄戟千般苦 分散肢體萬種
 辛 承茲懺念並生天 觀此燈光生天界 和不可思議功德
 とある。これと同様に、九幽すべてに方位と地獄名、天尊が次表のように配当される。

東方	風雷地獄	玉寶皇上尊
東南方	銅柱地獄	好生度命尊
南方	火翳地獄	玄真萬福尊
西南方	屠割地獄	太靈虛皇尊
西方	金剛地獄	太妙至極尊
西北方	火車地獄	無量太華尊
北方	溟冷地獄	玄上玉晨尊
東北方	鑊湯地獄	度仙上聖尊
中央	普掠地獄	上下救苦尊

中央を除外すれば、十方天尊の八方向の八尊と同じである。中央も「上下救苦尊」と記述されているのだから、実質的に冥界に十方があるということにはならないか。

道教の十王信仰は、当初は仏教の模倣から始まるであろうが、儀礼として完成するに及んでは、黄籙齋の死者儀礼のシステムに完全に混入し、道教独自の展開をしたと思われる。十方に天尊を想定し、それぞれに祈念するのであれば、十王の図像を用いようが、省略しようが十王儀礼は成立する。また、道教儀礼の特徴である儀礼執行者(道士)が、神々に願いを直接伝えるという方法に合致しやすい。儀式中の動的要素が多くなり、儀

礼に参加する民衆にとって、可視的かつ物語の如く理解できる。

しかも、忌日に則して、その年日の冥王に救済を依頼するというのではなく、集約的に追善の供養をすることも可能になる。それによつて、死者の死後世界での安楽を祈る儀礼として現在に至っている。

註

- (1) 『旧唐書』卷九六「姚崇伝」。
- (2) 『礼記』(雜記下)に「土三月而葬、是月卒哭」とあり、統治者階層の葬礼では、おおむね三ヶ月で埋葬した。
- (3) 満一年の祖霊祭祀。
- (4) 数え三年(満二年)の祖霊祭祀。
- (5) 『大谷学報』通号八四(一九四一年)所収。
- (6) 拙論「泰山と冥界」(田中純男編『死後の世界』東洋書林、二〇〇〇年、所収)参照。
- (7) 酒井忠夫「太山信仰の研究」(『史潮』第七卷二号、一九三七年)、福永光司『道教思想史研究』(岩波書店、一九八九年)、澤田瑞穂『修訂・地獄変』(平河出版社、一九九一年)参照。
- (8) 『正統蔵』一五〇所収、『閻羅王預修生七往生淨土經』とも。
- (9) 『正統蔵』一五〇所収、「成都麻大聖慈恩寺 沙門藏川 述」とある。
- (10) 「別都頓宣壽(ほととぎす)」や「預彌(よみ)」の語。
- (11) 『時齋念佛懺悔禮文』(大正卷八五、S二二四二)、『大乘四齋日』(大正卷八五、S二五六八)、『地藏菩薩十齋日』(大正卷八五、S二五六八)には、「一日・定光佛、八日・薬師瑠璃光如來、十四日・賢劫千佛、十五日・阿彌陀如來、十八日・地藏菩薩、二十三日・勢至菩薩、二十四日・觀世音菩薩、二十八日・毘盧遮那如來、二十九日薬王菩薩、三十日・釋迦牟尼佛」とある。
- (12) SN五〇八(本稿の『道蔵』は、原則としてシペール(施博爾)・ナンバーで表示する)

- (13) 吉岡義豊「中国民間の地獄十王信仰について」(『吉岡義豊著作集』巻一、五月書房、一九八九年)三五五〜三六五頁参照。
- (14) Stephen Teiser, *The Scripture on the Ten Kings* (University of Hawaii Press, 1994) 二〇〜三〇頁。
- (15) *The Taoist Canon* (Ed. Schipper and Verellen, University of Chicago Press, 2004) 一〇二頁、五五四頁、九八九頁。
- (16) SN三七八
- (17) SN七三
- (18) SN二一五
- (19) SN四六六
- (20) SN一六七
- (21) 「初獻」「亜獻」「終獻」の儀式。
- (22) 『靈宝領教濟度金書』の冥官醮左右班六十神位では、冥界に關係する六十の神々の配置を記述する。十王關係では、「左班。北陰玄天酆都大帝、地府秦素妙広真君、地府洞明普静真君、地府最聖羅靈真君、地府神姿萬靈真君、地府飛魔演慶真君、……」「右班。東嶽天齊仁聖真君、地府陰德定休真君、地府玄德五靈真君、地府保宿昭成真君、地府無上正度真君、地府五化威靈真君、……」とある。一、三、五、七、九殿の奇数の真君は「左班」(向かつて右側)に、二、四、六、八、十殿の偶数の真君は「右班」(向かつて左側)に位置されたことがわかる。この配置通りに図像が置かれて、その前で祈りを捧げるなら、右左に交互に移動しながら儀式が執行されたことになる。
- (23) SN三三六
- (24) SN一二二五
- (25) SN一二三八
- (26) SN八
- (27) SN九八二
- (28) SN五二二
- (29) SN五〇九
- (30) SN五一〇
- (31) SN三七四
- (32) 『藏外道書』一六一三八七〜三九四頁。
- (33) 『藏外道書』一三二六一〜二七四頁。
- (34) 同一三六二八〜六二五頁。
- (35) 同一三六二六〜六三二頁。
- (36) 同一四一四〇〜一四四頁。
- (37) 同一四一三八四〜三九九頁。
- (38) 同一四一四六二〜四七三頁。
- (39) 『三教搜神大全』では、十王の姓を秦広王は蕭、初江王は曹、宋帝王は廉、五官王は黄、閻魔王は韓、變成王は石、泰山王は畢、平等王は于、都市王は薛、転輪王は薛とする。
- (40) SN一二三八
- (41) 『大正新脩大藏經』卷五二、五三五b
- (42) SN一二二七
- (43) SN四二一
- (44) SN四六三
- (45) SN二二三

インド後期密教における数珠

— 『サンヴァローダヤタントラ』第12章および
註釈書『パドミニー』の校訂テキストと訳註—

倉西賢亮(憲一)

はじめに

僧侶にとって、数珠は修法や儀礼において様々な役割を持っており、至極身近な存在である。しかしながら、仏教は始めから数珠を僧侶の持ち物としてはいなかった。元来、仏教僧は基本的に「三衣一鉢」のみ所持を許されており、その後「比丘六物」「比丘十八物」と拡充されてきたが、その中に数珠は入っていなかった。では、いつから数珠が仏教に取り入れられたのであろうか。現存する仏教経典の中で、数珠がはじめて登場するのは、四世紀から五世紀頃の東晋(失訳)『佛説木槵子經』(大正786: 726a9-726b14)と言われている。また、五世紀頃の作例であるアジャンター石窟(第十七窟)に描かれている観音像が数珠をもっていることから¹、おそらく四世紀頃までには、仏教に数珠が導入されたと考えられる²。

数珠は、インドにおいて、古くはヴェーダの時代から作製使用されてきた。数珠の原語は、サンスクリット語のアクシャマーラー(akṣamālā)が一般的である。他にも、ジャパマーラー(japamālā)などと呼ばれる。アクシャマーラーのアクシャ(akṣa)は「サイコロ」やその「目」、そして「眼(球)」を意味し、それが転

¹ 第十七窟以外にも数珠を持つ観音像の作例はあるが、第十七窟の観音像には、ヴァーカータカ朝のハリシェーナ王の治世に寄進されたという銘文があり、制作時期がわかる。詳しくは福山2002を参照。

² 仏教における数珠の受容については、西村2009a、西村2009b、西村2010を参照。

インド後期密教における数珠 (倉西)

じて、「小さな球状のもの」という意味をもつようになった³。マラー(mālā)は、連なりを意味している。そして、この数珠を意味するアクシャマラーのアクシャは、時代が下がるにつれて、様々に哲学的・教理的な意味が付加されていく。数珠は呪文(真言)などの念誦、つまり言葉(音声)との関わりが深いことから、アクシャは母音と子音のすべて、a字からkṣa字までの五十文字を意味していると解釈する⁴。そして、この解釈に起因して、数珠の珠数が五十と規定される⁵こともある。

数珠は汎インド的に宗教道具として、古くから作製使用され、様々に展開してきた。仏教に数珠が取り入れられてから、インド密教、特にインド後期密教においては、修法に応じて、その資具として多様なヴァリエーションが考案された。こうした修法ごとの数珠は、インド密教隆盛期と同時代の他宗教においても、作製方法および材質に共通点が多く見られる。

本稿では、まずインド後期密教における数珠の作製およびそれを使った修法を確認することの出来る数少ない文献資料⁶の一つ『サンヴァローダヤタントラ』第12章と、同タントラの註釈書ラトナラクシタ著『パドミニー』の校訂テキストお

³ アクシャの意味については、語源的に複雑と言わざるを得ない。アクシャは元来「車軸」や「車輪」を意味し、ドイツ語の achse や英語の axis と同じ語源に遡る。

⁴ こうした解釈は、本稿で扱う註釈書『パドミニー』(v.9の註釈)に説かれている。そして、この母音と子音の数は、基本的に僧侶が習得する悉曇の字門と同じである。これは、例えば、比較的初期のヒンドゥー教シヴァ派の典籍である『スヴァヤンブヴァーストラサングラハ (Svayambhuvasūtrasamgraha)』(5.1-5; cf. Törzsök 2012, p. 12) などにも説かれており、汎インド的な解釈であるといえる。

⁵ 本稿で扱う『サンヴァローダヤタントラ (Saṃvarodayatantra)』第12章(第4偈)においても、敬愛法・魅惑法で使用される数珠の珠数は五十と説かれている。『パドミニー (Padmini)』は、修法の中でも残忍なもの以外(息災・増益・敬愛・魅惑など)には、珠数を五十としてもよいとする。珠数については、密教典籍には様々なヴァリエーションが見られるが、仏教における数珠受容初期の『佛説木槵子經』には、百八と説かれており、材質も木槵子(モクロジ)と規定している。

⁶ その他には、『ヘーヴァジュラタントラ (Hevajratātra)』(2-10「念誦の章」)や『サンブトドゥバヴァタントラ (Saṃputodbhavatantra)』(8-2「真言と念誦の観想法の章」)などが挙げられるが、『サンヴァローダヤタントラ』は比較的詳細に説かれている。当然、初期密教や中期密教の文献にも、数珠の種類や作製方法などが説かれている。例えば、『陀羅尼集經』(大正 901: 802c20-803b2)、『蘇悉地羯羅經』(大正 893: 618a7-618a17, 647b23-647c2, 684c29-685a8)、『金剛頂瑜伽中略出念誦經』(大正 866: 248a26-248b5)、『金剛頂瑜伽念誦經』(大正 789: 727c1-728a10)、『マンジュシュリヤムーラカルバ』第12章 (Śāstri 1920: p.118-122 = 『曼殊室利呪藏中校量數珠功德經』大正 787: 726b17-727a10) などが挙げられる。初期・中期の密教文献内に説かれている数珠は、後期密教のそれと比べて、種類・作製法が複雑ではない。

よび訳註⁷を提示し、数珠の文化史的展開を研究する端緒としたい。

『サンヴァローダヤタントラ』第12章のシノプシス

『サンヴァローダヤタントラ』第12章は全体で十五偈からなる。息災法や調伏法など様々な修法で使用される数珠作製や持ち方に関する詳細と念誦法が説かれている。

第1偈 導入	第10～11偈数珠の持ち方
第2～6偈珠の材質と数	第12～15偈 念誦法
第7～9偈 数珠紐	

略号および凡例 (校訂テキストおよび訳註)

写本資料

『サンヴァローダヤタントラ』

Saṃvarodayatantra (SUT)⁸

A … Matsunami 404: 東京大学図書館所蔵、書写年代 1595年

C … Matsunami 401: 東京大学図書館所蔵、書写年代 1751年

L … Cowell and Eggeling No. 38: Royal Asiatic Society London, undated

T … Tucci Mss sscr 4: Tucci Collection, undated

ラトナラクシタ著『パドミニー』

Padmini

T … Takaoka CA17, NS 732

B … Baroda No. 78, VS(?) 1983

⁷ 本稿で取り扱う『サンヴァローダヤタントラ』とその註釈書『パドミニー』については、2014年から種村隆元(大正大学)、加納和雄(駒沢大学)とともに研究を続けており、毎年、その研究成果を提出している。それらの中でも、文献資料については、種村・加納・倉西 2014を、『パドミニー』の著者であるラトナラクシタについては、倉西 2015、Kuranishi 2016を参照されたい。

⁸ 『サンヴァローダヤタントラ』の写本は、一部(第33章20偈d句から終わりまで、Kuranishi 2012参照)貝葉に残っているだけで、現存する写本はすべて紙本である。Tsuda 1974には、第12章は収録されていない。Tsuda 1974では、八本の写本を参照しているが、本稿では、その中の三本(ACL)を、さらにTsuda 1974の使用していないTucci写本を参照し、校訂テキストを作成した。

インド後期密教における数珠 (倉西)

N … NAK 5/2-3 = NGMPP B113/8, NS 1044.

Ra … ~~Tucci's Collection 3. 7. 16~~ (この写本には第 12 章は収録されていない)。

* T 以外の三つの写本は T のアポグラフである⁹。

著者不明『サッドアームナーヤヌサーリニー』

Sadāmnāyānusārīṇī (SĀA)

SĀA … NAK 3/716 = NGMPP A48/11 (= Tucci Collection 3. 5. 4), undated

* 当該文献は『パドミニー』を短くした内容を持っており、『パドミニー』の研究には
欠かせない。詳しくは Kuranishi 2012 を参照。

校訂テキスト内で使用した略号

ac … *ante correctionem*

conj. … a diagnostic conjecture

corr. … a correction

D … デルゲ版

em. … an emendation

hyper. … hypermetrical

hypo. … hypometrical

P … 北京版

pc … *post correctionem*

X … 判読不能な文字。X 一つにつき、一文字。

・写本内の連声は基本的に報告せずにスタンダードに修正した。

・なお、校訂テキストは、見出しや校勘欄・註記などすべて英語を使用した。

参考文献

倉西 2015

倉西憲一「インド密教学僧の学術活動に関する一考察」『密教学研究』第 47 号、pp.
15-28

⁹ 詳しくは種村・加納・倉西 2014 (p.167) を参照。

種村・加納・倉西 2014

種村隆元・加納和雄・倉西憲一「Ratnarakṣita 著 *Padmini* 研究資料概観」『大
正大学総合仏教研究所年報』第 36 号、pp. 163-176

西村 2009a

西村実則「仏教と数珠」『三康文化研究所年報』第 40 号、pp. 105-120

2009b

「仏教における数珠使用の始まり—観音と『木槵子経』—」『三康文化研究所年報』
第 44 号、pp. 23-42

2010

「数珠に関する断章」『三康文化研究所年報』第 41 号、pp. 123-132

福山 2002

福山泰子「アジャンター石窟における観音諸難救済図」『名古屋大学博物館報告』
No. 18, pp. 29-48

Kuranishi 2012

Kuranishi, Kenichi 'On the Manuscript NAK 3/716 (NGMPP A48/11): The
Sadāmnāyānusārīṇī, a Commentary on the *Śaṃvarodayatantra*' 『印度学仏教
学研究』60-3, pp. 147-150

2016

'A Study on Scholarly Activities in the Last Period of the Vikramaśīla Monastery:
Quotations in Ratnarakṣita's *Padmini*' 『東洋文化』第 96 号、pp. 49-61

Mori 2009

Mori, Masahide "Vajrāvalī of Abhayākaragupta Edition of Sanskrit and
Tibetan Versions" vol.2, *Buddhica Britannica XI*

Śāstri 1920

Gaṇapati Śāstri "Āryamañjuśrīmūlakalpaḥ" vol.1, Trivandrum

Törzsök 2012

Judit Törzsök "The alphabet goddess Mātṛkā in some early śaiva Tantras" オ
ープンアクセス: <https://hal.archives-ouvertes.fr/hal-00710939/document>

Tsuda 1974

Tsuda, Shin' ichi "The Śaṃvarodaya-tantra Selected Chapters" The Hokuseido

Press

IMP

“Indian Medicinal Plants: A Compendium of 500 Species” 5 vols., Arya Vaidya
Sala eds., 1996, Orient Longman

[本研究は科研費 (19K00062、18H03569、18K00074) の助成を受けたものである]

Samvarodayatantra Ch.12: Preliminary Edition

[A: 34r2–35r5, C: 16v4–17r6, L: 33r4–34v1, T: 26r1–27v7; D(Tib.)
279v6–280r7]

[Introduction]

śṛṇu yakṣādhipa samyag akṣasūtrasya lakṣaṇam |
5 yena samyagvidhānena sidhyate nātra saṃśayaḥ || 1 ||

[Materials and Numbers]

suvarṇarajatātāmraṃ ca sphaṭikaṃ śaṃkhādīm eva ca |¹
yojayec chāntiṃ puṣṭiṃ tu gulikā śata śāntike || 2 ||
aṣṭottaraśata gulikā² pauṣṭikarmaṇi śasyate³ |
10 rājyahetor japet mantrī śrīsampattisukhotsavam || 3 ||
kuṅkumādi tu gandhādi⁴ pravālam raktacandanabījakam⁵ |
vaśyākṛṣṭiprayogeṣu pañcāśad gulikā sadā || 4 ||
rudrākṣāriṣṭabījam tu narāsthim tu tathaiva ca |

¹ **2ab**: hypermetrical

² **3a**: hypermetrical

³ **3b** The reading C, ‘pauṣṭikarmapranaśyate’, probably suggests that the original text might be ‘pauṣṭikarmasu śasyate’.

⁴ **4a** kuṅkumādi tu gandhādi || The *Padminī* mentions that the other text has a reading ‘kuṅkumādibhir guṭikaiva’ but it is still hypermetrical.

⁵ **4b**: hypermetrical

4 yakṣādhipa || AL; yakṣādhipa CT **5** sidhyate || CLT; simte A
7 suvarṇarajatātāmraṃ || CLT; sūvarṇarajataṃ tāmra° A **7** ca || A;
vā CLT **8** yojayec chāntiṃ puṣṭiṃ tu || PAD; yojayec chāntipuṣṭau A; yo-
jayet sāntipuṣṭiṃ tu CL; yojayet sāntipuṣṭin tu T **8** gulikā śata śān-
tike || CT; gulikāntike A; gulikā śataṃ śāntike L **9** aṣṭottaraśata gu-
likā || A; aṣṭottaraśata gulike CL; aṣṭauttaraśata gulike T **9** pauṣṭi° || CT;
puṣṭi° AL **9** °karmaṇi śasyate || A; °karma pranaśyate C; °karma praśasy-
ate LT **10** rājyahetor || em.; rājyaheto C; rājyaheto A **10** rājyahetor
japet mantrī || ACT; omit L **10** śrīsampatti° || em.; śrīsampatti° AC
11 gandhādi || CL; gadhādihādi A **11** pravālam || A; pravāle CL **11** rakta-
candanabījakam || A; raktacandanabījam C; raktacandanam bījakam L
12 vaśyākṛṣṭi° || ACT; paśyakaṣṭi° L **12** pañcāśad || em.; pañcāśa A;
pañcāśam CL **13** rudrā° || A; ru X drā° C; **13** °riṣṭa° || CT; °riṣṭra° A;
°citta° L **13** narāsthim || CT; narāsthi A; navāsthin L

uṣṭrakharamahiṣāsthi tv abhicāre mūkastambhane⁶ || 5 ||
 15 māraṇoccāṭane vojya vidveṣe^{A34v1} śatrunigrahe |

[Threads]

yathākarma viśeṣeṇa akṣasūtraṃ ca kārayet || 6 ||
 gardabhoṣṭrakeśais tu^{C17r1} kākapakṣeṇa miśritam |
 stambhanoccāṭakarme⁸ tasya sūtreṇa granthitam || 7 ||
 20 hayamahiṣakeśena vidveṣe tasya sūtrayet |
 śmaśānakeśasūtreṇa śvānaromena miśritam || 8 ||
^{T27v1} tasya sūtraṃ praśasyaṃ tu krūrakarmaṇi yojayet⁹ |
 kumārīkarttitasūtreṇa^{L34r1} granthayec chubhakarmaṇi || 9 ||

⁶ **5d** tv abhicāre mūkastambhane || hypermetrical; A possible metrical emendation: °mahīśāsthy abhicāre mūkastambhane.
⁷ **7a**: hypometrical
⁸ **7c**: hypometrical
⁹ **9ab** Tib.: དེལི་སྤྱད་ལུ་བྲག་པོ་ལི། ལས་ལ་བསྐྱེགས་ལྷིར་སྤྱད་བར་བྱ། ≈ * tasya sūtraṃ mantrārtham tu krūrakarmaṇi yojayet.
¹⁰ **9c**: hypermetrical

14 °mahīśāsthim || T; °mahīśāsthi A; °mahikhāsthim C; °mahīśāṣṭi L
14 tv abhicāre mūkastambhane || CLT; tu tva abhicāre mūkastambhanya A
15 māraṇoccāṭane || conj.; māraṇoccāṭanaṃ ACLT **15** vidveṣe || A; vidveṣair C; vidveṣa° LT **17** akṣasūtraṃ || ACL; akṣaṃ sūtraṃ T
18 gardabhoṣṭrakeśais || ALT; gardabhāṣṭrakeśais C **18** miśritam || CT; misitam A **19** stambhanoccāṭakarme || em.; stambhanoccāṭaṃ karme AT; stambhanoccāṭaṃ karmā C; stambhanoccāṭaṃ karma L **19** tasya sūtreṇa granthitam || CT; tasya sūtreṇa grathi A; tasya sūtraṃ praśasyate L (eye-skip-ping) **20** °mahīṣa° || CT; °maṣa° A; hayāpahiṣa° L **20** vidveṣe || em. Tib.; viśeṇa vidveṣe A; vidveṣo CT; dvidvaṣā L **20** tasya sūtrayet || conj.; asya sūtrayoḥ A; akṣasūtrayo CT; asya sūtrake L **21** śmaśānakeśasūtreṇa || ALT; śmaśānakesadhyasūtreṇa C **21** śvānaromena || ACT; svānanomena L **22** sūtraṃ praśasyaṃ tu || sūtraṃ praśasyante AL; sūtrapraveśasya C; sūtrapraśasya T **22** krūrakarmaṇi || A; krūrakarma tu CT; kulakarma tu yō bhavet L **23** granthayec || em.; granthayet C; ganthayet A; granthiyec L; granthiyet T **23** chubhakarmaṇi || em.; śubhakarmaṇi A; śubhakarmake CL; śubhakarma te T

[How to hold and the Pratiṣṭhā]

25 śāntike tarjanīnyastaṃ pauṣṭike madhyamā sadā |
 anāmā vaśyam ity uktam paryantenābhicārataḥ || 10 ||¹¹
 aṅguṣṭhā devatārūpaṃ sarvakarmasu yojayet |
 arhanto gulikā sarve¹² dharmadhātusvarūpataḥ || 11 ||¹³

[Recitation Practice]

30 samāhitam jāpabhāvena¹⁴ akṣasūtraṃ viśeṣataḥ |
^{A35v1} kṛtayuge japed ekas tretāyām dviguṇam japet || 12 ||
 dvāpare triguṇam proktaṃ kalau jāpaś caturguṇam |
 japen mantram avicchinnam catvāro mantrarūpataḥ || 13 ||
 pravayāharam idaṃ jāpam akṣasūtrādisaṃgraham |

¹¹ cf. *Samputodbhavantra* 8-2, v.15: śāntike krodhopavinyastaṃ pauṣṭike madhyatatvataḥ | anāmikā vaśyam ity uktam paryantam abhicārataḥ || * krodha = tarjanī (*Āmnāyamañjarī* 274v7)
¹² **11c** arhantaḥ sarvagulikā || Tib. has a different reading: རིལ་ལུ་དབྱེ་བཅོམ་མངོ་ལོ་ལོ་ལོ་ལོ། | .
¹³ cf. *Samputodbhavantra* 8-2, v.9cd: arhanto guḍikā sarve stūpasyopari kalpitāḥ ||
¹⁴ **12a**: hypermetrical

25 °nyastaṃ || LT; nyasta A; nyaṣṭavo? C **25** pauṣṭike || CLT; prauṣṭike A **25** madhyamā || A; madhyame CLT **25** sadā || AL; sadāḥ CT **26** paryantenābhicārataḥ || em.; paryantenābhicāralataḥ A; paryantenābhicārataḥ L; paryantanābhicārataḥ CT **27** aṅguṣṭhā || CLT; aṅguṣṭhā A **28** arhanto gulikā sarve || em.; ahanta gulikā sarva° A; ahante gulikā sarva° C; arhanta alikāṃ sarva° L; arhanta gulikāṃ sarve T **28** dharmadhātusvarūpataḥ || ACT; dharmadhātusvarūpakāḥ L **30** akṣasūtraṃ || ALT; akṣasūtraṃ C **30** viśeṣataḥ || CLT; viśeṣitam A **31** kṛtayuge japed ekas || CLT; kṛta yujayed ekaṃ A **31** tretāyām dviguṇam || LT; tretāyā dviguṇam C; tretāyādiguṇam A **32** T mistakenly inserts ‘arhanta gulikāṃ’ before this verse. **32** jāpaś || A; jāpa CT; jāpaṃ L **32** caturguṇam || C; catuguṇāḥ A; catuguṇam L; caturguṇā T **33** japen || em.; japet ACT; japat L **34** pravayāharam || ACT; pratyāharam L **34** akṣasūtrādi° || ALT; akṣasūtrādi° C **34** saṃgraham || CLT; saṃgram A

35 upalambhaṃ devatārūpaṃ¹⁵ spharaṇasaṃharaṇātmaṃ || 14 ||¹⁶
āgatā gati saṃcintya saṃketamantratattvataḥ |
trayakoṭivinirmuktaṃ tathatā pāramārthikam |
eteṣāṃ mantrajāpasya lakṣaṇaṃ vidhir ucyate || 15 ||
L34v1

[Chapter Colophon]

40 iti mantrajāpākṣamālānirdeśapaṭalo dvādaśaḥ ||

¹⁵ 14c: hypermetrical. But ‘upa’ could be resolution.

¹⁶ 14d: hypermetrical

35 upalambhaṃ devatārūpaṃ || em.; upalambhadevatārūtā rūpaṃ A; upalambhe devatārūpaṃ C; uparūpaṃ devatolambhaṃ L; upalambhadevatārūpa° T 35 spharaṇasaṃharaṇātmaṃ || CT; spharaṇaṃ saṃharaṇātmaṃ A; spharaṇat saṃharaṇātmaṃ L 36 āgatā gati || AL; āgatāgata CT 36 saṃcintya || ACT; sañcitya L 37 trayakoṭivinirmuktaṃ || conj.; trayakoṭimiviniṃkta A 37 tathatā || AC; tathātā T; pathatā L 37 pāramārthikam || ACL; pārarthikaṃ T 38 vidhir || A; vidhim CLT 40 iti mantrajāpākṣamālānirdeśapaṭalo || A; iti mantrajāpākṣamālānirdeśapaṭalaḥ CT; iti śrīsamvarodayamahātantre jāpamālānirdeśapaṭalaḥ L

『サンヴァローダヤタントラ』第12章 試訳

「真言念誦のための数珠の教示」

導入

第1偈

ヤクシャの王よ、正しく聞け、数珠の特徴を。なぜなら、[この] 正しいやり方によって [諸数珠は] 成就する。疑いなし。

珠の特徴 (材質と数)

第2偈

金、銀、銅、水晶、同様に法螺貝などを、息災と増益に適用すべし。息災に関する珠は百である。

第3偈

増益行の場合、百八の珠が認められている。真言行者は王国のため、吉祥の円満や楽の宴のために、念誦すべし。

第4偈

敬愛法、魅惑法の場合、ククマ (サフラン) など、塗香など [を塗った珠]、サンゴ、赤梅檀の種が [珠] である。[これらの修法の場合は] 常に、五十の珠である¹⁰。

第5～6ab偈

ルドラクシャ¹¹とアリシュタの種¹²、人骨、同様にラクダや象、水牛の骨は、調伏法の場合、沈黙法と硬直法に、殺害法と放逐法に適用され、嫌悪法、征敵法の場合¹³ [に適用される]。

¹⁰ タントラ本文だけで理解すると、敬愛法と魅惑法のみ、珠数が五十であると理解できるが、『パドミニ』の解釈では、息災法や増益法なども含めて、五十とすることもあるとしている。

¹¹ 「ルドラ (=シヴァ) の眼」はジュズボダイジュの種のこと。

¹² 「アリシュタ」というのは、木樨子 (モクロジ) のこと。

¹³ ここでは修法ごとに珠の素材が挙げられている。順にルドラの眼は調伏法、アリシュタの種は沈黙法と硬直法、人骨は殺害法、ラクダと象の骨は放逐法、水牛の骨は嫌悪法および征敵法に当てられる。調伏法などの珠数については、タントラ本文では言及されていないが、『パドミニ』には、六十と規定されている。

数珠紐について

第 6cd ~ 7 偈

個別に、[修法目的の] 儀軌に従って、数珠 (akṣasūtra) を作製すべし。硬直法と放逐法の場合、ろば、ラクダの毛と、カラスの羽を加えて、その (数珠の) 紐¹⁴と編み込まれる。

第 8 偈

嫌悪法の場合、馬と水牛の毛と編み込むべし。屍林で入手した毛の紐と、雌犬の毛と [縫り] 合わせる。

第 9 偈

その認められた紐を、諸残忍な修法 (調伏法) に適用すべし。諸繁栄 (śubha) の修法 (息災・増益など) の場合、クマーリーによって縫られた紐と編み込むべし。

数珠の持ち方と開眼

第 10 偈¹⁵

息災の場合、常に人差し指に置かれる。増益の場合、中指に [置かれる]。無名指は、敬愛であると言われる。小指 (paryantena) は、調伏法に関して。

第 11 偈

親指が、尊格の本質であり、すべての修法に適用すべし。すべての珠は、法界を自性とするので、尊崇されるものである。

念誦法について

第 12 偈

念誦に専心することによって、個別 (各修法) の数珠に集中する。第一ユガ (kṛtayuga) には、1 [ラクシャ] を念誦すべし。第二ユガ (tretā) には、二倍 (2

¹⁴ 「その紐と (tasya sūtreṇa)」の「その (tasya)」の意味は、『パドミニ』は註釈していない。おそらく、すべての修法に共通の基本となる紐 (第 6 偈 d 句 akṣasūtraṅ) の素材があり、それと修法ごとに規定されているロバやラクダの毛などを編み込むことを意図していると考えられる。なお、『パドミニ』には、数珠紐の項は註釈されていない。

¹⁵ 『サンブトードゥバヴァタントラ』8-2 (第 30 章) にも同じ数珠の持ち方が説かれている (タントラの校訂テキスト註参照)。

ラクシャ) を念誦すべし。

第 13 偈

第三ユガ (dvāpara) において、三倍 (3 ラクシャ) といわれている。カリユガにおいては、四倍 (4 ラクシャ) の念誦である。マントラの本質に基づいて、四度、間断なく、真言を念誦すべし。

第 14 偈

この念誦は音声 (pravayāhāra) である。数珠などの集まりは、諸尊格の姿に依拠 (upalambha) し、発散と収斂を本質としている。

第 15 偈

標示 (saṃketa) と真言の真実に従って、[風 (呼吸) が] やってきて、去るのを観想して、三コーティから解脱し、真如であり、勝義に関する [方法] (pāramārthika) である。以上、真言念誦の特徴 [と] 方法が説かれた。

真言の念誦のための数珠の教示、第 12 章。

Padminī Ch.12: Preliminary Edition

[T: 19v7–20r5, B: 35r1–35v7, N: 41.10–43.9, D: 38a3–38b7, P: 44r8–45r6]

akṣamālā katham yuktiḥ ke te jāpasya lakṣaṇam ity¹
ekaviṃśatitamādipraśnadvayavisarjanāyāha, **śṛṅṅv** (1a) ityādi
5 subodham.

tatra **suvarṇetyādy** (2a) uddeśaḥ. **yojayec chāntim puṣṭim**
tv (2c) iti, suvarṇatāmradikṛtā guṭikā puṣṭau, rūpyasphaṭika-
śāṅkhādikṛtā śāntau, yojayed ity arthaḥ.

kuṅkumādi tu gandhādīti (4a) karmānurūpavarṇagandhā-
10 diguṭikāpralepane. yojayed iti pūrveṇa saṁbandhaḥ. kuṅkumā-
dibhir guṭikaiveti kaścit.

pañcāśad guṭikā sadeti (4d) ālikālivisuddhyā. ata eva
sārvakārmikīyaṁ pañcāśaṅguṭikābhiḥ kṛtā mālā. krūra-
karmaṇi tu ^{N42}saṣṭiguṭikābhiḥ.

aṅguṣṭhā devatārūpam iti (11a) aṅguṣṭho 'ṅkuśavaṅ guṭikā-
rūpadevatākarṣaṇāya sarvakarmasu yojayet. **arhanto guṭi-**
kā sarva iti (11c) jāpyamantradevatārūpāḥ sarvā guṭikāḥ.
dharmadhātusvarūpata iti (11d) [†]uparī[†]guṭikā dharmā-
dhātuḥ stūparūpety arthaḥ. balavaiśāradyādirūpāparāpi guṭikā
20 kriyata iti kvacid uktam². etenākṣasūtrapraṭiṣṭhā sūcitā³.

¹ *Samvarodayatantra* Ch.1 v.6ab

² Abhayākara Gupta's *Āmnāyamañjarī* (8.2 = ch.30; D274v3, P308r4) or *Vajrāvalī* 17.16 (Ed. p. 362, l.19)

³ cf. *Vajrāvalī* 17.16 (Ed. p. 362)

9 gandhādīti || TN; gandhād iti B **13** sārvakārmikīyaṁ || N;
sārvakarṣikīyaṁ T; sārvakampekīyaṁ B **13** pañcāśaṅguṭikā-
bhiḥ || TB; pañcāśaṅguṭikābhiḥ N **15** 'ṅkuśavaṅ || TN; 'karāva B
17 arhanto guṭikā sarva || conj.; arhanta sarvagūṭikā sarva TBN
18 guṭikā || em.; guṭi TN; guṭikā B **19** stūpa° || em.; tūpa° TN;
rūpa° B **19** °rūpāparāpi || em.; °rūpā'parāpi TBN

samāhitam iti (12a) sthiracittam yathā bhavati tathā japa-
bhāvabhāvanābhyāṁ akṣasūtraguṭikā devatārūpā aṅguṣṭhenā-
karṣaṇa mantreṇa saṁbodhayaṅ japed iti bhāvaḥ.

kṛtayuge japed eka iti (12c) yasya mantrasyaikalakṣa-
25 japa ukto dvilakṣādir vā. taddviguṇādis tūttaratre prati-
pattavyam iti. **catvāro mantrarūpata** iti (13d) caturvidhi-
mantrajāpaḥ. etad eva nirdiśati, **pravṛyāhāretyādi** (14a).

āgatā gatīti (15a) gatyāgatisthitayo vāyor ity arthaḥ. etac
candrasūryapathapañcanirdeśapaṭale mantratattvapraśtāvasya

30 jñātavyaṁ. iha tu praśtuto vāgijāpaḥ. **trayakoṭivinirmuktam**
ity (15c) utpādisthitibhaṅgarahitaṁ, yad vā praveśasthiti-
vyutthānarahito 'vadhūtyāṁ niścalībhūtaḥ pavanaḥ.

etenaitad uktam. ^{N43}nirmāṅambhojagarbhasṭhanādād dhr̥dayādy-
anyatamajapyamantra uccāryamāṇo dakṣiṇena niśṛtya maṅḍala-
35 cakrākāreṇa sphāritvā jagadarthaṁ kṛtvā vāmena dravī-
bhūya praviśan tathaiva nisaramś ca bhāvayan sthairyā-
lābhān mantrasiddhiḥ.

etad evopasaṁharati, **eteṣāṁ** ityādi (15e). etad eva mantra-
jāpasya lakṣaṇaṁ vidhiś ca nirucyata ity arthaḥ.

40 iti dvādaśapaṭalavyākhyā.

21 yathā bhavati || TN; yathā vati B **23** °ākaraṣaṇ || corr.^{pc};
ārkaṣaṇ^{ac} Ms **23** mantreṇa saṁbodhayaṅ || var. Tib. ལྷགས་
ཀྱིས་ འཛོད་ པའི་ ལྷོས་ ལྱིས་ (D38b1–b2, P44v7) **25** °lakṣajapa ukto || N;
corr.^{pc} margin; °lakṣa^{oac} T; °lakṣa ukto B **25** taddviguṇādis || em.;
corr. ^{pc}; ta[ta] dviguṇādis^{ac} T; tataḥ dviguṇādis BN **27** pravṛ-
yāhāretyādi || em. SUT, SĀA; pratyāhāretyādi TBN **29** mantra-
tattva° || N; mantram tattva° TB **30** praśtuto || N; puśtuto TB
30 vāgijāpaḥ || TN; vājāpaḥ B **31** trayakoṭivinirmuktam ity || em.;
trayakoṭivinirmuktam iti. TBN **32** 'vadhūtyāṁ || TN; 'vaṣṭab-
hyāṁ B **33** °sthanādādd || BN; corr. ^{pc}; °sthamādādd^{ac} T
33 dhr̥dayādy° || em. Tib. ལྷོད་པོ་ལ་ ལྷགས་པའི་ (D38b5, P45r4); corr. dhr̥-
dayād^{pc}; dhr̥tayād^{ac} T; dhr̥dayād N; dhr̥tayād B **38** etad evo° || N;
corr. ^{pc}; etavo^{ac} T; etavo B

『パドミニー』第12章 試訳

第1偈

どのような数珠が適切なのか？ 何が念誦の特徴なのかという第21番目をはじめとする二つの質問¹⁶に返答するために、[世尊]は「聞け」云々とおっしゃった。[この偈は]理解しやすい。

第2-4偈

そこで、「金」云々というのが、教示である。「息災と増益に適用すべし」とは、増益には、金、銅などで作られた珠、息災には、銀、水晶、法螺貝などで作られた[珠]が、適用されるべしという意味である。「サフランなど、香など」というのは、修法(karman)に従った色の塗香などによって、珠が塗られる際[を意味している]。前述の「適用すべし」と結びつく。[このAB句には]「サフランなどによって、まさに珠が」という別読みがある¹⁷。「常に50の珠である」というのは、母音と子音の清浄によってである。それはすなわち、すべての修法に関わるこの連なりは50の珠によって作られる。ただ、残忍な修法の場合は、60の珠によってである。

第5-10偈 註釈なし

第11偈

「親指は尊格の本質」というのは、鉤のようにした親指が、珠の姿をした尊格を引き寄せる¹⁸ために、すべての修法に適用されるべし。「すべての珠は尊崇されるものである」とは、すべてが念誦されるマントラと尊格の本質であり、珠である。「法界を自性とするから」とは、上の珠(母珠)は、法界であり、仏塔の本質(形)を

¹⁶ 『サンヴァローダヤタントラ』第1章(第6偈ab句)にある金剛手(Vajrapāṇi)が世尊に尋ねた質問中の21番目と22番目を指す。

¹⁷ ラトナラクシタは「iti kaścīc」と別の読みを提示しており、当時から複数の読みがあったことが伺える。

¹⁸ 親指が尊格を引き寄せるというのは、まさに親指が数珠を繰る動作のことを指している。

持つという意味である。さらに、[母珠以外の]他の珠は力無畏などの本質をもつものとして作られると[ある文献内¹⁹で]言われている。これ(以下のこと)は、数珠のプラティシュター(開眼儀礼)²⁰を意図している。

第12-15偈

「集中する」とは、堅固な心となるように、念誦法と観想法の両方を通して、数珠の珠が尊格の本質として、親指によって、引き寄せられ、真言によって、正しく理解され²¹(saṃbodhayañ; Tib. 唱えるやり方で 'bod pa'i tshul)、念誦するべしという意味図である。

「第一ユガ期には、一度念誦すべし」とは、マントラの1ラクシャの念誦とされており、あるいは2ラクシャなど[とも言われる]。しかし、その「二度(dviguṇa-)」云々は、その後に適用されるべきであると[言われる]。「四度、マントラの本質に基づいて」とは、四種のマントラ念誦²²[に基づいてという意味である]。[これら念誦法の教示のため]、まさに以下「言葉の念誦(pravyāhara)」云々と教示される。「やってきて、去って」というのは、風(呼吸)の往、来、滞在という意味である。このことは、真言の真実の導入である「月と太陽の五つの道の教示」という章(第6章)において知られるべきである。しかし、この[章]では、[呼吸法が主題ではなく]称賛(prastuṭaḥ)であり、言葉[を使う]念誦である。「3コーティからの解脱」とは、生起・維持・消滅から離れた、あるいは、入[定]・維持・出[定]から離れた、アヴァドゥーティー(中心の脈管)において、風が安定する[ことである]。

¹⁹ ラトナラクシタは、明確に引用元を提示していないが、彼が大きく影響を受けた学僧アバヤーカラグプタの『ヴァジュラーヴァリー(Vajrāvali)』(17.16, Ed. p. 362)、あるいは『アームナーヤマンジャリー(Āmnāñyamañjari)』(8.2 = ch.30)からの引用であると考えられる。ラトナラクシタは『パドミニー』の中で、引用元を挙げずに、アバヤーカラグプタの著作を頻りに援用している。

²⁰ 数珠の開眼儀礼については、上記『ヴァジュラーヴァリー』(17.16)に詳しい。

²¹ 「真言によって正しく理解され」というのは、意味的に判然としなない。チベット語訳は、異なる文章「マントラを唱えるやり方とともに(sngags kyis bod pa'i tshul gyis)」を予想させることから、サンスクリット語テキスト自体に問題があると考えられる。

²² 四種のマントラ念誦法というのは、上記、第一ユガからカリユガ(第四ユガ)までの念誦法であると考えられるが、タントラ本文および『パドミニー』の註釈から詳細は読み取れない。おそらく、ここで説かれているユガは、実際の循環する四つの時期のことではなく、何か象徴的なことであろうと考えられる。

インド後期密教における数珠 (倉西)

詳しくは以下である。変化した蓮華の中心に位置するナーダから、唱えられつつある心呪など何か念誦されるマントラが²³、右 [の脈管 (ラサナー)] を通って、曼荼羅輪の姿をとって、発散し、衆生利益をおこない、左 [の脈管 (ララナー)] を通って、液体になり、まさにありのままに入り、そして、流れていると観想すれば、堅固さを獲得するので、マントラが成就するのである。

まさに、まとめて、「以上」云々という。まさに、以上が、念誦の特徴と方法が解説されたという意味である

第 12 章の註釈 [終了]。

²³ 写本にある読みを採るならば、「変化した蓮華の中心に位置するナーダである心臓から、唱えられつつある何か念誦されるマントラが」となる。本稿では、チベット語訳の読みに則った。

『底哩三昧耶王成就法』校訂テキストと和訳 (1)

横山裕明

1. はじめに

本稿は、『底哩三昧耶王経』(*Trisamayārājantra*. 以下、TRT)に基づく成就法であるクムデーカラマティ著『底哩三昧耶王成就法』(*Trisamayārājasādhana*)の予備的なSktおよびTib校訂テキストと和訳を提示するものである。予め断っておくが、Bhattacharyya氏による*Sāghanamālā / Sāghanasamuccaya*(以下、SM)の校訂本Bhattacharyya 1925には、*Trisamayārājasādhana*という同じ題名を持つ2つの文献が確認できる。それらはBhattacharyya 1925に掲載されている成就法リストのno.1とno.2が該当する。詳細は横山2020で既に述べたため割愛するが、no.2は一部の資料において*Trisamayāsamayasādhana*という題名が確認できる¹。したがって、本稿ではno.1をTRS、no.2をTSSと呼び分ける。

さて、まずはそれらの成就法の背景にあるTRTおよびその関連文献に関して述べる。TRTは底哩三昧耶王系経軌の中心経典であり、様々な文献に引用が見られる。特にシャーンティデーヴァ著*Śikṣāsamuccaya*に複数の引用が見出せることから7世紀前後には既に現行のものに近い形が出来上がっていたと考えられる。そして、TRTの関連文献として日本では不空訳『底哩三昧耶不動尊威怒王使者念誦法』一卷(大正蔵1200, 以下『念誦法』)と不空訳『底哩三昧耶不動尊聖者念誦秘密法』三卷(大正蔵1201, 以下『秘密法』)の2つがよく知られている。特に『念誦法』は弘法大師空海が唐より請来した経軌のひとつとして有名であり、『御請来目録』および『三学録』では『念誦法』を指して「底哩三昧耶経」と記述している²。なお、『三学録』によれば、『念誦法』は胎蔵宗教に分類される³。実際に先行研究において、

『念誦法』の背景にある TRT は『三学録』で同じく胎藏宗教に分類される『大日経』との関係が指摘されている⁴。また、底哩三昧耶王系経軌は真言宗で日常的に読誦される「不動讃」の典拠とされることから後代に大きな影響を与えた文献といえる⁵。しかし、底哩三昧耶王系経軌の中心経典である TRT は Skt 写本および漢訳が存在しておらず、Tib 訳に頼らざるを得ないために研究があまり進んでいない。したがって、TRT の Skt を部分的に確認することが可能な TRS と TSS は、TRT を始めとする底哩三昧耶王系経軌を解明する手掛かりとなる貴重な資料である。

ところで、Bhattacharyya 氏による TRS および TSS の Skt 校訂テキストは、1 世紀ほど前に出版されたものであるため最新の研究成果に基づいて修正すべき箇所が散見される。また、Bhattacharyya 1925 では用いられなかった Tib 訳を反映させることで校訂の精度を上げる必要もある。さらに、TRS および TSS 全体の現代語訳は未だ公表されていない。このように TRS および TSS には多くの研究余地が残されているのが現状である。そこで、手始めに TRS の前半部分の予備的な Skt および Tib 校訂テキストと和訳を本稿で提示したい。

2. TRS の Skt 写本について

先に述べた通り、TRS は SM に収録されており、複数の Skt 写本を確認することが可能である。本稿では、より多くの異読を確認するために、Bhattacharyya 1925 で示された校訂に加えて以下の 4 つの Skt 写本を使用する。

Skt 校訂本：Bhattacharyya, Benoytosh (Ed.). 1925. *Sādhanamālā*, Central Library, Baroda.

Skt 写本：*Sādhanasamuccaya*: Tokyo University Library ID 1683・1684・1685・1686

= Matsunami New no. 451・452・453・454, 東京大学総合図書館所蔵,
<http://utlslkts.ioc.u-tokyo.ac.jp> (Accessed November 30, 2020).

便宜上、以下では上記の Tokyo University Library ID 1683 を①、ID 1684 を②、ID 1685 を③、ID1686 を④と表記する。

3. TRS の Tib 訳について

現在のところ TRS の Tib 訳は二種が確認できる。1 つはアバヤーカラグプタ⁶とツルティム・ギエンツェン⁷の共訳 (以下、TibA)、もう 1 つはタクパ・ギエンツェン⁸の訳 (以下、TibB) である。両訳は使用される訳語が大幅に異なっており、別々に成立した異訳と考えられる。

TibA: Toh. 3144, Ota. 3965.

(アバヤーカラグプタとツルティム・ギエンツェンの共訳)

TibB: Toh. 3400, Ota. 4221. (タクパ・ギエンツェン訳)

なお、先行研究⁹によれば、TibA を含む一連の SM の Tib 訳 (*sgrub thabs brgya rtsa* Toh. 3143-3304, Ota. 3964-4126) には 162 または 163 の成就法が説かれ、TibB を含む一連の SM の Tib 訳 (*sgrub thabs rgya mtsho* Toh. 3400-3644, Ota. 4221-4466) には 245 または 246 の成就法が説かれている。また、数だけでは無く成就法の配列もそれぞれ異なっているという点に注意が必要である。

4. TRS の概要

ここでは TRS の概要について述べる。TRS は内容によって 33 項目に分けることができるが、分量は項目ごとに大きく異なる。本稿で提示するセクション 1 から 14 は全体のおよそ 3 分の 1 の分量に当たり、プールヴァセーヴァーや懺悔などが示される導入部に該当する。なお、本稿の校訂テキストに関する研究成果は国外発信も視野に入れたものであるため、英語あるいは Skt を用いた概要を ()

内で併記する。

	概要 (Contents)
§1	【帰敬・吉祥偈】 (Salutation, <i>Maṅgalaśloka</i> s)
§2	【擇地】 (Selecting a suitable place for the practice)
§3	【根本明呪・金剛句】 (<i>Mūlavidyā</i> , <i>Vajrapaḍā</i>)
§4	【百字真言】 (<i>Śatākṣaraḥṛdaya</i>)
§5	【プールヴァセーヴァー】 (<i>Pūrvasevā</i>)
§6	【発菩提心】 (Generating <i>Bodhicitta</i>)
§7	【障礙の破壊】 (Breaking <i>Vighna</i>)
§8	【入我我入】 (<i>Nyūga-ganyū</i>)
§9	【懺悔】 (<i>Pāpadeśanā</i>)
§10	【随喜】 (<i>Anumodana</i>)
§11	【印とマントラの三昧耶】 (<i>Samaya</i> of <i>Mudrā</i> and <i>Mantra</i>)
§12	【不動尊への祈願】 (Pray for <i>Acala</i>)
§13	【不動尊の讃嘆】 (Praise for <i>Acala</i>)
§14	【守護尊たちの布置】 (Placement of guardian deities)
§15	【甲冑】 (<i>Kavaca</i>)
§16	【金剛坐】 (<i>Vajrāsana</i>)
§17	【金剛祠】 (<i>Vajrakavaca</i>)
§18	【金剛牆】 (<i>Vajraprākāra</i>)
§19	【金剛網】 (<i>Vajrapañjara</i>)
§20	【金剛火】 (<i>Vajrajvālā</i>)
§21	【結界】 (<i>Simābandhana</i>)
§22	【献闕伽】 (Offering <i>Argha</i>)
§23	【五供養】 (<i>Pañcapājā</i>)
§24	【実体の供養】 (<i>Pūjā</i> on reality)
§25	【観想上の供養】 (<i>Pūjā</i> on imaginary)
§26	【讃嘆・廻向】 (<i>Saṅgīti</i> , <i>Pariṇāma</i>)
§27	【一切仏菩薩の加持】 (<i>Sarvabuddhabośisattvādhiṣṭhāna</i>)
§28	【魔の消除】 (Removal of <i>māra</i>)
§29	【速疾なる悉地のために】 (<i>Śighrasiddhyartha</i>)

§30	【日常法則】 (Daily activity)
§31	【大いなる徴候】 (<i>Mahānimitta</i>)
§32	【悉地】 (<i>Siddhi</i>)
§33	【奥書】 (Colophon)

5. 凡例 (Sigla)

A: Bhattacharyya 1925 が示した A 写本の読みを示す場合に用いる。(It indicates the reading of the Skt MSS “A” based on Bhattacharyya 1925. This MSS is the catalogue no. 74 in Shastri 1917.) cf. Bhattacharyya 1925 p. xi, and Shastri 1917 pp. 114-115.

D: デルゲ版チベット大蔵経。(Derge Edition of the Tibetan Buddhist Canons.)

Ed.: Edition. (=Bhattacharyya 1925)

em.: emendation.

MS(S) : Manuscript(S).

N: Bhattacharyya 1925 が示した N 写本の読みを示す場合に用いる。(It indicates the reading of the Skt MSS “N” based on Bhattacharyya 1925. The MSS is the catalogue no. 387 in Shastri 1905.) cf. Bhattacharyya 1925 p. xii, and Shastri 1905 pp. 83-84.

Na: Bhattacharyya 1925 が示した Na 写本の読みを示す場合に用いる。(It indicates the reading of the Skt MSS “Na” based on Bhattacharyya 1925. It is numbered 603 in the Library register of the Nepal durbar Library.) cf. Bhattacharyya 1925 p. xiii.

no.: numero.

om.: omitted.

Ota.: 大谷目録：大谷大学監修・西藏大蔵経研究会編輯。『影印北京版西藏大蔵経—大谷大学図書館蔵—総目録附索引』鈴木学術財団、東京、1962。

(*The Tibetan Tripitaka, Peking Edition kept in the Library of the Otani University, Kyoto: Reprinted under the Supervision of the Otani University of Kyoto: Catalogue & Index*, Suzuki Research Institute, Tokyo, 1962).

P: 北京版チベット大蔵経。(Peking Edition of the Tibetan Buddhist Canons.)

r: recto.

Toh.: 東北目録: 東北帝国大学法文学部編。『西藏大蔵経総目録東北大学所蔵版』東北帝国大学、仙台、1934。(A complete Catalogue of the Tibetan Buddhist Canons, Tohoku Imperial University, Sendai, 1934).

v: verso.

+ : 判読できない文字は1字につき+を1つ示す。(It indicates an unreadable character.)

... : 脚註で本文を挙げる際に、文章の一部を省略する場合は...を付ける。(It indicates a partial omission of the sentence.)

° : 脚註で本文を挙げる際に、熟語の一部を省略する場合は°を付ける。(It indicates a partial omission of the idiom.)

† ... † : どのように読むべきか解決できず、問題のある箇所は†で括る。試訳は暫定的なものを示す。(A part enclosed with daggers which is difficult to figure out.)

< mantra (no.) > : 本文献におけるマントラ・明呪・心呪の通し番号を示す。(It indicates the number of mantras, vidyās, hṛdayas and vajrapādas in the literature.)

< verse (no.) > : 本文献における偈頌の通し番号を示す。(It indicates the number of verses in the literature.)

※以下に該当する場合、校勘欄に表示することなく校訂する。(In this edition, cases of germination, variants of homorganic nasal or *anusvāra*, the non-applications of external sandhi, etc. are silently emended.)

a) r の後が二重子音化している単語の標準化 (standardization)。

e.g.) dharmma → dharma.

b) 二重子音が単子音化している単語の標準化 (standardization)。

e.g.) satva → sattva

c) ṅ, ñ, ṇ, n, m, ṁ 間あるいは b, v 間、r, l 間、ś, ṣ, s 間での置換。

e.g.) samvara → saṃvara. raukika → laukika.

* 但し、変換前の形が別単語として存在する場合には校勘欄に表示する。

d) avagraha の補填。

e.g.) so pi → so 'pi.

e) キャンセル記号が付いている文字の削除。(To delete characters with a cancel symbol.)

f) comma (,), period (.), daṇḍa (/), shad (|) の補填と削除。

g) Tib 各版で表記方法が異なっている同一単語の表記の統一。

e.g.) pa dma, pa d+ma, pad ma → pa d+ma.

6. TRS 校訂テキスト

Trisamayarājasādhana

[Author]; Kumudākaramati.

[Skt MSS.];

①=Tokyo University Library ID 1683, Matsunami new no.451 (1v1 - 7v3).

②=Tokyo University Library ID 1684, Matsunami new no.452 (1v1 - 5v8).

③=Tokyo University Library ID 1685, Matsunami new no.453 (1v1 - 7v3).

④=Tokyo University Library ID 1686, Matsunami new no.454 (1v1 - 5r8).

[Ed.];

Bhattacharyya, Benoytosh.1925. *Sāadhanamālā*, Central Library, Baroda.

[Tib.];

TibA = translated by Abhayākara[gupta] & tshul khrim s rgyal mtshan;

Toh. 3144 (D163r1-169v2), Ota. 3965 (P200v5-209v1).

TibB = translated by grags pa rgyal mtshan;

Toh. 3400 (D60v1-66r4), Ota. 4221 (P76v6-84r4).

1 [TibA; D163r1-, P200v5-]

2 ལྷོ་གར་སྐད་དུ། རི་ས་མ་ཡ་རྩ་ཇོ་སྤྱོད་ལྷོ་གར་སྐད་དུ། དམ་ཚོག་གསུམ་གྱི་རྒྱལ་པོའི་སྐྱབ་པའི་ཐབས།
D163r

3 [TibB; D60v1-, P76v6-]

4 ལྷོ་གར་སྐད་དུ། ལྷོ་ག་ན་ས་སྤྱོད་ལ་རྩ་མོ། ལོད་སྐད་དུ། ལྷོ་ག་ཐབས་ཀྱི་ལས་བཏུས་པ་ཞེས་བྱ་བ།
D60v

1

2 §1. 【帰敬・吉祥偈】 (Salutation, *Maṅgalaśloka*)

3 [① 1v1-, ② 1v1-, ③ 1v1-, ④ 1v1-, Ed.=p.1 l.1-]

4 om¹ namaḥ sarvabuddhabodhisattvebhyaḥ.

5 śrīmatttrisamayaṃ vande sarvasampatsukhodayam² /

6 bhavadurgatikhinnānān³ cintāratnam⁴ ivādbhutam // <verse 1>

7 asty eva⁵ sādhanam samyak pūrvācāryair⁶ ihoditam /

8 kin tu vistarabhīrūṇāṃ⁷ saṃkṣiptam⁸ upadiśyate // <verse 2>

9 [TibA; D163r1-, P200v6-]

10 སངས་རྒྱས་དང་བྱང་ལྷོ་སེམས་དཔའ་ཐམས་ཅད་ལ་ཕྱག་འཚལ་ལོ།།

11 སྲིད་པའི་རན་འགོས་དུབ་རྣམས་ཀྱི།། སེམས་ནི་རིན་ཆེན་ལྟར་མྱོད་བྱང།།

12 ཕུན་ཚོགས་བདེ་བ་ཀུན་འབྱུང་བའི།། དཔལ་ལྷན་དམ་ཚོག་གསུམ་ཕྱག་འཚལ་།། <verse 1>

13 སྲོབ་དཔོན་སྲ་མས་འདི་བརྗོད་པའི།། ཡང་དག་སྐྱབ་ཐབས་ཡོད་པ་ཉིད།།

14 འོན་ཀྱང་རྒྱས་པས་འཇིགས་རྣམས་ལ།། མདོར་བསྐྱབ་པ་ནི་ཉེ་བར་བརྗོད།། <verse 2>

15 [TibB; D60v1-, P76v6-]

16 སངས་རྒྱས་དང་བྱང་ལྷོ་སེམས་དཔའ་ཐམས་ཅད་ལ་ཕྱག་འཚལ་ལོ།།

1 om] Ed.①②③; om. ④
2 sarvasampatsukhodayam] ①②③Ed.; sanam sampatghakhodayam ④
3 vande bhavadurgatikhinnānān] ①③④Ed.; vande sa+++++++durgatikhinnānā ②
4 cintāratnam] ①②③Ed.; cintānām cimttāratnam ④
5 asty eva] ③④Ed.; astyaiva ①; asteva ②
6 pūrvācāryair] ②③Ed.; pūrvācāryer ①; pūrvācāyair ④
7 vistarabhīrūṇāṃ] ③④.; vistarabhīruṇā Ed.; vistarabhiṇā ①; vistarabhīruṇāṃ ②
8 saṃkṣiptam] ①③④Ed.; saṅiptam ②

11 རྣམས་ཀྱི། P; རྣམས་ཀྱིས་ D 11 ལྟར་མྱོད་ D; ལྟར་སྐད་ P 13 སྲོབ་དཔོན་ D; སྲོབ་དཔོན་ P 13 འདི་བརྗོད་ D; འདིར་བརྗོད་ P

1 utpādayāmi sambodhicittaṃ¹bodhāya dehinām /
 2 bhadracaryāñ² carīṣyāmi sarvasattvahitodayām // <verse 4>
 3 [TibA; D163v5-, P201v5-]
 4 དེའི་རྗེས་ལ་བྱང་ཚུབ་དུ་སེམས་བསྐྱེད་པར་བྱ་སྟེ།
 5 བྱང་ཚུབ་སྐྱིན་པར་བྱེད་པ་ཡིས།། རྗེས་པའི་བྱང་ཚུབ་སེམས་བསྐྱེད་ཅིང།།
 6 སེམས་ཅན་ཀུན་ལ་ཕན་འབྲུང་བའི།། བཟང་པོའི་སྐྱོད་པ་བདག་གིས་སྤྱད།། <verse 4>
 7 [TibB; D61r3-, P77v4-]
 8 དེ་ནས་བྱང་ཚུབ་དུ་སེམས་བསྐྱེད་པར་བྱ་སྟེ།
 9 ལུས་ཅན་རྣམས་ཀྱི་བྱང་ཚུབ་ཕྱིར།། ཡང་དག་བྱང་ཚུབ་སེམས་བསྐྱེད་ནས།།
 10 སེམས་ཅན་ཀུན་ལ་སྤྲོད་ཐུང་ཕྱིར།། བཟང་པོ་སྐྱོད་པ་སྤྱད་པར་བཞུ།། <verse 4>
 11
 12 §7. 【障礙の破壊】(Breaking *Vighna*)
 13 [① 2r4-, ② 2r3-, ③ 2r4-, ④ 1v12-, Ed.=p.3 l.4-]
 14 tataḥ sarvavighnavināśārtham acalahṛdayam amoghacaṇḍam³ vajramudrāṃ bad-
 15 dhvā trir uccārayet. tatreyam vajramudrā. dakṣiṇahastam ūrdhvaṃ prasṛtaṃ kṛtvā
 16 vṛddhāṅguṣṭhena⁴ tarjanyagram⁵ ākramet. śeṣā vajralakṣaṇāḥ⁶. mantraḥ,

1 sambodhicittaṃ] ②Ed.; sambodhau cittaṃ ①③④Ed.
 2 bhadracaryāñ] Ed.②③④; bhadracaryāñ ①
 3 amoghacaṇḍam] ①②③④Ed.; amoghacaṇḍa ANa
 4 vṛddhāṅguṣṭhena] ②③④Ed.; vṛddhāṅgaṣṭhena ①
 5 tarjanyagram] ②③④Ed.; rjanyagram ①; tarjanyagra N
 6 vajralakṣaṇāḥ] ②③④Ed.; vajrarakṣaṇā ①

5 ཕྱིད་པ་ཡིས་] D; ཕྱིད་པ་ཡི་ p

1 *Ādikarmapradīpa*. Takahashi 1993 p. 147. ll. 27-28.: utpādayāmi varabodhicittaṃ ni-
 mantrayāmy ahu sarvasattvān.

1 namaḥ samantavajrāṇāṃ trāṭ amoghacaṇḍamahāroṣaṇa sphāṭaya¹ hūṃ²
 2 bhramaya bhramaya hūṃ³ traṭ hāṃ māṃ⁴. <mantra 4>
 3 svastikañ ca badhniyāt⁵.
 4 śliṣṭāṅgulim⁶ abhyantaramuṣṭiṃ⁷ kṛtvā madhyame sūcyau tarjānyau⁸ cāṅguṣṭhā-
 5 gra⁹ iṣatsaṃsakte¹⁰ dhārayet. mantraḥ¹¹,
 6 om hara hara mahānimitta hūṃ¹² phaṭ svāhā. <mantra 5>
 7 [TibA; D163v5-, P201v6-]
 8 དེ་ནས་བགོགས་ཐམས་ཅད་ཚར་གཅད་པར་བྱ་བའི་དོན་དུ་རྫོ་རྗེ་གཏུམ་མོའི་ཕྱག་རྒྱ་བཅིངས་ལ་མི་གཡོ་
 9 བའི་སྤྱིང་པོ་དོན་ཡོད་པ་ལན་གསུམ་བརྗོད་པར་བྱའོ།། དེ་ལ་རྫོ་རྗེའི་ཕྱག་རྒྱ་ནི་འདི་ཡིན་ཏེ། ལག་པ་གཡམས་
 10 པའི་ཐལ་མོ་གྲེན་དུ་བསྐྱངས་ལ་མཐེ་བོང་གིས་མཛུབ་མོའི་ཕྱེ་མོ་མཐན་པའི་ལྷག་མ་རྣམས་ནི་རྫོ་རྗེའི་མཚན་
 1 sphāṭaya] ①②③Ed.; sphoṭaya ④
 2 hūṃ] ①②③; huṃ ④Ed.
 3 hūṃ] ①③④; huṃ Ed.; om. ②
 4 hāṃ māṃ] ④Ed.; hā mā ①; hīmāṃ ②; hāṃ māṃ + ③
 5 badhniyāt] ②③④Ed.; badhniyāt ①
 6 śliṣṭāṅgulim] ③④Ed.; śṛṣṭāṅgulim ①; śreṣṭāṅgulim ②
 7 abhyantaramuṣṭiṃ] ③④Ed.; abhyantalamuṣṭiṃ ①; abhyantalamuṣṭi ②
 8 tarjānyau] ④Ed.; tajanyau ②; om. ①③ANa
 9 cāṅguṣṭhāgra] ①②③Ed.; cāṅguṣṭhāgre ④
 10 iṣatsaṃsakte] Ed.; iṣadsasakte ①; iradasaṃsakte ②; iṣadaṃ sasake ③④; iṣadaṃ saṃsakte
 A; iṣatsasaktaṃ NNa
 11 mantraḥ] ③④Ed.; mantra ①②
 12 hūṃ] ①②③④; huṃ Ed.

8 ཚར་གཅད་] D; ཚར་བཅད་ p 10 མཐེ་བོང་གིས་] D; མཐེ་འོད་གི་ p

1 *Śikṣāsamuccaya*. MSS 70v1: namaḥ samantavajrāṇāṃ trāṭ amoghacaṇḍamahāroṣaṇa sphāṭaya
 hūṃ bhramaya bhramaya hūṃ trāṭ hāṃ māṃ.

『念誦法』大正藏21卷10b26-29 曩莫三曼多嚩日囉二合拏去怛囉二合吒阿目伽戰摩訶嚩殺
 娑頗二合吒野吽怛囉二合麼野怛囉二合麼野吽怛囉二合吒哈唎。
 『秘密法』21卷12b15-18: 曩麼三曼多嚩日囉二合拏怛囉二合吒阿母伽戰摩訶嚩殺
 娑頗二合吒野吽怛囉二合麼野怛囉二合麼野吽怛囉二合吒哈唎。
 『秘密法』大正藏21卷17a23-26: 曩麼三曼多嚩日囉二合拏一怛囉二合吒阿謨伽戰摩訶嚩殺
 薩頗二合吒耶吽四怛囉二合沙耶怛囉二合沙耶吽怛二合吒吽怛二合。
 6 『念誦法』大正藏21卷7b24-25:
 曩莫三滿多沒駄喃唵賀囉囉莽賀彌爾多吽泮吒。
 『秘密法』大正藏12卷17a08-9: 曩麼三曼多勃駄喃一唵二賀囉囉三摩訶彌爾多吽泮半音四。

1 ཉིད་དོ། ལྷགས་ནི།
 2 རྫོང་མེ་ཅན་མ་ལུས་པ་ལ་བྱལ་འཚལ་ལོ།། ལྷ་ཏེ་ཨ་མོ་གླ་ཙ་ཇ་མ་རྩ་རོ་ལ་ཉ་སྣ་ཏེ་ཡ་
 3 ལྷི་ལྷ་མ་ཡ་ལྷ་མ་ཡ་ལྷི་ཏེ་ལྷ་ཉི་ལོ། <mantra 4>
 4 བཀྲ་ཤིས་ཀྱི་ཡང་བཅིང་བར་བྱ་སྟེ། གཉིས་ཀའི་སོང་མོ་རྣམས་སྟེལ་ནས་ནང་དུ་བཀག་པས་ལྷ་རྫོང་བཅངས་
 5 ཏེ། ལྷ་མོ་གཉིས་ཙེ་གཅིག་དུ་ཕྱིར་བསྐྱེད་ལ་མཛུབ་མོ་གཉིས་ཀྱང་མཐོ་བོང་གི་ཙེ་མོས།། ལྷ་མོ་ལྷ་མོ་ལྷ་
 6 པར་མནན་ལ་གཟུང་བར་བྱའོ།། ལྷགས་ནི།
 7 ལྷོ་རྩ་ར་རྩ་ར་མ་རྩ་ནི་མི་རྩི་རྩི་པའ་སྣ་རྩ། <mantra 5>
 8 [TibB; D61r3-, P77v5-]
 9 དེ་ནས་བཞགས་ཐམས་ཅད་གཞུང་པའི་དོན་དུ་མི་གཡོ་བའི་སྟོང་པོ་དོན་ཡོད་གཏུམ་པོ་དོ་རྗེའི་ལྷག་རྒྱ་
 10 བཅིངས་ནས་ལན་གསུམ་བརྗོད་པར་བྱའོ།། དེ་ལ་འདྲིར་དོ་རྗེའི་ལྷག་རྒྱ་ནི་ལག་པ་གཡམས་པ་སྟེ་བོང་བརྒྱུང་
 11 ནས་མཐོ་བོ་རྗེའི་མཛུབ་མོའི་ཙེ་མོ་མནན་པར་བྱའོ།། ལྷག་མ་ནི་དོ་རྗེའི་མཚན་ཉིད་དོ།། ལྷགས་ནི།
 12 རྣམ་པ་མ་རྩ་བ་རྩི་རྩི་རྩི། ལྷ་མོ་གླ་ཙ་ཇ་མ་རྩ་རོ་ལ་ཉ་སྣ་ཏེ་ཡ། ལྷོ་རྩ་མ་ཡ་ལྷ་མ་
 13 ཡ། ལྷོ་རྩ་ཉི་ལོ། <mantra 4>
 14 བཀྲ་ཤིས་བཅིངས་ནས་སོང་མོ་རྣམས་འཕྲུང་ལ་ལྷ་རྫོང་གྱིས་ནང་དུ་བྱས་ནས། ལྷ་མོའི་ཙེ་མོ་དང་མཛུབ་
 15 མོ་དག་དང་མཐོ་བོང་དང་ལྷ་མོའི་ཙེ་དག་ཀྱང་ལྷ་མོ་ལྷ་མོ་ལྷ་མོ་ལྷ་མོ་ལྷ་མོ་ལྷ་མོ་ལྷ་མོ་ལྷ་མོ་ལྷ་མོ་ལྷ་མོ་ལྷ་མོ་
 16 ལྷོ་རྩ་ར་རྩ་ར་མ་རྩ་ནི་མི་རྩི་རྩི་པའ་སྣ་རྩ། <mantra 5>

§8. 【入我我入】 (Nyūga-ganyū)

3 ཏེ་ལྷ། D; ཏེ་ལྷ་ P 5 ལྷིར་བསྐྱེ། D; ལྷིར་བཏེད་ P 7 རི་མི་རྩི། D; རི་མི་རྩི་ P 11 མཐོ་བོ་རྗེའི། D; མཐོ་
 བོ་རྗེའི་ P 12 མ་ལྷ། D; མ་ལྷ་ P 12 བ་རྩི་རྩི། D; བ་རྩི་ལི་ P 12 རོ་ལ་ཉ། D; རོ་ལ་ཉ་ P 14 ལྷ་
 ལྷིས་། D; ལྷ་རྫོང་གྱི་ P 15 ལྷ་མོའི་ཙེ་དག་ཀྱང་། D; ལྷ་མོ་དག་ཀྱང་ P

1 [(1) 2r6-, (2) 2r6-, (3) 2r6-, (4) 2r3-, Ed.=p.3 l.13-]
 2 tato mukhaśaucādikam kṛtvā sukhāsanopaviṣṭaḥ¹ paṭapustakapratimādīnām² any-
 3 atamasyāgrato daśadiksthītabuddhabodhisattvān³ avalambya⁴ muktākusumāvakīrṇam⁵
 4 maṇḍalam⁶ kṛtvā pūrvavad⁷ gāthayā sarvāṅgataḥ praṇamya bodhicittam utpādyā
 5 evaṃ⁸ sarvabuddhabodhisattvebhya⁹ ātmānaṃ niryātayāt.
 6 aham evaṃnāmā sarvabuddhabodhisattvānām ātmānaṃ niryātayāmi. sarvathā¹⁰
 7 sarvakālaṃ pratigrhṇantu mām, sarvabuddhabodhisattvā adhitiṣṭhantu mām. mahākāruṇikā¹¹
 8 nāthāḥ siddhivaradāyakaś ca¹² bhavantv iti¹³.
 9 [TibA; D164r1-, P202r2-]
 10 དེ་ནས་གདོང་བཀྲ་བ་ལ་སོགས་པ་བྱས་ལ་བདེ་བའི་སྟོན་ལ་ཉེ་བར་གནས་ཏེ། ཐད་ཀ་དང་གླེགས་བམ་
 11 དང་སྐྱ་གཟུགས་ལ་སོགས་པ་གང་ཡང་རུང་བའི་མདུན་དུ་ལྷོགས་བརྩུ་ན་བཞུགས་པའི་སངས་རྒྱས་དང་
 12 sukhāsanopaviṣṭaḥ] ②③④; sukhāsanopaviṣṭaḥ ①Ed.
 13 paṭapustakapratimādīnām] ③④Ed.; phaṭapustakapratimādīnām ①; paṭapustakapra-
 14 timādīnām ②
 15 daśadiksthīta°] ①②③Ed.; daśadiksthīta° ④
 16 avalambya] ②③Ed.; avalabya ①; avalambā ④
 17 muktākusumāvakīrṇam] ③Ed.; muktākusumāvakīrṇam ①; muktākulatārthakīrṇam ②;
 18 muktākusumāvakīrṇam ④
 19 maṇḍalam] ③ANa.; maṇḍalakaṃ ②Ed; maṇḍala ①; maṇḍalamkaṃ ④
 20 pūrvavad] ①③④Ed.; pūrvavat ②
 21 evaṃ] ①②③④; eva Ed.
 22 °sattvebhya] ①②③Ed.; °sattvabhya ④
 23 sarvathā] Ed.①③④; ++thā ②
 24 mahākāruṇikā] ②③④Ed.; mahākāruṇikā ①
 25 siddhivaradāyakaś ca] ③④Ed.; siddhivaladāyāś ca ②Na; siddhivaradākāś ca N; sid-
 26 dhivaradāya+ca ①
 27 bhavantv iti] ①③Ed.; bhavantīti ②④

10 གླེགས་བམ་] D; གླེགས་མི་ P

6 *Ādikarmapradīpa*. Takahashi 1993 p. 148 ll. 8-13.: aham amukanāmā sarvabuddhabodhisattvebhya[h] saporivārebhyo ātmānaṃ niryātayāmi. sarvathā sarvakālaṃ parigrhṇantu mām mahākāruṇikāḥ. adhitiṣṭhantu mām aśeṣalokadhātuparitrāyakāḥ. anuttarasiddhivaradāyakaś ca me bhavantu. rakṣām ca me kuruvantu. ity ātmabhāvaniryātanaṃ. *Kriyāsamuccaya*. Moriguchi 1991 p.122 ll. 5-6.: aham evaṃ nāmācāryasyāntikāt sarvabuddhabodhisattvānām ca prato ’nuttarāyāṃ samyaksambodau cittam utpādayāmi.

1 བྱང་རྒྱལ་སེམས་དཔལ་རྣམས་དམིགས་ཤིང་མེ་རྟོག་སེམས་མ་གཅེལ་དུ་བཀའ་པའི་མཛུལ་བྱས་ལ། ལྷར
2 བཞེན་དུ་ཚོགས་སུ་བཅད་པ་གཉིས་ཀྱིས་ཡན་ལག་ཐམས་ཅད་ཀྱིས་ལེགས་པར་ལྷག་བཅོལ་བ་དང། བྱང
3 རྒྱལ་ཏུ་སེམས་བསྐྱེད་དེ་འདི་ལྷར་སངས་རྒྱས་དང་བྱང་རྒྱལ་སེམས་དཔལ་ཐམས་ཅད་ལ་བདག་ཉིད་དབྱེས་
4 བར་བྱ་སྟེ།

5 བདག་མིང་འདི་ཞེས་བགྲི་བ་སངས་རྒྱས་དང་བྱང་རྒྱལ་སེམས་དཔལ་ཐམས་ཅད་ལ་བདག་ཉིད་ཀྱིས་བདག་
6 ཉིད་དབྱེས་ཀྱིས། ཐམས་ཅད་ནས་དུས་ཐམས་ཅད་དུ་ལེགས་པར་བདག་གཟུང་དུ་གསོལ། སངས་རྒྱས་དང་
7 བྱང་རྒྱལ་སེམས་དཔལ་ཐམས་ཅད་ཀྱིས་བདག་ལ་བྱིན་ཀྱིས་བརྟུན་ཏུ་གསོལ། ལྷགས་རྗེ་ཆེན་པོ་དང་ལྷན་
8 པའི་མགོན་པོ་རྣམས་ལྟེང་ལ་ནི་དངོས་སྤྱུ་ཀྱི་མཚོག་གསོལ་བ་ཡང་ལགས་ཀྱིས་ཞེས་བྱའོ།།

9 [TibB; D61r6-, P77v8-]

10 དེ་ནས་ཞལ་བསང་བ་ལ་སོགས་པ་བྱས་ནས་སྟོན་བདེ་བ་ལ་ཉེ་བར་གནས་ཏེ། རས་རིས་དང་པོ་རྟེ་དང་
11 སྐྱེ་གཞུགས་ལ་སོགས་པ་དང། གཞན་གྱི་དུང་དུ་འང་དུང་སྟེ། ལྷོགས་བཅུ་ན་བཞུགས་པའི་སངས་རྒྱས་དང་
12 བྱང་རྒྱལ་སེམས་དཔལ་རྣམས་ལ་དམིགས་ཏེ། མེ་རྟོག་སེམས་མ་གཅེལ་དུ་བཀའ་ལ་མ་རྗེ་ལ་བྱས་ནས་སྟོན་
13 མ་བཞེན་དུ་ཚོགས་སུ་བཅད་པ་དང། ཡན་ལག་ཐམས་ཅད་ཀྱིས་ལྷག་བཅོལ་ནས། དེ་བཞེན་དུ་སངས་རྒྱས་
14 དང། བྱང་རྒྱལ་སེམས་དཔལ་རྣམས་ལ་བདག་ཉིད་ལུས་ནས། བྱང་རྒྱལ་ཏུ་སེམས་བསྐྱེད་པར་བྱ་བ་ནི།

15 བདག་མིང་འདི་ཞེས་བགྲི་བ་སངས་རྒྱས་དང། བྱང་རྒྱལ་སེམས་དཔལ་རྣམས་ལ་ཐམས་ཅད་དུ་བདག་ཉིད་
16 འབྱུལ་བས་དུས་ཐམས་ཅད་དུ་གཟུང་དུ་གསོལ། སངས་རྒྱས་དང། བྱང་རྒྱལ་སེམས་དཔལ་ཐམས་ཅད་ཀྱིས་
17 བདག་ལ་བྱིན་ཀྱིས་བརྟུན་ཏུ་གསོལ། མགོན་པོ་ལྷགས་རྗེ་ཆེན་པོ་རྣམས་ཀྱིས་བདག་ལ་མཚོག་གི་དངོས་
18 སྤྱུ་རྣམས་སྤུལ་དུ་གསོལ་ཞེས་སོ།།

19

1 མཛུལ་] D; པརྟུལ་ P 3 སེམས་བསྐྱེད་དེ།] D; སེམས་བསྐྱེད་ཅིང་ P 4 དབྱེས་བར་] D; དབྱེས་བར་ཡང་ P 6 བདག་
ཉིད་དབྱེས་] D; བདག་ཉིད་འབྱུལ་ P 7 བྱང་རྒྱལ་སེམས་དཔལ་] D; བྱང་རྒྱལ་སེམས་དཔལ་རྣམས་ P 8 རྣམས་ལྟེང་ལ་]
D; རྣམས་ལྟེང་ P 8 གསོལ་བ་ཡང་] D; གསོལ་བ་འང་ P 10 རས་རིས་] D; རས་རིས་ P 14 བསྐྱེད་པར་བྱ་]
D; བསྐྱེད་པར་བྱ་ P 16 བདག་ཉིད་འབྱུལ་] D; བདག་ཉིད་དབྱེས་ P

1 §9. 【懺悔】 (Pāpadeśanā)

2 [① 2v3-, ② 2r8-, ③ 2v3-, ④ 2r6-, Ed.=p.3 l.21-]

3 tatas¹ sarvapāpāni deśayet².

4 sarvapāpān rāgadveṣamohajān³ sārva-kālikān⁴ aśeṣān⁵ deśayāmi yathā buddhā⁶ bha-
Ed. p.4
5 gavano jānantīti⁷.

6 [TibA; D164r4-, P202r7-]

7 དེ་ནས་སྟོན་པ་རྣམས་ཐམས་ཅད་བཤགས་པར་བྱ་སྟེ།

8 འདོད་ཆགས་དང་ཞེ་སྣང་དང་གཉི་སྟག་ལས་བསྐྱེད་པའི་དུས་ཐམས་ཅད་པའི་སྟོན་པ་ཐམས་ཅད་ལྷག་མ་
9 ལུས་པར་ཇི་ལྷར་སངས་རྒྱས་བཅོམ་ལྷན་འདས་རྣམས་ཀྱིས་མཚོག་པ་ལྷར་བདག་གིས་ཀྱང་བཤགས་པར་
10 བགྲིའོ། ཞེས་བྱ་བའོ།།

11 [TibB; D61v2-, P78r5-]

12 དེ་ནས་སྟོན་པ་ཐམས་ཅད་བཤགས་པར་བྱ་སྟེ།

13 འདོད་ཆགས་དང་ཞེ་སྣང་དང་གཉི་སྟག་ལས་སྐྱེས་པའི་དུས་ཐམས་ཅད་ཀྱི་སྟོན་པ་ཐམས་ཅད་ཇི་ལྷར་
14 སངས་རྒྱས་བཅོམ་ལྷན་འདས་རྣམས་ཀྱིས་མཚོག་བཞེན་དུ་མ་ལུས་པར་བདག་གིས་བཤགས་པར་བགྲིའོ།།

15

¹ tatas] ①; tatah ②③④Ed.
² deśayet] ①③④Ed.; deśayataḥ ②
³ sarvapāpān rāgadveṣamohajān] ①②③④Ed.; °pāpānurāga° ANa
⁴ mohajān sārva-kālikān] ③④Ed.; mohajān sarvakārākan ①; mohā+++++dhikālikān ②
⁵ aśeṣān] ②④Ed.; šeṣā. ①③; om. N
⁶ buddhā] ①③④Ed.; om. ②
⁷ jānantīti] ②③④Ed.; jānantīti ①

8 གཉི་སྟག་ལས་] D; གཉི་སྟག་གིས་ P 9 ལྷག་མ་ལུས་] D; ལྷག་མ་ལུས་ P 9 བཤགས་པར་] D; བཤག་པར་
P 13 ཐམས་ཅད་ཀྱི་སྟོན་པ་] D; om. P

4 *Ādikarmapradīpa*. Takahashi 1993 p. 148. ll. 15-18.: sarvapāpān rāgadveṣamohajān sārva-kālikān aśeṣān yaiś cittotpādaire buddhabodhisattvair deśitaṃ taiś cittotpādaire deśayāmi.

の一切の守護などの諸々のマントラの完成がある。その場合、これが〔根本〕明呪である。

一切の仏・菩薩に帰命し奉る。汚れなく、汚れを取り除き、果てしなく、御者を伴い、一切の勝者であり、無限の状態であり、幸福を与える者たちは、究極的に素晴らしい最高の幸福を私に与えよ。等しく一切に与える者たちは、絶え間なく〔私に与えよ〕。〈mantra 1〉²¹

その場合、これらが金剛句である²²。

庇護者よ、無等等のものよ、一貫したものよ、間断なきものよ、法よ、カナ、カナ、偉大な勇者である不動尊よ、サマ、サマ、不寛容で偉大な力を 持つものよ、カナ、カナ、偉大なる最勝の願望を有するものよ、ハハ、ハハ、金剛よ、金剛の異名を持つものよ、ダラ、ダラ、フーン、フーン、マンダラを等しい最勝なる願望をもって闊歩する者よ、クル、クル、トゥル、トゥル、実にあらゆる方法で、あらゆるものを、燃やせ、燃やせ、最勝なるものよ、最勝を有するものよ、フーン、パット、スヴァーハー。〈mantra 2〉²³

§4. 【百字真言】(Śatākṣarahrdaya)

次に〔行者は〕すべての業障を消除するために一切如来の心呪である百字〔真言〕をその儀則通りに八千遍唱えるべし。〔そうすれば〕正法を損なうような無間〔業〕を始めとする業障が除去される。そして、これがそれ (= 百字真言) である。

三世を体現し、すべての時に絶え間なく到達する法を連ねる如来に帰命する。アン、無等等のものよ、一貫したものよ、間断なきものよ、継承と説示をするものよ、ハラ、ハラ、スマラ、スマラナ、欲望を霧散したもののよ、仏法よ、サラ、サラ、等しい力を持つものよ、ハサ、ハサ、トラヤ、トラヤ、虚空よ、偉大なる力を垂れるものよ、燃やせ、燃やせ、大海よ、スヴァーハー。〈mantra 3〉²⁴

§5. 【プールヴァセーヴァー】(Pūrvasevā)

次に〔行者は〕自他繁栄のための成就法の支分としてこのようなプールヴァセーヴァー儀礼を行うべし。その場合、まずは早朝に起きて、支配者である一切の仏・菩薩たちに対して坐すべし²⁵。次のように礼拝すべし。

果てしなき世間に〔仏〕子を伴った数多の勝者たちがいる。
私は身・心・語をもって彼ら全員に対して礼拝する。〈verse 3〉

§6. 【発菩提心】(Generating Bodhicitta)

次に〔行者は〕菩提心を起こすべし。

私は人々の覚醒のために完全な菩提心を生起させる。
私は一切衆生の利益のために普賢行を行じよう。〈verse 4〉

§7. 【障礙の破壊】(Breaking Vighna)

次に〔行者は〕一切の障礙を破壊するために金剛印を結びつつ、効果観面にして犍猛なる不動尊の心呪を三遍唱えるべし。その場合、これが金剛印である。右手を上げて真直ぐにして、親指で人差し指の先端を押すべし。残り〔の三本指〕は〔三鈷〕金剛杵の形にする。〔不動尊の〕マントラは、

普く諸金剛に帰命する。トラート、効果観面にして犍猛なる大忿怒尊よ、爆発せよ、フーン、動き回れ、動き回れ、フーン、トラット、ハーン、マーン。
〈mantra 4〉²⁶

そして、〔行者は〕万字を結ぶべし (= 結跏趺坐すべし)²⁷。〔身体の〕中心においてくっつけた指を内縛にして、二本の人差し指を針のように尖らせて、そして親指の先端は少し付けた状態で保つべし。マントラは、

オーン。ハラ、ハラ、偉大な印を持つ者よ、フーン、パット、スヴァーハー。
〈mantra 5〉²⁸

§8. 【入我我入】(Nyūga-ganyū)

次に、洗面などをなし、楽な坐り方²⁹で坐った〔行〕者は、パタ・経本・〔仏〕

像などの中のいずれか一つの前で、十方にいる仏・菩薩たちに依拠して、マンダラに真珠や華の散布をなして、以前の通りに偈頌をもって全身で恭敬し、菩提心を生起し、次のように一切の仏・菩薩たちに我を入れるべし。

「私・某甲は一切の仏・菩薩たちに我を入れる。あらゆる方法であらゆる時に、一切の仏・菩薩たちは私を摂受すべし、私を加持すべし。[一切の仏・菩薩たちは]大悲を有する者たちと支配者たちと最勝なる悉地を与える者たちとなれかし」と。

§9. 【懺悔】 (*Pāpadeśanā*)

次に〔行者は〕一切の諸々の罪惡を懺悔すべし。

「私はいかなる時でも貪・瞋・癡より生じる一切の罪惡を余すこと無く懺悔する。世に尊き仏たちが認めるように」と。

§10. 【隨喜】 (*Anumodana*)

次に〔行者は〕福德を隨喜すべきである。

「一切の仏・菩薩たちが三時の世間と出世間〔で積んだ〕福德と智慧の〔二〕資糧、それらに対して私は最勝の喜びをもって隨喜する。世に尊き仏たちが認めるように」と。

§11. 【印とマントラの三昧耶】 (*Samaya of Mudrā and Mantra*)

次に結跏趺坐をした〔行〕者はこの三昧耶印を結ぶべし。頭部に礼拝合掌のある状態が三昧耶印である。マントラは、

妙なる悉地を有し、完成した者で、最勝者で、望みのものを与える慈悲者に帰命する。守護者よ、守護者よ³⁰、すさまじい力を持つ者よ、最勝の悉地を与える者であり大悲を持つ者に帰命する。スヴァーハー。
〈mantra 6〉³¹

これによってすべての印とマントラの三昧耶が示されたのである。

§12. 【不動尊への祈願】 (*Pray for Acala*)

次に〔行者は〕以前のように金剛印³²を結びつつ、不動尊の心呪を思い起こすべし。

普く諸金剛に帰命する。不動なる者よ、黒く獐猛な者よ、成就させよ、フーン、パット。〈mantra 7〉³³

§13. 【不動尊の讚嘆】 (*Praise for Acala*)

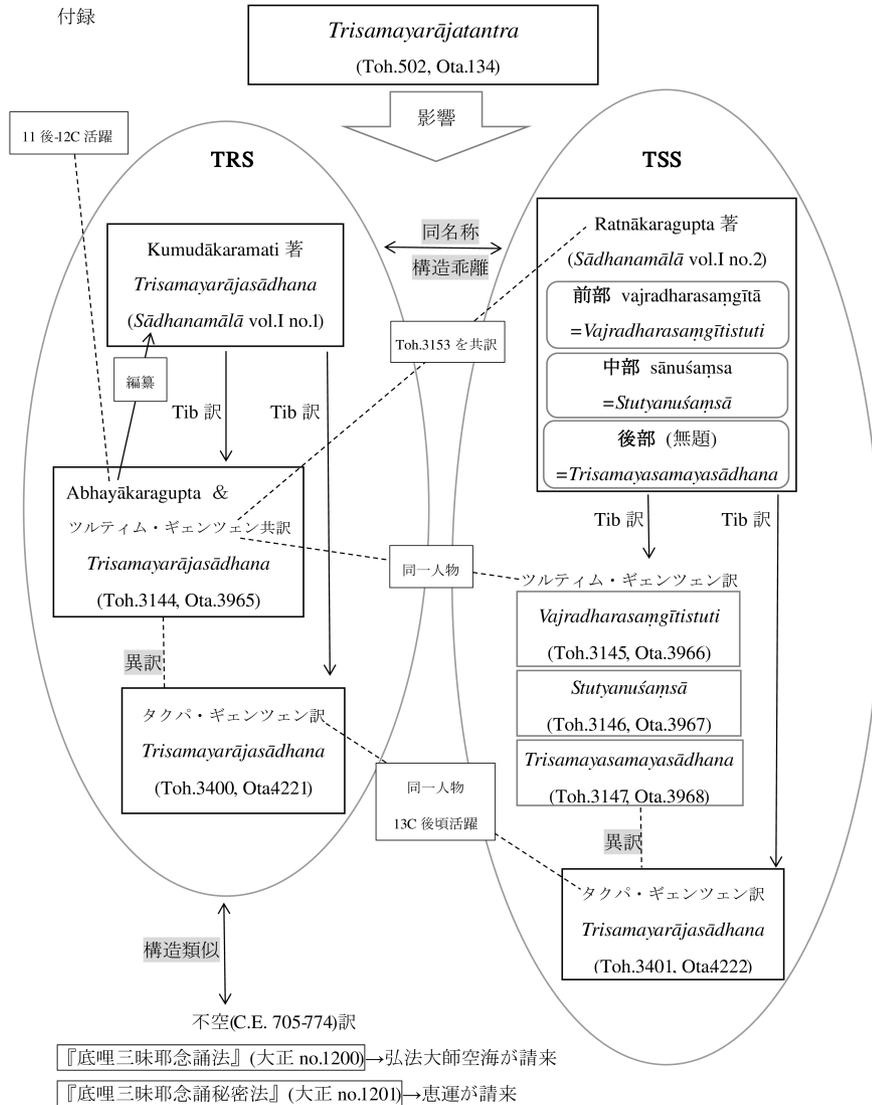
次に〔行者は〕金剛仏頂の印を頭部に置くべし。右拳の親指を立てた状態を作るべし。マントラは、

一切の仏・菩薩に帰命する。最勝なる三つの尖端（三鈷劍）を持つ者よ、汝に帰命する。普くものであり同じもののない三徳（大悲・大定・大智）を有し、最勝の法を持つ不動尊よ、汝は煩惱と苦の網〔にかかった〕者たちを寵愛せよ、世間のあらゆる安樂を速やかに与えよ、その時、三三昧耶よ、汝は為せ、スヴァーハー。〈mantra 8〉³⁴

これ（印）をもって真言行者は大乘を捨ててはならない。そうすれば障礙なき悉地が生じる。

§14. 【守護尊たちの布置】 (*Placement of guardian deities*)

さらに偉大なる大守護尊を五箇所布置すべし。〔そうすれば〕大いなる守護が生じる。広げた合掌を作り、小指と無名指を上に向けた合掌³⁵をなし、小指と無名指は手の中に〔入れて〕、小指は外側に針〔のように尖らせて〕、無名指は少し曲げて、親指はそれ（＝無名指）の上に置くべし。前方にある中指は針〔のように尖らせて〕、それ（＝中指）の側面において2本の人差し指を曲げて、第三の関節（＝現代の第一関節）に置くべし。アサハー³⁶という名の偉大な印である。マントラは、
普く諸金剛に帰命する。オーン、ハン、フーン、私たちは爆発させる³⁷、フーン、パット。〈mantra 9〉³⁸



註

- 1 本稿では TRS と TSS およびその他の底哩三昧耶王系経軌との関係の詳細を割愛する代わりに、本文の末尾に付録として関係図を掲載した。この図は横山 2020 p. 95 で示したものに一部加筆修正したものである。この関係の詳細については横山 2020 を参照いただきたい。
- 2 『御請来目録』（『弘法大師全集』第一輯 p. 73 l. 4）において「底哩三昧耶經一卷十四紙」、『三学録』（『弘法大師全集』第一輯 p. 111 l. 3）において「底哩三昧耶經一卷」と記されている。
- 3 「一底哩三昧耶經一卷…右胎藏宗經」cf.『弘法大師全集』第一輯 p. 111. ll. 3-9.
- 4 この点については酒井 1983 pp. 223-225, pp. 238-241 を中心に具体的な考察がなされている。
- 5 この底哩三昧耶王系経軌と不動讃との関係については、近いうちに研究成果の詳細を公表する予定である。
- 6 実際には Skt で Abhayākara Gupta と書かれているわけではない。これは Tib 訳の a bha y'a ka ra'i zhal snga nas (= アバヤーカラ御前) からの Skt 還元である。
- 7 Tib: tshul khriṃs rgyal mtshan.
- 8 Tib: grags pa rgyal mtshan.
- 9 奥山 1988 p. 97. さらに当該先行研究ではタクバ・ギエンツェン訳を含む一連の SM の Tib 訳 (sgrub thabs rgya mtsho) の奥書に基づいて翻訳された年月を推定している。すなわち、奥書には大阿闍梨ダルマパーラクシタ (Dharmapālarakṣita) の庇護を受けて酉の年 12 月白分の 3 日に訳了したとあり、ダルマパーラクシタの生没年から該当する年を導き出している。なお、該当する年は 2 回あるが、1 回目はまだダルマパーラクシタが 6 歳であったため、2 回目の 1286 年が妥当としている。
- 10 TibB では SM 全体の題名としてインド語およびチベット語で *Sāghanasamuccaya* と示されているのみであり、ここには本成就法の題名が示されていない。
- 11 ここで「完成」と訳した *sampad-* という語には成功や獲得といった意味もある。しかし、後の §10 などに出てくる「福德と智慧の [二] 資料 (puṇyajñāna-sambhāra-)」に対応する語であると判断し、ここでは一部の語を補った上で「完成」と訳した。なお、TibA は *phun tshogs bde ba* となっており、*sampad-* を *sukha-*

- にかかると形容詞（例えば「素晴らしい安楽」など）と読んでいた可能性がある。
- 12 ここで「輪廻の中の悪趣」と訳した bhavadurgati- という熟語は、並列複合語 (Dvandva) として「現世と悪趣」とも読めるが、文脈から考えて属格の格限定複合語 (Genitive-Tatpuruṣa) として読んだ。なお、TibA は srid pa'i ngan 'gros と属格の格限定複合語で、TibB は srid dang ngan 'gros と並列複合語でそれぞれ読んでいる。
- 13 実際に TRT に関する関連儀軌は他にもいくつか存在しているが、成就法 (sādhana-) と名の付くものの中で最も分量が多いのは本文献である。また、その他の文献でも本成就法の広本にあたる内容を持つものは見当たらない。そのため、この一文は本成就法を権威付けする等といった理由により、実際には存在しない広大な分量を持つ成就法が背景にあることを示唆する意図で書かれた可能性が考えられる。なお、TRT の関連儀軌類に関しては、酒井 1983 pp. 225-228 に詳細が示されている。
- 14 ここには例えば *Vajrodayā* (cf. 密教聖典研究会 1987 pp.291-290) に見られるような土地の浄地法や作壇法が明示されている訳ではない。しかし、仏前でのマンダラへの散華などが描かれていることから、実際には浄地法や作壇法を内包している可能性がある。
- 15 マントラマンダラ (mantramāṇḍala-) という字面からすると種子マンダラのようなものが想起されるが、詳細はここに説かれておらず、他の文献の中にも見当たらないため不明である。また TibB ではマントラ (sngag) の語が抜けており、大タントラのマンダラ (rgyud chen po'i dkyil 'khor) と説かれている。この箇所は前後の語を含めて多くの異読が確認できるため、引き続きの検証が必要である。
- 16 ここで「権威を獲得した者」と訳した labdhādhikāra- という語は、入マンダラおよび灌頂などの儀礼を済ませて成就法を行うことを許された者であると考えている。ただし実際のところは今後も検証が必要である。
- 17 TibB のみ三昧耶の語の前にマントラという語が入っている (sngags pa dam tshig)。TibB では何らかの理由で先に述べたマントラマンダラという語の中のマントラの語が抜けて三昧耶の直前に入った可能性、あるいはこれが mantri の訳語の可能性もある。なお、TibA と TibB 共に三昧耶と禁戒は dang でつなぎ並列複合語で読んでいる。

- 18 TibB では森ではなく僧院 (dgon pa) となっている。
- 19 この箇所は Skt および TibA・B とも内容が合致しないため引き続き検証が必要な箇所である。なお、『初会金剛頂経』の大マンダラ廣大儀軌に依拠した儀礼書である *Vajrodayā* では、僧院 (vihāra-) や園林 (ārāma-) などを擇地として示している。cf. 密教聖典研究会 1987 pp. (16-17)。
- 20 vasan という語は、一見すると現在分詞のように見えるが詳細は不明である。ここでは絶対詞のように読まなければ意味が通じず、Tib も参照して「住しつつ (TibA: gnas par byas la, TibB: gznas nas)」と訳している。あるいは vāsam という絶対詞の形 (cf. 『辻文法』 p.307) で校訂すべき可能性も考えられるが、以後も同じく °an という形で絶対詞のように読まなければ意味が通じない箇所が散見されるため原形を残した。引き続き検証が必要な箇所である。
- 21 TRT ch. 9. D210a5 に同様のマントラが見られる。しかし、『念誦法』および『秘密法』には同様のマントラを見出せない。
- 22 TibB ではこの箇所も音写になっている。したがって、TibB では明呪と金剛句の区別をせずに併せて1つの根本明呪と考えていた可能性がある。
- 23 TRT ch. 9. D210a6 に同様のマントラが見られる。しかし、『念誦法』および『秘密法』には同様のマントラを見出せない。
- 24 TRT ch. 1. D181a6 および *Śikṣāsamuccaya* に同様のマントラが見られる。しかし、『念誦法』および『秘密法』には同様のマントラを見出せない。
- 25 この箇所は異読が非常に多い箇所であり、全ての写本で別の読みを示しているため引き続き検証が必要である。
- 26 TRT ch. 13. D226b1 および『念誦法』『秘密法』、*Śikṣāsamuccaya* に同様のマントラが見られる。
- 27 svastika- は両手を胸の前で組むことで卍のような形を作る印を指す可能性も考えられるが、*Vajrāvalī* p.103 (7-9-10) に説かれる pādadvayaṃ sampuṭīkṛtyo-paviśānaṃ svastikam. (訳語: 両足を組み合わせて、[相互の足の内側に] 入れることが万字である) という一文から、ここにおける svastika- は結跏趺坐を指す語であると考えた。
- 28 現在のところ TRT には同様のマントラを見出せないが、『念誦法』(cf. 資延 pp.54-56 「第五節 安穩印明を説く段」、pp.211-213 「第七十一節 心印」) および『秘密法』

『底哩三昧耶王成就法』校訂テキストと和訳 (I) (横山)

に同様のマントラが見出せる。

- 29 *sukhāsana-* は主に胡坐を意味する語と考えるが、ここでは胡坐に限らないより広い意味を持たせるために「楽な坐り方」と訳した。
- 30 『念誦法』における対応箇所の漢訳が「怛羅異怛羅異」であり、ここでは大金剛輪陀羅尼などに見られる「守護者」を意味する語 *trāyi* であると考えて校訂および訳を作成した。cf. Kuranishi 2017 p. 77.
- 31 TRT ch. 9. D216a3 および『念誦法』(cf. 資延 pp.51- 54「第四節 用便して洗浴の後、礼佛懺することと三昧耶のマントラを説く段」)、『秘密法』に同様のマントラが見られる。
- 32 金剛印は TRS§7 において既出である。右手を上げて真っ直ぐにして、親指で人差し指の先端を押し、残り [の三本指] は [三鉗] 金剛杵の形にする印と考えられる。
- 33 現在のところ TRT および『念誦法』、『秘密法』には同様のマントラを見出せないが、『念誦法』『秘密法』における比較的近い形のマントラを校訂テキストに示した。
- 34 TRT ch. 5. D207a4-5 および ch. 9. D215B2 に同様のマントラが見られるが、現在のところ『念誦法』および『秘密法』には同様のマントラを見出せない。
- 35 あるいは、「[指と指の間を] 拡げた合掌」を意味する可能性も考えられる。
- 36 無忍耐を意味する語とも考えられるが、原文の音をそのまま残した。
- 37 ここでは $\sqrt{\text{sphaṭ caus 1st. pl.}}$ の *Ātmanepada* と考えて訳したが、この動詞は一般的に *Parasmaipada* である。あるいは、印の名前がアサハー (*asahā*) であるので、本来は *sphaṭyāmahe* ではなく、*sphaṭya-asahe* という形だった可能性も考えられる。なお、TibA は *phaṭ yā sa he*、TibB は *phaṭ ya sa he* となっている。
- 38 現在のところ他の文献においてこれと同じマントラは見出せないため今後の研究課題としたい。

参考文献

〈一次文献〉

Ādikarmapradīpa: Ādikarmapradīpa of Anupamavajra. (cf. 高橋 1993)

Kudrṣṭinirghātana: Kudrṣṭinirghātana of Advayavajra. (cf. 密教聖典 1988)

Kriyāsamuccaya: Ācāryakriyāsamuccaya of Jagaddarpana. (cf. 森口 1991)

SM: *Sādhanamālā / Sādhanasamuccaya*. Ed.=Bhattacharyya 1925, Tokyo University

Library ID 1683·1684·1685·1686 = Matsunami New no. 451·452·453·454, in the University of Tokyo Library (東京大学総合図書館所蔵).

<http://utlslktsms.ioc.u-tokyo.ac.jp> (Accessed November 10, 2019).

[Toh. 3143-3304, Ota. 3964-4126] (= *sgrub thabs brgya rtsa*),

[Toh. 3400-3644, Ota. 4221-4466] (= *sgrub thabs rgya mtsho*).

Śikṣāsamuccaya: Śikṣāsamuccaya of Śāntideva. (cf. Bendall 1902)

TRS: 『底哩三昧耶王成就法』. *Trisamayārājasādhana* of Kumudākaramati (=SM vol. I, no.1). ED.=Bhattacharyya 1925, Tokyo University Library ID 1683·1684·1685·1686 = Matsunami New no. 451=①・452=②・453=③・454=④, 東京大学総合図書館所蔵.

<http://utlslktsms.ioc.u-tokyo.ac.jp> (Accessed November 10, 2019).

TibA= [Toh. 3144, Ota. 3965], TibB= [Toh. 3400, Ota. 4221].

TRT: *Trisamayārājantra*. (『底哩三昧耶王経』). [Toh. 502, Ota. 134].

TSS: *Trisamayārājasādhana* of Ratnākara Gupta (?) (=SM vol. I, no. 2).

[Toh. 3145, Ota. 3966] (= *Vajradharasamgītistuti*),

[Toh. 3146 Ota. 3967] (= *Stutyānuśaṃsā*),

[Toh. 3147, Ota. 3968] (= *Trisamayāsamayasādhana*),

[Toh. 3401, Ota. 4222].

Vajrāvalī: Vajrāvalī of Abhayākara Gupta. (cf. Mori 2009)

Vajrodayā: Sarvavajrodayā of Ānandagarbha. (cf. 密教聖典研究会 1987)

『御請来目録』: 空海著「御請来目録」『弘法大師全集』第一輯 pp. 69-104.

『三学録』: 空海著「真言宗所學經律論目録」『弘法大師全集』第一輯 pp. 105-123.

『初会金剛頂経』: *Sarvatathāgatātattvasaṃgraha*. 不空訳『金剛頂一切如来真実撰大乘現証大教王経』大正蔵 no. 865. (cf. 堀内 1983, 1974).

『大日経』: *Vairocanābhisambodhi*. [D no. 494, P no. 126], 『大毘盧遮那成佛神變加持経』七卷、大正蔵 no. 848.

『念誦法』: 不空訳『底哩三昧耶不動尊威怒王使者念誦法』一卷、大正蔵 no. 1200.

『秘密法』: 不空訳『底哩三昧耶不動尊聖者念誦秘密法』三卷、大正蔵 no. 1201.

〈二次文献〉

- Bendall, Cecil. 1902. *Śikṣāsamuccaya: A compendium of Buddhist teaching Compiled by Śāntideva Chiefly from Earlier Mahāyāna-sūtras*. Bibliotheca Buddhica 1, St. Peterburg. Commissionnaires de l'Académie impériale des sciences.
- Bhattacharyya, Benoytosh (ed.). 1925. *Sādhnamālā vol. I*, Central Library, Baroda.
- Kuranishi, Kenichi (倉西憲一). 2016. "Some Remarks on the Title of the *Vajra-maṇḍalāṃkāra*" 『豊山教学大会紀要』第 44 号、pp. (224-214).
2017. "Some Remarks on the Daikongōrin-dhāraṇī (大金剛輪陀羅尼)" 『豊山学報』第 60 号、pp. (167-179).
2019. "An Unidentified Work attributed to *Āryadeva contained in NGMPP B31/6 (19r1-20v) : Preliminary Edition and Notes." 『佛教文化学会紀要』第 28 号、pp.67-78.
- Heinemann, Robert. 1985. 『漢梵梵漢ガラニ用語用句辞典』名著普及会。
- Mori, Masahide (森雅秀). 2009. *Vajrāvalī of Abhayākara Gupta, Buddhica Britannica Series Continua*, The Institute of Buddhist Studies, Tring.
- Shastri, Hara Prasad. 1905. The baptist mission press. 1917. *A Descriptive Catalogue of Sanskrit MSS in the Government collection vol. 1*, Calcutta, Asiatic Society of Bengal.
- Yonezawa, Yoshiyasu (米澤嘉康) 2007 「The *Vimalakīrtinirdeśa* and the (*Sarva-Buddhaviśayāvatāra*-) *Jñānālokāṃkāra* (『維摩經』と『智光明莊嚴經』)」 『印度學佛教學研究』第 55 卷第 3 号 [通卷 第 112 号]、pp. (57-63)。
- 岡田契昌 [訳] 1931 「都部陀羅尼目」 『国訳一切経 密教部二』 pp.100-105、大東出版社。
- 1932 「底哩三昧耶不動尊聖者念誦秘密法」 『国訳一切経 密教部四』 pp.1-35、大東出版社。
- 奥山直司 1988 「チベット仏教バンテオン形成に関する二つの課題」 『印度學佛教學研究』第 36 卷第 2 号 [通卷 第 72 号]、pp. (94-100)。
- 酒井真典 1983 「チベット訳『底哩三昧耶経』」 『酒井真典著作集』第 1 卷、pp. 223-245、法蔵館。
- 資延恭敏 [編著] 2000 『秘密儀軌大系 I 不動明王』四季社。
- 高橋尚夫 1992 「アーディカルマブラディーパ『初行のしるべ』—和訳」 『興教大師八百五十年御遠忌記念論集興教大師覚鑿研究』 pp. 551-589、春秋社。
- 1993 「Ādikarmapradīpa 梵文校訂—東京大学写本による—」 『インド学 密教学研究 下—宮坂宥勝博士古稀記念論文集—』 pp. 129-156、法蔵館。

- 2000 「種子・真言篇」 『大法輪①特集〈不動明王〉事典 (第 67 卷第 11 号)』 pp. 84-90、大法輪閣。
- 高橋良海 [校注] 2004 「底哩三昧耶経」 『新国訳大蔵経 金剛頂経・理趣経他』 pp. 335-384、大蔵出版。
- 田久保周誉 1967 『真言陀羅尼蔵の解説』校訂増補再版 (初版: 1960) 鹿野苑。
- 塚本賢曉 [訳] 1922 「国訳底哩三昧耶不動尊聖者念誦秘密法」 『国訳密教経軌第四』 pp. 163-209、国訳密教刊行会。
- 堀内寛仁 1983 『梵蔵漢对照 初会金剛頂経の研究 梵文校訂篇 (上)』 密教文化研究所。
- 1974 『梵蔵漢对照 初会金剛頂経の研究 梵文校訂篇 (下)』 密教文化研究所。
- 松本照敬 2005 「不動明王の真言について」 『成田山仏教研究所紀要』 28、pp. 1-18、成田山新勝寺。
- 2008 『浄厳 不動忿怒瑜伽要鈔—訓下・加注—』 成田山新勝寺。
- 密教聖典研究会 1987 「Vajradhātumahāmaṇḍalopāyika-Sarvavajrodaya: 梵文テキストと和訳 (II) 完」 『大正大学総合仏教研究所年報』 第 9 号、pp. (13-85)。
- 1988 「アドヴァエヴァジュラ著作集—梵文テキスト・和訳 (1) —」 『大正大学総合仏教研究所年報』 第 10 号、pp. (1-57)。
- 森口光俊 1991 「Ācāryakriyāsamuccaya 灌頂 (品) テキストと和訳 (I-1)」 『牧尾良海博士喜寿記念儒佛道三教思想論攷』 pp. 107-133、山喜房。
- 1992 「Ācāryakriyāsamuccaya 灌頂 (品) テキストと和訳 (I-2)」 『智山学報』 41、pp. 1-31。
- 横山裕明 2020 「*Trisamayarājasādhana* について—同じ題名を持つ 2 つの底哩三昧耶系成就法—」 『佛教文化学会紀要』 第 29 号、pp.83-100。

* 本研究は JSPS 科研費 20K12807 の助成を受けたものです。

『金剛頂経』和訳(五)

高橋尚夫

はしがき

本稿は「第四・灌頂作法」の内、[一] 百八名勧請 (H196~H201) と [二] 図絵曼荼羅・金剛界曼荼羅、[三] 一切曼荼羅における阿闍梨の事業 (H202~H209) の部分を取り上げる。百八名勧請は百八名讃とも言われ、金剛薩埵以下、十六大菩薩を七種の名前をもって讃歎する。都合 112 名になるはずであるが、何故か百八名と詠われている。儀式法要における「東方讃」(金剛薩埵)と「西方讃」(金剛法菩薩)が含まれている。百八名讃については堀内寛仁師の詳細な研究がある。ここでは慶喜蔵と釈友の註釈を付しておいた。釈友の註釈に基づいて一覧表にしてみると以下ようになる。百八名讃の不空訳は訳中に付しておいたので、施護訳を挿入しておく。

[二] 図絵曼荼羅と [三] 阿闍梨の事業については、慶喜蔵の註釈を付しておいた(釈友の註釈は割愛した)が、慶喜蔵の著作である『一切金剛出現』(SVU)に反映されている。当然と言えば当然であるが、参考のために SVU のサンスクリットと和訳を付し、【訳注】の形で付しておいた。『一切金剛出現』については現在出版準備中であり、番号等はそれによっている。

百八名讃一覧表 (釈友の註釈に基づく)・漢名は施護訳

	真言の門	印の門	一切如来の門	拡散の門	大印の門	名灌頂の門	羯磨の門
薩	vajrasattva 金剛勇猛	vajra 金剛	sarvatathāgata 諸如来	mahāsattva 大正士	samantabhadra 普賢性	vajrapāṇi 聖金剛手	vajradya 金剛初
王	vajrarāja 金剛王	vajrāṅkuśa 金剛鉤	tathāgata 諸如来	vajrāgrya 金剛最上	amogharāja 不空王	vajrākaraṣa 金剛鉤召	subuddhāgrya 妙勝覺
愛	vajrarāga 金剛敬愛	vajravāṇa 金剛箭		mahāvajra 最勝大金剛	mārakāma 魔欲	vajracāpa 金剛弓	mahāsaukhya 大妙樂 vaśaṃkāra 善調伏
喜	vajrasādhu 金剛善哉	vajratuṣṭi 金剛極喜	vajrāgrya 最上金剛	mahārati 大樂	prāmodyarāja 歡喜王	vajraharṣa 金剛喜	susattvāgrya 妙生勝
宝	vajraratna 金剛妙宝	mahāmaṇi 大摩尼	suvajrārtha 金剛豊盛	vajrākāśa 金剛虚空	ākāśagarbha 虚空藏	vajragarbha 金剛藏	vajrāḍhya 堅固利
光	vajrateja 金剛妙光	vajrasūrya 金剛聖日		mahājvāla 大熾焰	mahāteja 大照明	vajraprabha 金剛閃光	jinaprabha 仏光 vajraraśmi 大金剛光
幢	vajraketu 金剛宝幢	vajradhvaja 金剛表刹	susattvārtha 善利生	mahāvajra 金剛	ratnaketu 妙宝幢相	vajrayaṣṭi 金剛利	sutoṣaka 妙歡喜
笑	vajrahāsa 金剛喜笑	vajrasmita 金剛笑	mahādbhuta 大希有	mahāhāsa 大適悅	prītiprāmodya 大喜大樂	vajraprīti 金剛妙悅	vajrāgrya 金剛初
法	vajradharma 金剛妙法	vajrapadma 金剛蓮華	sutattvārtha 真實理	suvajrākṣa 金剛眼	lokeśvara 觀照自在	vajranetra 金剛眼	suśodhaka 妙清淨
利	vajratikṣṇa 金剛利	vajrakośa 金剛劍	vajragāmbhīrya 金剛甚深	mahāyudha 大器仗	mañjuśrī 妙吉祥	vajrabuddhi 金剛慧	mahāyāna 大乘法
因	vajrahetu 金剛因	vajracakra 金剛妙輪	vajrottha 金剛起	mahāmaṇḍa 金剛場	mahānaya 大理趣	vajramaṇḍa 金剛場	supravartana 如教善轉
語	vajrabhāṣa 金剛語	vajrajāpa 金剛持誦	vajrasiddhyāgra 金剛勝悉地	suvidyāgra 最上妙明	avāca 無言	vajravāca 金剛語	susiddhida 善成就
業	vajrakarma 金剛事業	karmavajra 如金剛業	suvajrājña 妙教令	mahaudārya 極廣大	vajrāmogha 金剛不空	vajraviśva 金剛巧業	susarvaga 善遍行
護	vajrarakṣa 金剛守護	vajravarma 金剛甲冑	suviryāgrya 最勝勤勇	mahādhairya 大精進	duryodhana 極難敵	vajravīrya 金剛精進	mahāḍṛḍha 大堅固
牙	vajrayakṣa 金剛業叉	vajradamṣṭra 金剛利牙	mahopāya 大方便	mahābhaya 大恐怖	mārapramardi 摧伏魔力	vajracaṇḍa 金剛暴怒	vajrogra 勝金剛
拳	vajrasandhi 妙金剛拳	vajrabandha 金剛堅固	susānnidhya 大威力	agrasamaya 勝三昧	vajramuṣṭi 金剛拳	vajramuṣṭi 金剛拳	pramocaka 善解脫

略号

梵文テキスト

TS 堀内寛仁「梵藏漢対照 初会金剛頂經の研究 梵本校訂篇」(上)(下)、密教文化研究所、昭和58年(上)、昭和49年(下)

H 堀内本の番号。なお、堀内本にはないが、真言の所出の順に○番号を附した。

チベット訳

Tib. Śraddhākaravarman, Rin chen bzang po 訳 ; “De bzhin gshegs pa Thams cad kyi de kho na nyid bsdus pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo”

P 北京版西藏大藏經、大谷大学、No.112 na 1~162

D デルゲ版西藏大藏經、東北大学、No.479 na 1~142

N ナルタン版西藏大藏經、大正大学、No.432 ja 213~440

漢訳

〔不空〕 不空訳『金剛頂一切如来真實撰大乘現証大教王經』三卷、大正蔵18、No.865

〔施護〕 施護訳『仏説一切如来真實撰大乘現証三昧大教王經』三十卷、大正蔵18、No.882

〔金剛智〕 金剛智訳『金剛頂瑜伽中略出念誦經』四卷、大正蔵18、No.866

註釈

〔慶喜藏〕 Ānandagarbha ; Sarvatathāgata-tattvasaṃgrahamahāyānābhisamaya-nāma-tantravyākhyā-tattvālokakāri-nāma (P No.3333, D No.2510)

〔釈友〕 Śākyamitra ; Kosalālaṃkāratattvasaṃgrahaṭīkā (P No.3326, D No.2503)

〔覺密〕 Buddhaguhya ; Tantrārthāvatāra (P No.3324, D No.2501)

その他参考文献

VS Karmavajra, Gshun nu tshul khrim 訳: Vajrasikharamahāguhya-yogatāntra

D デルゲ版 東北目録 No.480 (台北版 No.478, Vol.17)

P 北京版 大谷目録 No.113, Vol.5

北村太道・タントラ仏教研究会『全訳 金剛頂大秘密瑜伽タントラ』起心書房、平成 24 年 11 月

SVU Ānandagarbha ; Vajradhātumahāmaṇḍalopāyikā sarvavajrodayā nāma

Kun dga' snying po ; Rdo rje dbyings kyi dkyil 'khor chen po'i cho ga rdo rje thams cad 'byung ba zhes bya ba //

「金剛界大曼荼羅儀軌一切金剛出現」

P No.3339、D No.2516、N No.1337

なお、SVU の番号は筆者の整理番号であるが、テキストと和訳等は仮題『一切金剛出現の研究』として刊行の予定。

堀内寛仁「百八名讃の註釈的研究(一)」『密教文化』112号、高野山大学、1975 II

「百八名讃の註釈的研究(二)」『密教文化』113号、高野山大学、1975 III

「百八名讃の註釈的研究(三)」『密教文化』114号、高野山大学、1975 IV

遠藤祐純「Ānandagarbha 造『Tattvāloka』「金剛界品」金剛界大曼荼羅 和訳」ノンブル社、2014年10月

同 「Śākyamitra 造『Kosalānikāra』「金剛界品」金剛界大曼荼羅 和訳」ノンブル社、2015年7月

津田真一『和訳 金剛頂経』東京美術、平成7年

第四・灌頂作法

[一] 百八名勧請

H196 そのとき、世尊一切の如来たちは、再びまた、集会して、この金剛界大曼荼羅の加持のために、また、残り無く余すこと無き有情界の救護と一切の[有情]が利益と安楽を獲得するために、乃至、一切如来の平等性の智と神通と現証の最上の成就のために、世尊であり、一切如来の主宰であり、自金剛薩埵であり、無始無終である大持金剛(mahā-vajradhara : rdo rje 'dzin pa chen po)¹をこの百八名[の賛歌]をもって勧請した。

【訳注】1 「大持金剛(mahā-vajradhara : rdo rje 'dzin pa chen po)」を文字通りに読めば、「偉大な持金剛」と言うことであろうが、慶喜蔵の註釈によれば、「如来の大金剛を持することをなすので、大金剛持であるという」(de bzhin gshegs pa'i rdo rje chen po 'dzin par mdzad de / de'i phyir rdo rje chen po 'dzin pa la zhes smos so //)とある。rdo rje chen po 'dzinとあるからには、mahāvajra-dharaとなり、「大金剛を持するもの」の意となる。しかし、いずれにしろ金剛薩埵のことであり、単なる訳語の違いに過ぎないかも知れないが、「大持金剛」と「大金剛持」の二語に訳し分けておく。釈友についても同様の区別をしておく。また、ここで「自金剛薩埵」(svavajrasattva)という特異な語が出てくる。釈友の注によれば「自身の菩提心」(bdag nyid kyi byang chub kyi thugs)とある。菩提心の心が thugs という尊敬語が使われている。単なる菩提を求める心ではなく、まさに大毘盧遮那の菩提そのものの心(所求菩提心)であろう。大金剛持の大金剛も大菩提心と言えるかもしれない。追記 最近このsvavajrasattvaについて、明解な論文が提示された。是非一覽を乞う。

大塚恵俊『理趣広経』「大楽金剛秘密」における*svavajrasattvaについて』『密教学』第62号、2021年

慶喜蔵 (D 102a4~, P 126a1~)

ここに、曼荼羅に入って灌頂の方便に入るべきであると示されたる故に、「そのとき」云々と説かれる。そのとき、世尊一切如来は大持金剛 (rdo rje 'dzin pa chen po) に対して「この百八名にて勧請した」というそこに結びつく。何のために勧請するのかとならば、「この金剛界大曼荼羅」と説くのであって、次のように示したのである。「加持」というのは、阿闍梨が展転して著した儀則によって、長時に住持したそれによって、無尽無余の有情界が説かれたように救済等の果を獲得するためである。「一切如来の」というのは、毘盧遮那等の平等性の智であり、法界における所縁の心と[六]神通であって、それらの神通は説かれたように六である。かくの如くならば、「一切如来の (D 102b) 平等性による智と神通と正等菩提を現証すること」であり、それを「最上成就」というのであって、それらのために勧請するのである。「一切如来の主宰であり」というのは、無所縁の大悲を自体とする普賢が「一切如来の主宰」である。なぜならば、それより以前の所引の力によって生じて、それらもまたその力によって入ることである(?)。それによるならば、世尊・一切如来の主宰といわれる。彼はまた、彼らの主宰であって、金剛薩埵であることにより、(P 116b) そのために、「自金剛薩埵 (rang gi rdo rje sems dpa' 本尊金剛薩埵?)」と説かれる。彼はまた、自性からして輝くものであることにより、常に不二性であって、それによるならば、「無始無終」と説かれる。それによるならば、如来の大金剛を持するものとなり、その故に、「大金剛持 (rdo rje chen po 'dzin pa : mahāvajra-dhara) を」と言うのである。「これによって」というのは、次に説くことで、ここに据えて説くのである。「勧請」というのは、啓請することである。それを示したのが、「金剛薩埵」云々である。

〔**釈友**〕 (D 84b1~, P 99a5~)

「そのとき」というのは、接続詞である。四魔を征服 (bcom pa) し、[六徳を]具足したこと (dang ldan pa) によるならば、「世尊」(bcom ldan 'das) である。「一切如来」とは、阿闍等の四化身たちと共なることである。「再びまた」というのは、超える ('das : 覚る) や否や集会をなして観待することである。「無余の世間界における[無余の有情界を]救護して、輪廻の苦しみから解脱するためと、一切を利益すること」というのは、未来の事業の安楽となるであろう。「安楽」とは、身と

心の一切の安楽である。それを供給することが「獲得」であって、その「ため」である。「乃至」という語によって、菩提心等より、[十]地と「六」波羅蜜多等を摂受するのである。「一切如来の平等性」とは、一切如来の平等性、それは法性と同じである。その「智」があることによるならば、「一切如来の平等性の智」である。それこそ「神通」であり、その「現証」とは、能入して作証することである。それこそが「最上成就」であって、その故である。それはまた、「仏性に至るまでのため」ということを示したのである。この金剛が界 (khams) と因であることによるならば、「金剛界」(rdo rje dbyings) であり、金剛界と言ったのは、三界より勝れていることを観待したのである。曼荼羅でもあって大でもあるならば、「大曼荼羅」である。四印の曼荼羅等を観待したのである。「これ [によって]」というものは、説いてすぐである。「加持」とは、摂受であって、このように摂受した理趣によって、真言行の理趣を長く住させること、それが「加持」であると説くのである。「一切如来の主宰であり、自金剛薩埵 (rang gi rdo rje sems dpa')」とは、自身の菩提心 (bdag nyid kyi byang chub kyi thugs) である。そこに於いては、始めもまたあることなく、最後に相続を分析 (yongs su chad pa) する相を滅することもないので、「無始無終」である。(D 85a) 他の持金剛たちもいるが、彼らより喜ばしきがために、世尊普賢は大金剛持 (rdo rje chen po 'dzin pa) といわれ、一切智者の智の大金剛を持することによるならば、大金剛持である。「百八」と言うことは、所見のみを尽くせば、それは百十二であって、ウダーナのそれぞれはまた、七つずつの名がある。そこで、真言の門からが第一、印の門からが第二、印より一切如来が、一切如来の門から普通の名が第三、拡散の門から名前を他につけるのが第四、大印の門から名前をつけるのが第五、名灌頂の門から名前をつけるのが第六、作利益の門から名前をつけるのが第七である。このように、ウダーナのそれぞれはまた、七義であり、名仮立の因であると知るべきである。「これによって」というのは、次に説くことである。供養を先とする教えによって勧請するならば、「勧請」である。その供養はまた、何であるかとならば、百八名である。

H197 1) 金剛薩埵 (vajrasattva 金剛勇) よ 偉大な薩埵 (mahāsattva 大

心)¹よ

金剛杵 (vajra 金剛)よ 一切如来 (sarvatathāgata 諸如来)よ
普賢 (samantabhadra)よ 金剛 [種族]の筆頭 (vajrādya 金剛初)よ
金剛手 (vajrapāṇi)よ 汝に帰命し奉る。(東方讚)

【訳注】1 「偉大な薩埵 (mahāsattva 大心)」不空訳は「大心」とあるが、施護訳には「大正土」とある。なお、この金剛薩埵の讚は「東方讚」といい、法要において唱えられている。

慶喜蔵 (D 102b5~, P 116b3~)

「金剛薩埵」というのは、ここに「vajrasattva」という理趣で、心呪 (snying po)と説くものである。「汝」とは、金剛薩埵という語の自性であるという定語である。

「大薩埵」というのは、法界の月輪等の拡散が「大薩埵」である。

「金剛」とは、ここでは五鉷金剛杵である。

「一切如来」というのは、一切の世間界の極微塵と等しい諸仏の理趣によるならば、「一切如来」である。

金剛王等々において、最初に生起するならば、「金剛初」である。

一切如来もまた、一つになって生じたものが金剛薩埵の身であるならば、「普賢」である。

金剛杵によって暗示された手があることによるならば、(D 103a)「金剛手」である。

このようであるならば、七名である。

積友 (D 85a5~, P 100a3~)

「金剛薩埵」というのは真言 (sngags)の門¹からである。

「大薩埵」というのは、拡散の門からである。

「金剛 [杵]」というのは、印の門からである

「一切如来」とは、一切如来生起性によってである。

諸金剛の筆頭であるならば、「金剛初」であって、曼荼羅において最初に生じる

ものであるが故に。

「普賢」とは、大印の門からである。

「金剛手」とは、名灌頂の門からである。

【訳注】1 「真言 (sngags)の門」、積友は真言の門 (sngags kyi sgo)とあり、慶喜蔵は心呪 (snying po)という。

2) 金剛王 (vajrarāja)よ 妙覚の最勝 (subuddhāgrya 妙覚)よ
金剛鉤 (vajrāṅkuśa)よ 如来 (tathāgata)よ
不空王 (amogharāja)よ 金剛最勝 (vajrāgrya 金剛)よ
金剛鉤召 (vajrākārṣa 金剛召)よ 汝に帰命し奉る。

慶喜蔵 (D 103a1~, P 116b7~)

「vajrarāja」というのは、金剛王の心呪である。

「覚最勝」というのは、自身(金剛王菩薩)が一切如来を鉤召する事業の妙覚者たちの最勝である。

「金剛鉤」というのは、自身の相の印なるものがあるが、それが「金剛鉤」である。

「如来」というのは、如実に説かれた一切如来の本性であることによって、「如来」である。

「不空王」というのは、金剛王の身の理趣によってである。

「金剛最勝」というのについて、「金剛」とは如来たちであって、四摂事の理趣によってそれら[如来たち]の最勝となるのである。

[金剛王]自身を、いかなる時であれ、如来たちが金剛鉤を授けて、名灌頂によって灌頂するその時、「金剛鉤召」というのである。

このように七名である。

積友 (D 85a6~, P 100a5~)

「金剛王」とは、真言の門からである。

妙覚者たちの最勝であることによるならば、「妙覚最勝」であって、鉤召の義によって、羯磨の門からこのように名づけられる。

『金剛頂経』和訳(五)(高橋)

「金剛鉤」とは、印の門からである。

「如来」とは、一切如来生起性によってであり、「一切」という[語]を言わないのは、偈頌の[韻律]によるところである。

(D 85b)「不空王」とは、大印の門からである。

「金剛最勝」とは、諸金剛の第一であることによるならば、「金剛最勝」であって、拡散の門からである。

鉤の印によって鉤召するならば、「金剛鉤召」であって、名灌頂の門からである。

3) 金剛愛 (vajrarāga 金剛染) よ 大安楽 (mahāsaukhya 大楽) よ
金剛箭 (vajravāna) よ 能伏するもの (vaśaṃkāra 能伏) よ
魔欲 (mārakāma) よ 偉大な金剛 (mahāvajra 大金剛) よ
金剛弓 (vajracāpa) よ 汝に帰命し奉る。

慶喜蔵 (D 103a4~, P 117a2~)

「vajrarāga」というのは、金剛愛の心呪である。

「大安楽」というのは、安楽でもあって、大でもあることによって「大安楽」であって、大安楽性において、「大安楽」というのである。それはまた、「成熟しない安楽が大安楽と説くのである」(出典?)と説かれることによって、法無我の智が「大安楽」である。[金剛箭]というものは、彼の相の印である。

「能伏」というのは、一切智者の智の堪任であって、如実に有情たちを調伏することによるならば、「能伏」である。

「魔欲」というのは、魔でもあって、欲でもあることによるならば、「魔欲」であって、声聞と独覚の心を殺害することによるならば、「魔」である。自身が菩提心の本体であることによるならば、「欲」であって、それは一名である。それによって、愛の身の理趣を説いたのである。

「大金剛」というのは、拡散の理趣によるものである。

「金剛弓」というのは、名[灌頂の]門¹からであって、このようであるならば、七[名]である。

【訳注】1 「名[灌頂の]門」 mtshan ma'i sgo (相の門) とあるが、補訂した。

積友 (D 85b2~, P 100a8~)

「金剛愛」とは、真言の門からである。

「大安楽」とは、安楽をなすことで、羯磨の門からである。

「金剛箭」とは、印の門からである。

「能伏者」というのは、これもまた羯磨の門からで、他の相統 (rgyud : tantra?) を調伏することを示すが故である。

「魔」とは、魔行の義によってであり、声聞と独覚の地によって集積した善心の中断があるが故である。「欲」とは、欲楽の自体となるもので、欲と欲楽と愛着というものは異名である。これらは一名たることであるけれども、そのはたらきから区別がなされるために、「魔」というのは、天子魔に対しても用いられるものである。それによるならば、「欲」という語を説いたことによって、菩提心の魔¹であって、他ではないと示したのである。

「大金剛」とは、拡散の門からである。

「金剛弓」とは、別名の門から名灌頂を示したのであって、何故ならば、彼を「金剛弓なり、金剛弓なり」と金剛名灌頂によって灌頂を授けたのであるが故である。

【訳注】1 「菩提心の魔」 (byang chub kyi sems kyi bdud) 「魔欲」について、慶喜蔵を加味すれば、二乗を排斥するから「魔」であり、菩提心(菩提を求める心)であるから「欲」であるとの意となろうが、「菩提心の魔」とは何であろうか。不如意である。

4) 金剛善哉 (vajrasādhu 金剛善) よ 妙なる薩埵の最勝 (susattvāgrya 薩埵) よ
金剛満足 (vajratuṣṭi 金剛戯) よ 大歡喜 (mahārati 大適) よ
極喜王 (prāmodyarāja 歡喜王) よ 金剛最勝 (vajrāgrya 金剛) よ
金剛喜 (vajraharsa) よ 汝に帰命し奉る。

慶喜蔵 (D 103a7~, P 117a7~)

『金剛頂経』和訳(五)(高橋)

「vajrasādhu」というこの名前は、金剛善哉(喝采)の心呪の門からである。

「薩埵最勝」というのは、(D 103b)一切如来の歡喜を生起したことによって、無上であることによって「薩埵最勝」である。

「金剛満足」というのは、[金剛喜菩薩]自身の相の印が「金剛満足」である。

「大歡喜」というのは、歡喜の理趣によって、一切虚空に遍満することによってである。

「極喜王金剛最勝」¹というの、極喜王でもあって、金剛最勝でもあることによって、「極喜王金剛最勝」であって、金剛善哉の身である。そのうち、「極喜」とは意安樂である。それによって美しく燃えるならば、「極喜王」である。自身が「金剛」であって、仏と菩薩たちより「最勝」となることによって、「極喜王金剛最勝」といわれる。

「金剛喜・汝」というその名前は名灌頂であって、このようであるならば五[名]である。

【訳注】1 「極喜王金剛最勝」を、不空は「歡喜王金剛」と訳し、施護は「最上金剛歡喜王」と訳す。いずれにしても「極喜王」と「金剛最勝」との二名にするべきであろうが、**慶喜藏**は一名とする。都合六名となるが、註釈文には五名とある。

积友 (D 85b4~, P 100b4~)

「金剛善哉」とは、真言の門からである。

「薩埵」とは、仏と聖菩薩たちであって、それらの「最勝」とは、一切を鼓舞する義によってである。

「金剛満足」とは、印の門からである。

「大悦」とは、大歡喜性であって、印拈散の門からである。

「歡喜王」とは大印の門からである。

「金剛最勝」とは、一切如来の諸金剛を一自体となす義によるならば、「金剛最勝」である。

「金剛喜」は名灌頂の門からである。

H198 5) 金剛宝 (vajraratna) よ 妙金剛の義利 (suvajrārtha 金剛) よ 金剛虚空 (vajrākāśa 金剛空) よ 偉大な宝 (mahāmaṇi 大宝) よ 虚空藏 (ākāśagarbha 空藏) よ 金剛豊饒 (vajrāḍhya 金剛豊) よ 金剛藏 (vajragarbha) よ 汝に帰命し奉る。

慶喜藏 (D 103b3~, P 117b3~)

「vajraratna」というのは、金剛宝の心呪の門からである。

「金剛義利」というのは、一切如来の灌頂そのものによるならば、最勝となるが故に、妙金剛の義利であって、諸金剛の利益をなすことである。

「金剛虚空」というのは、金剛宝の生処であることと、虚空と等同なる光明があることによるならば、「金剛虚空」である。

「大宝」というのは、金剛宝の印によって虚空に拡散することによるならば、「大宝」である。

「虚空藏金剛豊」¹というの、虚空の藏でもあって、金剛豊でもあることによるならば、「虚空藏金剛豊」といわれるのであって、虚空藏の身は虚空藏そのものであることを獲得するのである。

「金剛藏」というのは、名灌頂の門から「金剛藏」というのであって、このようであるならば六名である。

【訳注】1 「虚空藏金剛豊」は、経典では虚空藏と金剛豊の二語にわかれるが、**慶喜藏**は一語とし、都合六名を数える。

积友 (D 85b6~, P 100b6~)

「金剛宝」とは、真言の門からである。

「金剛」とは、如来たちである。彼らの義利であることによるならば、「金剛の義利」であって、布施波羅蜜多を円満する因となるが故である。

金剛の如き心によって、虚空より生じるものであるが故に「金剛虚空」である。

「大宝」とは、印の門からである。

『金剛頂経』和訳(五)(高橋)

(D 86a)「虚空蔵」とは、大印の門からである。

諸金剛によって、豊饒なることが「金剛豊饒」であって、一切の想いを円満することの門からである。

「金剛蔵」とは、名灌頂の門からである。

6) 金剛威光 (vajrateja 金剛威) よ 偉大な光炎 (mahājvāla 大炎) よ
金剛日 (vajrasūrya) よ 勝者の光明 (jinaprabha 仏光) よ
金剛光線 (vajraraśmi 金剛光) よ 大威光 (mahāteja 大威) よ
金剛光明 (vajraprabha 金剛光) よ 汝に帰命し奉る。

慶喜蔵 (D 103b6~, P 117b7~)

「vajrateja」というのは、心呪の門からである。

「大炎」というのは、虚空に遍満する光明があることである。

「金剛日」というのは、金剛日の印の理趣の門からである。

「勝者の光明」というのは、勝者たちの光明の輝きがそこにあることによるならば、「勝者の光明」であり、虚空と平等性の智より (D 104a) 生じる所の微塵の如来を撰取することによって、その輝きを獲得するので「勝者の光明」といわれる。

「金剛光線」というのは、不壊の光明がそこにあることによるならば「金剛光線」である。

「大威光」というのは、一切の世間界の極微塵に等しい日の増上の光明があることによるならば、「大威光」である。

「金剛光明」というのは、名灌頂の名であって、このようであるならば七名である。

積友 (D 86a1~, P 101a1~)

「金剛威光」とは、真言の門からである。

「廣大に燃えるもの」とは、拡散の門からである。

「金剛日」とは、印の門からである。

「勝者の光明」とは、羯磨の門からである。

「金剛光線」とは、羯磨の特殊な門からであって、光線を発散する事業をなすこ

とであるが故である。

「大威光」とは、大印の門からである。

「金剛光明」とは、名灌頂の門からである。

7) 金剛幢 (vajraketu) よ 妙有情利益 (susattvārtha 善利) よ
金剛幢幡 (vajradhvaja 金剛幡) よ 善く満足させるもの (sutoṣaka 妙喜) よ
宝幢 (ratnaketu) よ 偉大な金剛 (mahāvajra 大金剛) よ
金剛旗 (vajrayaṣṭi 金剛刹) よ 汝に帰命し奉る。

慶喜蔵 (D 104a2~, P 118a3~)

「vajraketu」というのは、心呪の門からである。

「妙有情利益」というのは、有情たちを満足させることによるならば、有情たちの利益をなすことがここにあることによるならば、「妙有情利益」である。

「金剛幢幡」というのは、相の印の理趣によるならば、「金剛幢幡」といわれる。

「よく喜ばせる」というのは、金剛幢幡そのものによって、一切如来の布施波羅蜜多において安立することによるならば、「よく喜ばせる」である。

「大金剛」というのは、金剛幢幡の印によって、一切の虚空に遍満することによるならば、「大金剛」である。

「宝刹」¹というの、菩薩の宝幢の身においてなされると説く。

「金剛刹」²というの、名灌頂の門からで、このようであるならば七名である。

【訳注】1 「宝刹」Pには rin chen dbalとあり、Dには rin chen dpal (宝吉祥)とあるが、Pを取る。

2 「金剛刹」Pには rdo rje dbalとあり、Dには rdo rje dpal (宝吉祥)とあるが、Pを取る。

積友 (D 86a3~, P 101a2~)

『金剛頂經』和訳(五)(高橋)

有情利益の最勝の因となることによるならば、「妙有情利益」である。

「金剛利」(rdo rje dbal : vajraketu) とは、真言の門からである。

「金剛幢」とは、印の門からである。

「よく喜ばせる」とは、羯磨の門からである。

「大金剛」とは、拡散の門からである。

「宝利」とは、大印の門からである。

「金剛利」(rdo rje dbal : vajrayaṣṭi) とは、名灌頂の門からである。

8) 金剛笑 (vajrahāsa) よ¹ 大笑 (mahāhāsa) よ
金剛微笑 (vajrasmita 金剛笑) よ 大奇特 (mahādbhuta 大奇) よ
喜悅 (pṛitiprāmodya 愛喜) よ 金剛最勝 (vajrāgrya 金剛勝) よ²
金剛悅 (vajrapṛiti 金剛愛) よ 汝に帰命し奉る。

【訳注】1 「金剛笑」チベット訳には、rdo jre bzhad mo (金剛笑女) とある。慶喜蔵

は vajrahāsa とし、[釈友]には rdo jre bzhad mo (金剛笑女) とある。

2 「金剛最勝」チベット訳には、rdo rje ston (金剛説示) とある。

慶喜蔵 (D 104a5~, P 118a7~)

「vajrahāsa」というのは、心呪の門からである。

「大笑」というのは、笑の印によって一切虚空に遍満することによるならば、「大笑」である。

「金剛微笑」というのは、金剛笑の相の印において、そのようにいわれると説くのである。

印そのものによって一切如来の微笑において確実に瑜伽をなすことによるならば、「大奇特」であって、分別なきものたちにおいては、笑いはないが故である。

「喜んで悦ぶ」¹というの、有情界を喜ぶことと、喜びがどこにでもある、それが「喜んで悦ぶ」であって、金剛笑の身である。

「金剛説示」²というの、「金剛説示」がそこにあることによるならば、「金剛説示」

であって、微笑の中に含まれる不可得の (D 104b) 法施の金剛宣示³である。

「金剛悦」というのは、名灌頂によるならば、その門からそのようにいわれ、このように七名である。

【訳注】1 「喜んで悦ぶ」を施護は「大喜大樂」とする。チベット訳は dga' zhing rab dga' とあるので表記のように訳した。

2 「金剛説示」チベット訳は rdo rje ston [pa] とあるが、サンスクリットは vajrāgrya である。施護は「金剛初」と訳す。

3 「金剛宣示」チベット訳は rdo rje nye bar ston pa とある。

[釈友] (D 86a5~, P 101a4~)

「金剛笑女」とは、真言の門からである。

「大笑」とは、拡散の門からである。

「金剛微笑」とは、印の門からである。

「大奇特」とは、希有なる義を示すものであるが故である。

「喜悅」とは、大印の門からである。

「金剛説示」¹とは、諸金剛を説示することによるならば、「金剛説示」であって、金剛覚悟の微笑を説示するが故である。

「金剛悦」とは、名灌頂の門からである。

【訳注】1 「金剛説示」経典は vajrāgrya であるが、チベット訳は rdo rje ston である。

H199 9) 金剛法 (vajradharma) よ 妙真実義 (sutattvārtha 善利) よ
金剛蓮華 (vajrapadma 金剛蓮) よ 善く清浄にするもの (suśodhaka
妙浄) よ
世自在 (lokeśvara 世貴) よ 妙なる金剛視 (suvajrākṣa 金剛眼) よ
金剛眼 (vajranetra) よ 汝に帰命し奉る。(西方讚)

慶喜蔵 (D 104b1~, P 118b3~)

『金剛頂経』和訳(五)(高橋)

金剛法は「vajradharma」という心呪の門からである。

「妙真実義」¹とは、善妙なる真実性が真実義であって、自性からして清浄なる義においてそのようにいわれる。

「金剛蓮華」というのは、世尊の蓮華の印においてなされる。

「妙喜をなす」²というの、自性からして清浄なる法性の智によって、有情たちを極清浄になすならば、「妙喜をなす」である。

「世自在」というのについて、「世」とは、諸の有情世界である。「自在」とはその主宰であることによるならば、金剛法の身である。

「金剛視」³というの、金剛眼の印が美妙であることによって「金剛視」である。

「金剛眼汝」というのは、名灌頂の門からであって、

このようであるならば七名である。

【訳注】1 「妙真実義」 sutattvārtha、D には rab dga' de nyid don 「妙喜真実義」とあるが、P には rab de nyid don とあり、経典も同じである。施護は「真実理」と訳す。不空訳の「善利」は金剛幢菩薩の第二名と同じ訳語であるが、そのこのサンスクリットは susarvārtha である。

2 「妙喜をなす」サンスクリットの suśodhaka を、チベット訳は rab dga' byed (妙喜をなす) とする。不空は「妙浄」、施護は「妙清浄」と訳す。チベット訳は rab dag byed (よく清浄にする) の間違いであろうか。

3 「金剛視」チベット訳は rdo rje spyan とあり、次の「金剛眼」と同じ訳語になっている。

【釈友】(D 86a5~, P 101a6~)

「金剛法」とは、真言の門からである。

真実最勝なるものが「妙真実義」であって、そのすべての境界である故に、菩提心そのものを所縁とするが故である。

「金剛蓮華」とは、印の門からである。

よく喜ばせるもの¹が、「妙喜」であり、有情たちの想いをよく清浄になすものであるが故である。

「世自在」とは、大印の門からである。

「金剛視」とは、金剛の如き印の門からである。

「金剛眼」とは、名灌頂の門からである。

【訳注】1 「よく喜ばせるもの」チベット訳は rab tu dga' ba とあるが、サンスクリットは suśodhaka である。施護訳は「妙清浄」。これも rab tu dag pa の間違いであろうか。

10) 金剛利 (vajratikṣṇa) よ 大乘 (mahāyāna) よ
金剛劍 (vajraśośa) よ 偉大な器杖 (mahāyudha 杖器) よ
文珠 (mañjuśrī 妙吉) よ 金剛甚深 (vajragāmbhīrya 金剛深) よ
金剛慧 (vajrabuddha) よ 汝に帰命し奉る。

【慶喜蔵】(D 104b4~, P 118b6~)

金剛利は「vajratikṣṇa」といって、心呪の門からである。

「大乘」というのは、般若と大智の本体であることによるならば、大乘そのものである。世尊聖妙吉祥(文殊)である。

「金剛劍」といいうのは、劍の標幟の門からである。

「大器杖」といいうのは、劍をもって虚空に遍満をなすことである。

「妙吉祥」といいうのは、文殊童真の身あることによってである。

「金剛甚深」といいうのは、金剛と似た甚深なる般若がここにあることによるならば、そのようにいわれる。

「金剛慧」といいうのは、名灌頂の門からであって、

このようであるならば七名である。

【釈友】(D 86a7~, P 101a8~)

「金剛利」とは、真言の門からである。

「[大]乗」は教えをなす門からである。

「金剛劍」とは、印の門からである。

「大器杖」とは、拈散の門からである。

「妙吉祥」とは、大印の門(D 86b)からである。

『金剛頂經』和訳(五)(高橋)

「金剛甚深」とは、甚深なる法を示す義によってである。

「金剛慧」とは、名灌頂の門からである。

11) 金剛因 (vajrahetu) よ 偉大な道場 (mahāmaṇḍa 大場) よ
金剛輪 (vajracakra) よ 偉大な理趣 (mahānaya 理趣) よ
善く転じるもの (supravartana 能転) よ 金剛生起 (vajrottha 金
剛起) よ
金剛道場 (vajramaṇḍa 金剛場) よ 汝に帰命し奉る。

慶喜蔵 (D 104b6~, P 119a1~)

金剛因は「vajrahetu」というもので、心呪の門からである。

「大道場」というのは、輪の印をもって虚空に遍満をなすことである。

「金剛輪」というのは、輪の印の門からである。

「大理趣」というのは、金剛界等の大曼荼羅の理趣によって、虚空に遍満をなすことによってである。

「善く転じる」というのは、自身(金剛因菩薩)が発心するのみで、善く転[法]輪をなすことによるならば、(D 105a)「善く転じる」である。

「金剛より生起する」というのは、般若波羅蜜多の金剛より生じることの故である。

「金剛道場」というのは、名灌頂の門からであって、
このようであるならば七名である。

積友 (D 86b1~, P 101b2~)

「金剛因」とは、真言の門からである。

「大道場」とは、拡散の門からである。

「金剛輪」とは、印の門からである。

「大理趣」とは、真言の門を行ずることの自体によってである。

「よく転じる」とは、転[法]輪であって、羯磨の印の門からである。

「金剛より生起する」とは、金剛の如き三摩地より生じることが故である。

「金剛道場」とは、名灌頂の門からである。

12) 金剛語¹ (vajrabhāṣa 金剛説) よ 妙なる明呪の最勝 (suvidyāgra 妙明) よ

金剛誦 (vajrajāpa) よ 妙なる成就を与えるもの (susiddhida 妙成) よ
無言 (avāca) よ 金剛悉地最勝 (vajrasiddhyagra 金剛成) よ
金剛言 (vajravāca 金剛語) よ 汝に帰命し奉る。

【訳注】1 「金剛語」サンスクリットは vajrabhāṣa で、チベット訳は rdo rje gsung ba とある。七番目の「金剛言」(vajravāca) のチベット訳も rdo rje gsung とあり、チベット訳は同じである。

慶喜蔵 (D 105a1~, P 119a4~)

金剛語というものは、「vajrabhāṣa」であって、心呪の門からである。

「妙なる明呪の最勝」というのは、美妙なる明呪であることによるならば、「妙明呪」であって、四無碍解を自性とする語に随順する般若である。理趣そのものによるならば、最勝であることによって、「妙なる明呪の最勝」である。

「金剛誦」というのは、舌の印の門からである。

「妙なる成就を与えるもの」というのは、その舌の印によって、妙なる悉地の施与をなすことによるならば、「妙成就施与」である。

「無言金剛」¹というものは、金剛語の身においてである。

「最勝悉地」というのは、金剛舌によって一切如来より自から悉地を獲得することによるならば、「最勝悉地」である。

「金剛語」というのは、名灌頂の門からであって、
このようであるならば七名である。

【訳注】1 「無言金剛」経典には、avāca vajrasiddhyagra とあり、施護訳には「無言金剛勝悉地」とある。avācavajra siddhyagra とも考えられる。堀内師は不空訳を「無言金剛」と「成」とするのは均衡を失すること、次の積友や『二卷経』に無言とある

『金剛頂経』和訳(五)(高橋)

ことなどの理由により「無言」と「金剛成」とする。

〔**积友**〕(D 86b2~, P 101b3~)

「金剛語」とは、真言の門からである。

「自明最勝」¹とは、明呪と真言と心呪などを誦する義によっては最勝であるが故である。

「金剛誦」とは、印の門からである。

「妙成就を与える」とは、美妙なる悉地を与えることをなすが故である。

「無言」とは、大印の門からである。

「金剛最勝成就」とは、最勝などを与えることをなすことによるならば、「金剛最勝成就」²である。

「金剛語」とは、名灌頂の門からである。

【訳注】1 「自明最勝」サンスクリットは *suvidyāgra* とあり、不空訳「妙明」、施護訳「最上妙明」とある。經典の北京版ならびに〔**积友**〕には *rang rig mchog* とあり、*svavidyāgra* とも考えられるが、堀内師は *rang* は *rab* の間違いとする。

2 「金剛最勝成就」D には *rdo rje mchog grub pa'o* とあるが、P には *rdo rje* が欠けている。

H200 13) 金剛業 (vajrakarma) よ 妙金剛教令 (suvajrājña 教令) よ 羯磨金剛 (karmavajra 業金剛) よ 善く一切に行き互るもの (susarvaga 遍行) よ 金剛不空 (vajrāmogha) よ 大広大 (mahaudārya 広) よ 金剛毘首 (vajraviśva 金剛巧) よ 汝に帰命し奉る。

〔**慶喜蔵**〕(D 105a4~, P 119a8~)

金剛業は「vajrakarma」というのであって、心呪の門からである。

「妙金剛教令」というのは、極美妙なる金剛が「妙金剛」であり、如来達である。それら〔如来たち〕の「教令」とは教説のことであって、仏陀の化作と有情たち

の利益がなされるのである。それがここにあることによるならば、「妙金剛教令」である。

「羯磨金剛」というのは、十二峯の毘首金剛〔杵〕の印の門からである。

「遍行」というのは、毘首金剛〔杵〕が虚空に遍満することである。

「金剛不空」というのは、菩薩毘首金剛の身の門からである。

「広大」というのは、無尽無余の供養によって、一切如来を供養することによるならば、「広大」である。

「金剛毘首」というのは、名灌頂の門からであって、

このようであるならば七名である。

〔**积友**〕(D 86b4~, P 101b5~)

「金剛業」とは、真言の門からである。

回転する金剛¹(十字金剛杵)は仏世尊であって、彼らの教令の如くなすならば、「金剛教令」である。

「羯磨金剛」とは、印の門からである。

一切に行き渡ることによるならば、「遍行」であって、羯磨の門からである。

「金剛不空」とは、大印の門からである。

「広大」とは、供養の事業であって、拡散の門からである。

「金剛毘首」とは、名灌頂の門からである。

【訳注】1 「回転する金剛」チベット訳は *rab tu gyur pa'i rdo rje* とある。*rab tu gyur pa* は *parāvṛtta*、あるいは「真言転じて金剛杵となる」の意か。いずれにしても羯磨金剛杵のことであろう。

14) 金剛護 (vajrarakṣa) よ 大勇 (mahādhairya) よ 金剛甲冑 (vajravarma 金剛甲) よ 大堅固 (mahādṛḍha 大堅) よ 難敵 (duryodhana)¹ よ 妙なる精進の最勝 (suvīryāgrya 妙精進) よ 金剛精進 (vajravīrya 金剛勤) よ 汝に帰命し奉る。

『金剛頂経』和訳(五)(高橋)

【訳注】1 「難敵 (duryodhana)」チベット訳は、thub par dka' 「堪任しがたい」とある。

慶喜蔵 (D 105a7~, P 119b4~)

金剛護は「vajrarakṣa」であって、心呪の門からである。

「大勇」というのは、三輪清浄の事業の精進の理趣によってである。

「金剛甲冑」というのは、甲冑の印の門からである。

「大堅固」というのは、それ自身(金剛護菩薩)は押し量り難いものである(D 105b) が故である。

「最勝精進は堪任しがたい」¹ というのは、精進の最勝であって、堪任しがたきものであることによるならば、「最勝精進は堪任しがたい」といい、大菩薩金剛護の身である。

「金剛精進」というのは、名灌頂の門からであって、

このようであるならば七名である。

【訳注】1 「最勝精進は堪任しがたい」チベット訳は、brtson 'grus mchog ni thub par dka' とあり、一語に読むが、経文のように二語に読むべきであろう。註釈文も七名としている。

積友 (D 86b5~, P 101b7~)

「金剛護」とは、真言の門からである。

「大勇」とは、不動の義によってである。

「金剛甲冑」とは、印の門からである。

「大堅固」とは、不壊の義によってである。

妙精進によって最勝となることによるならば、「最勝精進」である。仏の精進の本体であるが故である。

「堪任しがたい」とは、大印の門からである。

「金剛精進」とは、名灌頂の門からである。

15) 金剛薬叉 (vajrayakṣa 金剛尽) よ 大方便 (mahopāya 方便) よ 金剛牙 (vajradamṣṭra) よ 大怖畏 (mahābhaya 大怖) よ 摧魔 (mārapramardi) よ 金剛猛利 (vajrogra 金剛峻) よ 金剛暴怒 (vajracaṇḍa 金剛忿) よ 汝に帰命し奉る。

慶喜蔵 (D 105b2~, P 119b7~)

金剛薬叉は「vajrayakṣa」であって、心呪の門からである。

「大方便」というのは、三輪清浄を觀察することの精進によって、一切の悪魔を所縁としない精進が大であるが故である。

「金剛牙」というのは、牙の印の門からである。

「大怖畏」というのは、牙の印そのものによって、一切虚空界に遍満することによってである。

「摧魔」というのは、菩薩金剛薬叉の身においてである。

「金剛猛利」というのは、金剛牙の印によって、一切如来を恐怖せしめることに依るならば、「金剛猛利」である。

「金剛暴怒」というのは、名灌頂の門からであって、

このようであるならば七名である。

積友 (D 86b7~, P 102a1~)

「金剛薬叉」とは、真言の門からである。

方便が大であることによるならば、「大方便」であって、般若とは別の大方便である。

「金剛牙」とは、印の門からである。

「大怖畏」とは、拡散の門からである。

「摧魔」とは、大印の門からである。

諸金剛の(D 87a) 猛利が「金剛猛利」であって、暴悪な業をなすが故である。

「金剛暴怒」とは、名灌頂の門からである。

16) 金剛密合 (vajrasandhi 金剛合) よ 善く集めるもの (susānnidhya 威嚴) よ

金剛縛 (vajrabandha 金剛能縛) よ 解放するものよ (pramocaka 解) よ
金剛拳三昧耶最勝¹ (vajramuṣṭyagrasamaya 金剛拳勝誓) よ
金剛拳 (vajramuṣṭi) よ 汝に帰命し奉る。

【訳注】1 「金剛拳三昧耶最勝」TS (H200 16)) には vajramuṣṭyagrasamaya とあり、不空訳は「金剛拳勝誓」、施護訳は「金剛堅固勝三昧」とある。慶喜蔵は一語にするが、釈友は vajramuṣṭi と agrasamaya の二語にする。そうすると、次の名灌頂からの名前である vajramuṣṭi と二重になる。堀内師は校訂テキストでは一語にしているが、「百八名讚の註釈的研究(三)」では、二語に読んでいる。

慶喜蔵 (D 105b4~, P 120a2~)

金剛密合は「vajrasandhi」であって、心呪の門からである。

「善く集めるもの」というのは、総集の加持の事業をなすことによるならば、「善く集めるもの」である。

「金剛縛」というのは、相の印の門からである。

「解放するもの」というのは、真实性の瑜伽によって、一切の障碍より解放をなすことによるならば、「解放するもの」である。

「金剛拳三昧耶最勝」¹ というのは、大菩提薩埵金剛拳の身の門からである。

「金剛拳」というのは、名灌頂の門からであって、

ここにおいて六名である。かくの如くならば百八名となる。

【訳注】1 「金剛拳三昧耶最勝」チベット訳は、rdo rje khu thsul dam tshig mchog とあり、一語にも、二語にも読めるが、慶喜蔵は一語として、都合六名であるという。

釈友 (D 87a1~, P 102a3~)

「金剛密合」とは、真言の門からである。

「善く集めるもの」とは、一切の印を加持するものであるが故に。

「金剛縛」とは、印の門からである。

「解放するもの」とは、疫病などを対治することであるが故に。

「金剛拳」とは、大印の門からである。

「三昧耶最勝」とは、三昧耶等の最勝となることがあるが故に。

「金剛拳」とは、名灌頂の門からである。

H201 17) 誰かあるものがこの寂靜なる百八の名前(讚)を保持するならば、彼は一切の最勝者たちによって、諸の金剛名灌頂をもって灌頂される。

慶喜蔵 (D 105b6~, P 120a5~)

「保持」というのは、言葉と義の門からか、あるいは持誦と修習の門からである。

「寂靜」というのは、一切の苦を滅尽する因となることによるならば、「寂靜」である。

釈友 (D 87a3~, P 102a5~)

これより他[の頌]は称赞の功德であって、涅槃を獲得することによるならば、「寂靜」である。金剛名の灌頂等がこのように説かれたことなどによって、金剛薩埵と同様に、「一切の最勝者たちによって」というのは、如来たちであって、一切の最勝者である彼らが、そこにおいて灌頂すると説くのである。

18) また、誰か大持金剛の諸の名前のこの功德を、常に、歌い讃じるならば、彼もまた、持金剛に相似なるものとなるであろう。

慶喜蔵 (D 105b7~, P 120a6~)

大持金剛に対して、名灌頂等が百八名あるように、(D 106a) そのようにこの成就者もまた、如来たちによって灌頂されるであろう。「誰か」というのは、「誰であれ」である。「功德」というのは、功德の因となることによるならば、「功德」である。「諸の名前によって」というのは、百八名である。誰に対してかとならば、大持金剛に対してである。「常に」というのは、連続して断じないことである。「歌い讃じるならば」というのは、息もつかずに、大持金剛に対して、彼の真実功德を称えんと欲するが故である。「彼もまた、持金剛に相似なるものとなるであろう」というのは、持金剛と相似となることである。

【**积友**】(D 87a4~, P 102a7~)

功德の因となることによるならば、「**功德**」であって、真言等の自性の一切の功德の因より趣入するものであることの故に、「**諸々の功德名によって**」¹である。「**大持金剛**」というのは、世尊普賢である。「**常に**」というのは、毎日である。「**音声(歌)によって讃じること**」というのは、歌を用いて讃じることである。

【**訳注**】1 「諸々の功德名によって」チベット訳は yon tan ming rnam kyis とあり、經典の訳語も同じ。しかし、サンスクリットでは、gaṇam idaṃ nāmnām (諸の名前のこの功德を) となっている。「**功德の名前**」か、「**名前の功德**」か、同義ともとれる。

19) 我々がこの百八の名前(讃)をもって称賛したもの(大持金剛)は大乘現証の大理趣を広めたまえ。

【**慶喜蔵**】(D 106a3~, P 120b1~)

「**大乘現証**」というのは、金剛界の曼荼羅である。「**大理趣もまた広めたまえ**」というのは、果を伴った菩薩の道を獲得する因となるこの曼荼羅は大理趣であって、福分の有情が如実に十方に広がって圍繞したまえということである。

【**积友**】(D 87a5~, P 102a8~)

大乘現証を先とすることの故に、また、曼荼羅を化作することは大乘現証の因であることの故に、また、大乘現証の義を示すことであるが故に、また、百八名の最初の真言は大乘現証の相であることによるならば、「**大乘現証の**」と説くのである。「**大理趣**」とは、真言行の理趣である。「**広めたまえ**」というのは、拡散をなしたまえという義である。

20) 主よ、我々は汝に求請す。最勝の儀則を、一切諸仏の大輪たる最上の大曼荼羅を説きたまえ。

【**慶喜蔵**】(D 106a4~, P 120b3~)

「**一切諸仏の大輪**」というのは、毘盧遮那を始めとする諸仏の集会をここになすことに依るならば、そのようにいわれる。「**最勝の儀則を説きたまえ**」というの

は、[大乘] 經典の行の儀則より観待するならば、真言の理趣の儀則は最勝であることによって、「**最勝の儀則**」というのである。何故ならば、[大乘] 經典における諸行は、三阿僧祇劫にわたって正等覚するものであり、秘密真言の門の行を行わず菩薩たちは、まさにこの世に於いて、歡喜地を得て現等覚するであろうと説くのである。

【**积友**】(D 87a7~, P 102b3~)

「**主よ**」というのは、一切有情の利益に趣入するために、一切如来の父となるが故に、「**主**」と言うのである。供養を先とする教えが「**求請**」と説くことによって、正しい(D 87b) 功德の称賛によって供養することをなして、求請することが、「**主よ、汝に**」云々というのがそれである。「**一切諸仏の大輪**」というのは、輪は法輪でもあることによって、そこに於いて特になさるべきために、「**大曼荼羅**」というのであって、「**大**」という語によって、一印曼荼羅等を観待することである。「**最上**」という言葉は、他のタントラに述べられる大曼荼羅に観待することである。「**最勝の儀則**」とは、一切より最勝の故であり、声聞乗は一つの儀則であり、この儀則(真言の儀則)は、有情成熟をなすが故に、それ(声聞乗)より殊れて聖なるものである。独覚乗よりは大乘の儀則は勝れていて、経部(mdo sde pa: 大乘經典)の行、それらよりも真言行の理趣は非常に勝れているのである。それからまた、作タントラ(kriyāntāra)より、瑜伽タントラ(yogātāntāra)は甚だ勝れていることによって、「**最勝儀則**」と説くのである。「**最勝儀則**」それはまた、何であるかとならば、「**一切諸仏の大輪**」と説くことがあるからである。

[二] 図絵曼荼羅・金剛界曼荼羅

H202 そのとき、尊き[大]持金剛(毘盧遮那如来)は一切の如来の求請の言葉を聞いて、一切如来の誓願(三昧耶)より生じる金剛加持と名付ける三摩地に入って、この金剛界と名づける大曼荼羅を説いた。

【**慶喜蔵**】(D 106a6~, P 120b6~)

「一切如来の三昧耶」というのは、金剛界の大曼荼羅が「一切如来の三昧耶」である。それを「生じる」とは、金剛より生じるのであって、それを加持するために、ある三摩地にそのような名をつけて、その三摩地に入るのである。そして、金剛界大曼荼羅を説くこと(D 106b)に、専心するのであるという意味である。

H203 1) そこで、これより私は最上の大曼荼羅を説き明かそう。

〔須弥山上の〕金剛界に似ている〔ところから、それは〕金剛界と言われる。

〔慶喜蔵〕(D 106b1~, P 120b8~)

「そこで」というのは、すぐさまということである。「何故」(経文になし)というのは、原因であって、必ずあるものが生じるのは何故か名前など[があるはずである]。ある者が、金剛界大曼荼羅が如来によって須弥山頂に化作されたのを見る福德を持たない者であり、それ故、彼らが見ることにより、退転しない種子を生起するために、「説き明かす」というのである。正しく分析して、善く説いて示すならば、「説き明かす」というのである。「大曼荼羅」というのは、金剛界大曼荼羅は身秘密が主となるのであるけれども、心等が主となる色像の曼荼羅等ではないのである。そのものが最勝であるならば、「最上」である。なぜならば、当にこの時に、〔十〕地を獲得することを成就するからである。「金剛界に似ているところから」というのは、須弥山上の金剛界曼荼羅と似ているからである。如何なる名前かというならば、「金剛界と言われる」というのである。世尊毘盧遮那の一切如来の身語心金剛界を暗示していることに由るならば、「金剛界と言われる」というのである。

H203 2) 軌則に随って、曼荼羅の中央に入り、

大薩埵(金剛薩埵)の大印(身)を觀修しつつ、また、加持して、

〔慶喜蔵〕(D 106b5~, P 121a6~)

「大薩埵の大印を」云々について、「立ち上がって、誇らしげに歩む」(次項の第3偈)というまで結びつく。「軌則に随って入り」というのについて、「軌則にした

がって」とは以下である。すなわち、三昧耶〔戒〕と灌頂を得て、一ヶ月あるいは、六ヶ月あるいは、一年の間、軌則の誓戒を行ずるべきである。そこにおいて亦た、第一に個々の律儀に住して、内の自性の澡浴と外の澡浴も出来るだけなすべし。そこにおいて、三律儀によく住して護ることが第一の澡浴である。懺悔と勧請が第二の〔澡浴〕である。解印が第三の〔澡浴〕である。(D 107a) 水の澡浴が第四であり、これらと三衣の衣替えもなすべきである。そのうち、諸々の律儀に住することが第一の衣である。慚と愧とが第二の衣である。清浄なる外衣が第三の〔衣〕であるといわれる。

次に、頂礼等を前行として、毎日律儀の受持も六度なすべきである。

次に、罪過を離れることと、一切の印を解くことを如実になして、大瑜伽をなすべし。

次に、胸に曼荼羅を如実に觀修すべし。若しくは、大瑜伽を具足することによって、第一瑜伽〔三摩地〕と最勝曼荼羅王〔三摩地〕を觀修して、集会し、帰命とウダーナと自の胸に一切如来を入れて、信解もまた作り、一切如来の御胸より諸々の菩薩を出して、それぞれの三摩地に住して、ウダーナを誦すと想うべきである。

次に、吉祥金剛薩埵と一体となる瑜伽によって、一切如来より鬘の灌頂等、一切の灌頂を受けて、彼ら一切如来を金剛鉤等によって、鉤召と引入と縛と自在をなして、諸々の三昧耶印によって成就すべきである。

次に、法と羯磨と大印によって刻印して灌頂し、諸々の事業において安立すべきである。そこにおいて、最初に先ず、

【五仏】

- ①毘盧遮那〔如来〕の大印を結んで、一切の仏を一つに集めることをなせと、自の業において安立すべきである。《四波羅蜜》同様に、〔金剛〕薩女と宝と法と羯磨の金剛女は一切の部を集めた後、刻印をなせ。ということと、
- ②阿閼〔如来〕においては、一切如来の菩提心を発すことをなせ。
- ③宝生〔如来〕においては、(D 107b) 布施波羅蜜多を、
- ④無量光〔如来〕においては、般若波羅蜜多を、

⑤不空成就[如来]においては、一切如来の精進波羅蜜多を円満することをなせ。
ということと、

【十六大菩薩】

- ①金剛薩埵においては、一切如来の菩提心に安立することをなせ。
- ②金剛王においては、一切の如来を鉤召すること [をなせ]。
- ③愛によって、愛染をなせ。
- ④喜によって、善きかなんといって歡喜をなせ。
- ⑤宝によって、灌頂をなせ。
- ⑥光によって、日の光によって照らすことをなせ。
- ⑦幢によって、布施波羅蜜多を安立せよ。
- ⑧笑によって、希有なる笑いを安立せよ。
- ⑨法によって、非常に清浄なる三摩地を安立せよ。
- ⑩利によって、有情の煩惱と随煩惱を断ぜよ。
- ⑪輪(因)によって、彼らを曼荼羅に引入せよ。
- ⑫語によって無戲論の法性を安立せよ。
- ⑬金剛業によって、無尽無余の供養によって供養せよ。
- ⑭護によって、他の乗り物を欲する心より保護せよ。
- ⑮葉叉守護(牙)は、守護によって彼らを守護せよ。
- ⑯拳によって、一切如来の拳を成就せよ。

ということと、

【八供養】

嬉女等において、布施(嬉)・持戒(鬘)・忍辱(歌)・精進(舞)・禪定(香)・智慧(花)・誓願(灯)・方便(塗)の[各]波羅蜜多、それらを実行せよ。

【四撰】

- ①金剛鉤という菩提心の鉤によって、一切の如来を大解脱の城に鉤召せよ。
- ②索という菩提心の索によって引入せよ。
- ③鎖によって、他の乗り物を欲する心を一切如来は破壊することと、(D 108a)
般若波羅蜜多の静慮によって一切如来を縛せ。

④遍入(鈴)によって、自性光明であつて、無生なるものを遍入することによつて、如来たちを遍入せよ。

ということと、

【賢劫千仏】弥勒等において、正法の城を守護せよ。といわれる。

あまねく一切の各自の大印を結んで、自分の事業において決定があると知るべきである。是の如く、最勝羯磨王を觀修して、更に、金剛薩埵の瑜伽によって集會して、百八名讚によって稱讚して、如実に鉤召と引入と縛と自在とをなして、金剛葉叉[の印言]によって障礙を除去することと、[十]方を縛(結界)することなどをなして、金剛拳によって門を閉じる。金剛甲冑によって一切の守護を正しく守護し、供物を捧げて、一切如来を四印によって刻印して、灌頂し、供物を先になすことと、後の一切の資具によって正しく供養することと、嬉女等と、羯磨曼荼羅に説かれる十六供養と、意の供養と、殊勝なる一切の供養によつてもよく供養して、四印をなして、

vajrātmako 'haṃ svabhāvaśuddho 'haṃ sarvasamo 'ham /

(我は金剛を自体とし、我は自性清浄であり、我はすべてに等しい)と觀修し、**vajrasattva**(金剛薩埵よ)と誦して、一切もまた我のみであると觀修すべきである。

次に、百八名讚によって讚じて、同様に、よく供養して、如実に頂礼し、印を解いて灌頂し、甲冑を着て、合掌によつても悦ばせて、**vajrasattva**という[心呪]と百字[真言]もまた誦して、祈願の成就のために善根を廻向して供養を施すのである。再びやつて来るために、恭敬して去りゆくことを(D 108b)請うべきである。

次に、金剛護と金剛葉叉と金剛拳[の印言]によつて、自身を守護して、仏塔の事業などの所作をなすべし。このように毎日、四時の行によつて明の禁戒を円満すべきである。このように円満して、曼荼羅を描くべきである。精舎、あるいは歡喜園、あるいは村、あるいは町の北東の方角の場所で、心に叶い、非常に平らで、湿潤、東に傾斜すること充分で、無塩の土地の、その場所で、王は百肘か、あるいは五十[肘]、臣下と大臣は五十肘か、あるいは二十五[肘]、長者、あるいは商主は二十五肘か、あるいはその半分である。成就者は十二肘か、あるいは六[肘]

になすべきである。そのうち、まず、且く望むところの曼荼羅の土地の中央に、人骨の粉末と毒を有するものと、常行の護摩の儀則によって、曼荼羅の障礙を除き、自身と弟子と地主等を鎮めるところの息災護摩をなすべきである。後略¹。

【訳注】1 「後略」以下 **慶喜蔵**には「浄地と護念の儀則」(SVU132, 133)「薰習の護摩儀軌」(SVU134)「勸請」(SVU135, 136)「虚空曼荼羅」(SVU137)「摩・吒の二眼」(SVU138) 等が説かれるが、TS には直接説かれていないので省いた。

H203 3) 印に住し、まさに立ち上がって、あまねく(四方八方を)見渡し
ながら、
誇らしげに(金剛薩埵のつもりになって)歩み、金剛薩埵[の心真言
(Vajrasattva 金剛薩埵よ)]を唱えつつ、

慶喜蔵 (D 109b6~, P 124b5~)

「印に住し、まさに立ち上がって」というのは、大印を解かずに、薩埵跏坐より立ち上がって、印を[結んだままで]住するならば、「印に住し」といわれる。大印を結んだままで住するのである。「あまねく(四方八方を)見渡しながら」というのは、北東の方角から始めて、左の方から見て、障礙を排除し、また、(D 110a) 同様に右の方から見て、[四]方と[四]辺と曼荼羅と虚空と地結と牆と網とをなして、足裏で捉えて、地表を堅固にすることより始めて、須弥山頂まで金剛の自性となして、金剛薩埵の大印を結び、その我慢を有する(金剛薩埵のつもりとなる)ことによって、Vajrasattva hūṃ / と唱えて、右方から繞らして、再び、曼荼羅の儀則に説かれた理趣によって、障礙の破壊等をなして、安住の儀則等に随って行すべきである。次に、晨朝の時に、その曼荼羅を三昧耶印そのものによって虚空に安立して、墨打ちすべきである。

H203 4) 新しい、よく縊り合わされた、適量の、美しい
坪線をもって、賢者は能力に応じて、妙なる曼荼羅を墨打ちすべし。

慶喜蔵 (D 110a3~, P 125a2~)

「新しい」というのは、他の曼荼羅に使われていないものである。「よく縊り合わされた」というのは、香によって塗られた金などの器に置くことである。「量を有する (tshe dang ldan pa) 【経文】 tshe dang mthun par (適量に)」というのは、六肘の曼荼羅においては厚さは小指の量ほどに、曼荼羅の二倍ほどである。「美しい坪線によって」というのは、五色によって美しい坪線によって、墨打ちすべきである。「賢者」というのは、曼荼羅の色と形と所作に通じている者である。「能力に応じて」というのは、由旬の量から始めて、六肘の量、乃至、出来うる限りの量より量って、曼荼羅の墨打ちをなすべきである。

H204 5) [その曼荼羅は] 四角で、四門あり、四つの塔門によって飾られ、四本の坪線で結ばれ、幡や華鬘によって荘嚴されている。

慶喜蔵 (D 110a5~, P 125a5~)

「四角で四門あり」というのは、東と西と北と南の縁取りによって四角になすが故に四角である。「四門」というのは、東と南と西と北の縁の真ん中にそれぞれ門を設けているので「四門」である。「四つの塔門によって飾られ」というのは、了解済みである。「四の坪線で結ばれ」というのは、清浄なる二の坪線と、辺際の二の坪線であって、それらが交わっているのが、同時になされるべき為というまでである。(?)「幡や華鬘によって荘嚴されている」というのは、幡の鬘と (D 110b) 華鬘によって飾ることである。

H204 6) すべての隅処(四隅)と門と櫓の合するところは
金剛宝によって飾られている。[そのような] 外の曼荼羅を墨打ちすべし。

慶喜蔵 (D 110b1~, P 125a8~)

「すべての隅処(四隅)と、塔門の合するところは、金剛宝によって飾られている。[そのような] 外の曼荼羅を墨打ちすべし」というのは、四角い曼荼羅の四方の部分に、半月が[あり]、その上に金剛宝があると、墨打ちすべきである。諸の門の塔門が「塔門」である。それらの「合するところ」とは、二辺が合する仕方で、そ

れらに於ても半月の上に金剛宝があると墨打ちすべきである。

H204 7) その〔外の曼荼羅の〕内側にある〔車〕輪のような宮殿に入って、
〔その宮殿は〕金剛線（三鈷金剛杵）によって繞らされ、八本の柱で
荘嚴されている。

慶喜蔵 (D 110b2~, P 125b2~)

「その当所（曼荼羅）の中に入って、車輪のような」というのは、その外の曼荼羅の当所の中に入って〔ということ〕で、車輪のような曼荼羅の場所に四隅と四門等、説かれた如き外の曼荼羅と等しき塔門のないものを墨打ちすべきである。「金剛線によって繞らされ」というのは、三鈷金剛杵を鬘に繞らすことである。「八柱によって荘嚴せよ」というのは、〔四方の〕各々の壁に懸かった金剛柱が二本づつある。それ故、八柱の荘嚴がなされたのである。

H204 8) 〔その〕金剛の柱の前部は五つの月輪で裝飾されている。

〔その五月輪の〕中央の〔月〕輪の真ん中に仏陀（毘盧遮那如来）の
形像を安立すべし

慶喜蔵 (D 110b4~, P 125b4~)

「金剛柱の内方に於ても、五月輪によって荘嚴す」というのは、諸々の金剛柱の最勝であって最高の場所であることによるならば、金剛柱の最勝の場所に於てである。金剛柱の最勝の場所、それらに於て、世尊毘盧遮那と阿閼と宝生と無量光と不空成就の諸処において、日輪を五つの円に墨打ちし、さらに、各々に月輪が五つづつある〔ように〕金剛彩画によって繞らして墨打ちし、「四角で四門、八柱の荘嚴をなし、金剛杵を鬘に繞らして、曼荼羅の中央に画くべし」云々について、世尊が『金剛頂タントラ』¹に金剛界大曼荼羅の分位をしているので、疑うべきではない。

ここにまた、その曼荼羅に似ていると示したのは、〔車〕輪 (D 111a) の如く円形であって、「ここに円のみであると示すことが出来ないので、曼荼羅の輪であると示すのである」(?) 云々について、一般的に、曼荼羅は輪であると説くことに

よっては確実でなく、「金剛線にて繞らして」と説くことによって、亦た、これは異なるものであると知るべきである。それはまた、

「四隅になせ、四門と四塔門によって荘嚴し、(cf.H204 5) ab)

金剛線にて繞らして、大金剛宮殿を画け」²

と説かれている。

また、押線の儀則を明らかにすると、そこで先ず、安価な真綿を買って、乙女が紡いだ糸を香りの好い染料である、青・黄・赤・緑・白によって染めるときは、次の次第によって安立する。すなわち、

hūm trāṃ hrīḥ aḥ ā という各自の種子によって、阿閼等を糸に布置して、
diptadṛṣṭi añkuṣa jaḥ (輝く眼をもつものよ、鉤召せよ ジャハ) / (H 370)

という〔真言を〕を二眼に布置して、「よく動いて燃える眼、眼の睫が鉤となり」(H 367 2)) という燃える見と、「世尊よ、大曼荼羅の墨打ちをなすために、金剛線を私に与えたまえ」と言って、阿閼等を勧請すべきである。後略³。

〔訳注〕1 『『金剛頂タントラ』[VS] D 171b7~179b8、北村太道 pp.87~110。

2 [VS] D 171b5 「gru bzhi pa la sgo bzhi pa / rta babs bzhis ni mdzes byas pa'i / thig bzhi dang ni yang dag ldan / dar dang phreng pas rnam par brgyan /」が相当するか。

3 「後略」以下慶喜蔵には「墨打ちの儀則」や「諸尊の布置」が説かれるが、TSには直接説かれていないので省いた。これらは SVU153~168 に反映されている。

H205 9) 仏陀（毘盧遮那如来）の一切の脇（四方）における曼荼羅（月輪）
の真ん中に

四人の誓願（三昧耶）の最勝なる女達（四波羅蜜）を順に描くべし。

慶喜蔵 (D 112a6~, P 127b2~)

「〔五月輪の〕中央の曼荼羅の真ん中に、〔毘盧遮那〕仏の像を安置して」(H204 8) cd) というのは、〔仏像とは〕世尊毘盧遮那であって、彼の東方の部位に金剛薩女、南方に宝薩女、西方に法薩女、北方に羯磨薩女を画くべし。

H205 10 また、金剛の歩みによって四種の曼荼羅(月輪)に歩み寄り、阿闍などの四の一切諸仏を安立すべし。

慶喜蔵 (D 112a7~, P 127b3~)

「金剛力《経典は歩み》にて行き」(H205 10) b) というのは、そこにおける金剛力(歩)とは以下である。すなわち、「意によって絵像を持ち上げて、金剛線或いは(D 112b) 他のもので、外に出たり内に入ったりしても越三昧耶にはならない」(H866)

次に、その心呪は以下である。

oṃ vajravigākrāma hūṃ (オーン 金剛歩よ 近づけ フーン) / (H864, SVU 169 (206))

H205 11 持金剛(金剛薩埵)などによって、阿闍の曼荼羅を平等に為すべし。金剛蔵(金剛宝)などによって、宝生の曼荼羅を円満に[為すべし]。

慶喜蔵 (D 112b1~, P 127b5~)

「阿闍の曼荼羅に於て 持金剛等を平等にす」というのは、世尊阿闍と金剛薩埵と金剛王と金剛愛と金剛喜と共なるを画くべし。そのようであるならば、「それと平等となる」であって、心の本性の自性からして等しくなくはないので、平等である。「宝生の曼荼羅に於て、金剛蔵等を円満にす」というのは、世尊宝生と金剛宝と金剛光と金剛幢と金剛笑と共なるを画くべし。そうすれば、その曼荼羅は金剛蔵等によって満たされるであろう。

H205 12 金剛眼(金剛法)などによって、無量寿の曼荼羅を清浄に[為すべし]。

不空成就の金剛毘首(金剛業)などの曼荼羅が描かれるべし。

慶喜蔵 (D 112b3~, P 127b8~)

「無量寿の曼荼羅に於て、金剛眼等を清浄に安置す」というのは、世尊無量光と金剛法と金剛利と金剛因と金剛語と共なるを画くべし。そうすれば、この曼荼

羅は清浄となる。すなわち、自性からして清浄なる法性の本性であるならば、それは清浄である。「不空の曼荼羅に於て、十字金剛等を安置す」というのは、十字金剛とは金剛業であって、そこにそれらがある、それが十字金剛等の曼荼羅であって、世尊不空成就と毘首金剛(金剛業)と金剛護と金剛牙と金剛拳と共なるを画くべし。

H206 13 [内] 輪の [四] 隅に、金剛天女達(内四供養女)を描くべし。外の曼荼羅の [四] 隅に、仏陀(毘盧遮那)の供養女達(外四供養女)を描くべし。

慶喜蔵 (D 112b6~, P 128a3~)

「曼荼羅の諸隅に金剛天女等を安置す」というのは、内の曼荼羅の縁の火方(東南隅)から始めて、嬉女と鬘女と歌女と舞女を画くべし。「外の曼荼羅の諸隅に仏陀を供養するものたちも安置すべし」というのは、外の曼荼羅の天(諸尊)の框の火方から始めて、繞らせて、香女と花女と灯女と塗香女を画くべし。

H206 14 一切の門(四門)の真ん中に四人の門番(四摂)を、外の曼荼羅の[框の]所に大薩埵達(賢劫十六尊・賢劫千仏)を安立すべし。

慶喜蔵 (D 112b7~, P 128a6~)

「すべての門の中に、四人の門衛も安置すべし」というのは、「すべての」という言葉によって、外と内すべての東方の門には金剛鉤、南に索、西に鎖、北に金剛遍入を画くべきである。「外輪の框(rim phyog 列所)に於ては、大薩埵たちを安置す」というのは、廊下(框)の内に、弥勒等、賢劫の菩薩たちを画くべし。そのうち、

【五仏】¹

①世尊毘盧遮那は身色白である。覚勝印(智拳印)にて五鉈金剛杵を持つ。獅子座に於て、蓮華と月輪の上に金剛結跏座にて坐し、日の輝きを有している。絹羅の上衣と下衣を着け、宝冠と繪綵の灌頂を受け、四面で、第一の面は東を見る。

『金剛頂経』和訳(五)(高橋)

②～⑤同様に、阿閼等もまた、順次例の如く、身色は、青と黄と赤と緑、象と馬と孔雀と迦楼羅の座に、蓮華と月〔輪〕の上に金剛結跏座にて坐る。触地と与願と最勝三摩地と無畏の印と、金剛杵と金剛宝と金剛蓮華と羯磨金剛杵を持つ。日光の輪を有し、宝冠と繒綵にて灌頂を受けている。一面で毘盧遮那に面している。(一覧すれば以下)

五 仏	身 色	乗り物	印 契	持ち物
毘盧遮那如来(四面)	白	獅子	覚勝印	五鈷金剛杵
阿閼如来(一面)	青	象	触地印	金剛杵
宝生如来(一面)	黄	馬	与願印	金剛宝
阿弥陀如来(一面)	赤	孔雀	最勝三摩地印	金剛蓮華
不空成就如来(一面)	緑	迦楼羅	[施]無畏印	羯磨金剛杵

これら五如来は **vajradhātu** という五如来の共通の心呪を誦しながら、画くかあるいは〔像を〕安置して、空中に位置しているものを降ろして一つにすべし。

【訳注】1 「五仏」参考までに **SVU170** を挙げておく

tatra bhagavān vairocanaḥ sitavarṇaḥ simhāsane vajraparyāṅkaniṣaṅno bodhyagrimudrayā pañcasūcikavajradhārī sūryaprabhaḥ paṭṭasāṭikā- nivasanottariyaś caturmukho ratnamakuṭa-paṭṭābhiṣekī pradhānamukhena pūrvānanaḥ / evam akṣobhyādayo 'pi gajāsaneṣu vajraparyāṅkaniṣaṅnāḥ sūryaprabhāmaṇḍalā vairocanaḥbhimukhā ratnamakuṭapaṭṭābhiṣekīṇaḥ nilapītarakṭasāyāmaṇḍalā yathākrameṇa / ekamukhāḥ pañcasūcikavajravajraratnapadmacakraviśvavajradharāḥ svamahāmudrābhiḥ /

②07 **vajradhātu** //

iti pañcatathāgataḥṛdayam udirayatā sthāpyā lekhyā vāntarikṣāvasthitāś ca tathāvatāryaikikāryāḥ /

その〔曼荼羅〕において、世尊毘盧遮那は〔身色〕白色で、金剛結跏座で獅子座に坐し、覚勝印(智拳印)で五鈷金剛杵を持ち、日〔輪の〕光〔背〕があり、綾絹の〔内〕衣と上衣を着し、四面を有し、宝冠と繒綵を受職(頭頂に戴き)し、最も重要な面は東を向いている。同様に、阿

閼等の〔四仏〕も、象座等に金剛結跏座で坐し、日輪の光〔背〕があり、毘盧遮那に面前し、宝冠と繒綵を受職し、順に青、黄、赤、黒の〔身〕色である。〔これらの四仏は〕一面であり、〔順に〕五鈷金剛杵・金剛宝・蓮華輪・羯磨金剛杵を持ち、自らの〔眷属たる〕大印たちを伴っている。〔修行者は、〕

②07 **金剛界よ**

と、五如来の心真言を唱えつつ、虚空に布置し、あるいは描いて、虚空に留め、そのまま下ろして〔地上の曼荼羅と〕一体化させなさい。

【四波羅蜜】¹

同様に、**sattvavajri**(H139)というのより、**vajrāveśa**(H187)というまで誦して、金剛薩女から金剛遍入(金剛鈴)まで、画くか安置して、空中に位置しているものを降ろして、影像と俱になすべし。

- ①金剛薩女は蓮華と月輪の座の上に、赤い五鈷杵。金剛宝女等(D 113b)の座も同様であると知るべし。そこに於て、
- ②金剛宝女は如意宝珠が突端に付いた五鈷杵にて幟幟する。
- ③金剛法女は十六葉の蓮華で〔幟幟され〕、色は白赤、八葉が下に垂れ、八葉が上に別れている。蕾の中に五鈷杵が入っている。
- ④金剛業〔女〕は十二鈷の羯磨杵を〔持つ〕。五色であつて、その真ん中は白、前は青、右方は黄、後ろは赤、左は緑色をしている。

【訳注】1 「四波羅蜜」参考までに **SVU171** を挙げておく

evam

②08 **sattvavajri** //

iti sattvavajriṃ yāvad

②09 **vajrāveśa aḥ** //

iti vajrāveśam / bhagavato vairocanaśyāgrataḥ pañcasūcikam raktavajramsattvavajri / dakṣiṇapārśve pañcasūcikavajrasikham cintāmaṇiratnam

②10 **ratnavajri** //

prṣṭhataḥ ṣoḍaśapattraṃ padmaṃ sitaratktam / aṣṭau pattraṇy adho vikasitāni /

upari cā (40a) ntargatapañcasūcikavajrapatṭrāṇi mukulitāny aṣṭā caiva

②① dharmavajrī //

vāmato dvādaśasūcikapañcavarṇakaviśvavajram /

②② karmavajrī //

madhye śītavarṇaṃ purato nilam / dakṣiṇe pītam / prṣṭato raktam / vāmato
maragatavarṇaṃ iti //

次のように、

②⑧ 薩埵金剛女よ

と言って、薩埵金剛女を、

②⑨ 金剛よ 遍入せよ アハ

と言って、金剛〔杵の〕遍入を〔なしなさい〕。世尊毘盧遮那の前方にある赤い五鈷金剛杵が、薩埵金剛女である。

右脇にある先端に如意宝珠の付いた五鈷金剛杵が〔宝金剛女〕である。

②⑩ 宝金剛女よ

背後にある白赤の十六葉の蓮華が〔法金剛女〕である。八葉が下に開き、また、上に〔八葉が開いている〕。〔葉〕間に五鈷金剛杵が蓮華のつぼみのように八つある。

②⑪ 法金剛女よ

左にある十二鈷の五色の毘首（十字形）金剛〔杵〕（羯磨杵）〔が業金剛女である〕。

②⑫ 業金剛女よ

〔その金剛杵は〕真ん中が白色で前（東方）が青、右（南）が黄、後（西）が赤、左（北）が緑色（marakata）である。

金剛薩埵等より賢劫の菩薩に至るまでも、蓮華と月〔輪〕の上に薩埵結跏座にて坐している。「金剛心等（rdo rje sems sogs ; rdo rje sems pa? 金剛薩埵か）第一の至尊は金剛半跏座に住す」（出典未詳）と説かれている故に。

【十六大菩薩】¹そこに於て、

①金剛薩埵は、身色白。左を金剛拳にして鈴を持ち、慢の仕草（tshul 理趣）で脇に付ける。右手カトヴァーンガの印になし、中指にて第一の五鈷金剛杵を自分

の胸に引き上げる仕草で（誇らしげに）持すべし。

②金剛王は、黄色で、金剛鉤にて一切如来を召集せんとしている。

③金剛愛は、身色赤。箭と弓で一切如来を射る仕草をなす。

④金剛善哉は、エメラルドの色をし、二手金剛拳になし、善哉（喝采）をなす仕草にて、一切如来に親近して住する。

⑤金剛宝は、身色黄。左の金剛拳にて宝石の鈴を掴み、慢の仕草で住する。右の金剛拳にて如意宝珠の宝石が先端に付いた五鈷杵で髻して額の上で掴む。

⑥金剛光は、日の色を有し、右手で金剛日輪を掴み、如来たちの輝きをなす。左手は座に凭れて坐る。

⑦金剛幢は、虚空の（D 114a）色を有し、右手に如意宝珠の〔付いた〕幢、左手は座に凭れて坐る。

⑧金剛笑は、貝やレンコンのように白い。右手で二列の歯鬘の先に金剛杵があるのを掴み、如来たちを笑いに結びつける。左手は座に凭れて坐る。

⑨金剛法〔女〕は、身色白赤、左手を脇に当て金剛蓮華を持ち、右手でその花卉を自分の胸の処で開く。

⑩金剛利は、虚空のように青く清らかである。左手で胸の処に般若波羅蜜多経を持つ。右〔手〕で剣を執り、一切如来を打つ仕草でいる。

⑪金剛因は、金色で、右手の中指の先端で八輻輪を廻している。左手は座に凭れて坐る。

⑫金剛語は、銅色で、右手で金剛舌を執り、諸如来と話しをして、左手は座に凭れる仕草で坐る。

⑬金剛業は、顔は白、腰の間と二臂は藍青、残りの色は青、顔の下方から腰の間は薄赤、二つの腿は薄黄色、残りの二つのこむら（ふくらはぎ）から足に至るまでは白である。左手の金剛拳で羯磨金剛鈴を持ち、慢の仕草で位置する。右手の中指は羯磨金剛杵を持ち、胸の処で誇らしげに持つ。

⑭金剛護は、黄色で、両手で金剛甲冑を掴み、一切如来に甲冑を着せる仕草で坐る。

⑮金剛牙は、身色は黒。大きな腹をし、顔の牙を剥き出す。二金剛拳で顔の二辺に二牙を持って坐る。

⑩金剛拳は、身色黄色で、二つの三昧耶拳の中に金剛杵を持つ。三昧耶拳(D 114b)で圧して坐る。

【訳注】1 「十六大菩薩」参考までに SVU172 を挙げておく

vajrasattvādy ā sattvaparyāṅkaṇiṣaṇṇā bhadrakalpikaparyantā mahāmudrayā svacihnā vajrādīdhāriṇaḥ prahaṣṭophullalocanās ca / sarve caite vairocaṇābhimukhā dharmadhātvalāmvanajñānasvabhāvadvā vairocanaś ca tathatāsvabhāva iti // tatra vajrasattvo 'kṣobhyasya purato dakṣiṇapārśve vajrarājo vāme vajrarāgaḥ pṛṣṭhataḥ sādhuḥ / evaṃ ratnasambhavādīnā vajratnādayaḥ śeṣā jñāyanta eva //

金剛薩埵を始めとして、賢劫に至るまで〔の菩薩〕は、大印をもって各々の標となし、金剛〔杵〕等を持ち、歡喜の眼を開き、薩埵跏趺座(半跏座)で坐している。また、毘盧遮那は無如を自性としており、これら一切の〔菩薩〕は、法界を所縁とする智を自性として居るが故に、毘盧遮那に面している。阿閼の前は金剛薩埵、(37a) 右は金剛王、左は金剛愛、後は金剛喜である。このように、宝生等については金剛宝等であり、残りは準知しなさい。

【内の四供養女】

- ①嬉女は、身色白。二の金剛拳にて二の金剛杵を握み、二の金剛慢の仕草にて喜んで、左に纒かに傾く。
- ②鬘女は、身色黄色。宝石の鬘で如来たちを灌頂する。
- ③歌女は、身色薄赤。琵琶を弾じている。
- ④舞女は、身色金剛業の如し。三鈷金剛杵を持って、二手で舞をなして坐る。

【外の四供養女】

- ①香女は、身色白。金剛香炉で如来たちを満足させている。
- ②花女は、黄色。左手で金剛花の器を持ち、右手で花の雨を降らしている。
- ③灯女は、身色薄赤。火芯を持って、光明のあつまりによって供養する。
- ④塗香女は、舞女のように種々の色を持つ。左手に塗香の法螺貝を持ち、右手で香雲よって如来たちを供養して坐る。

【四撰】

- ①金剛鉤は、身色白で、金剛鉤で如来たちを召集する。

②金剛索は、身色黄色で、金剛索によって如来たちを引入する。

③金剛鎖は、身色薄赤で、金剛鎖にて如来たちを縛る。

④金剛遍入(鈴)は、雑色を有し、右手で金剛鈴を持ち、如来たちを遍入し、左手は座に凭れて坐る。

そこに於て、如来たちは、寂靜の相を具え、一切の裝飾によって飾られ、寂靜の見相と微笑を有している。

金剛薩埵等〔十六大菩薩〕は、歡喜によって眼を開き、慢の相と微笑を有している。五仏の宝冠と繒綵によって灌頂を具し、一切の裝飾によって飾られている。

【賢劫十六尊】¹

弥勒等は、東の部位に金剛薩埵と相似で、金剛杵を持っている。(D 115a)

南は、金剛宝と相似で、摩尼宝珠を持つ。

西は、金剛法と相似で、金剛蓮華を持つ。

北は、金剛業と相似で、羯磨金剛杵を持つ。

特には以下である。すなわち、摩尼宝珠の宝冠と繒綵の灌頂を具している。

om sarvasaṃskārapariśuddhe dharmāte mahānāya parivāre svāhā /

というのが賢劫〔の菩薩〕たちの共通の明呪である。

【訳注】1 「賢劫十六尊」参考までに SVU173 「賢劫千仏」を挙げておく

bāhyamaṇḍalavedikāyāṃ ca rūpaṃ bhadrakalpikamaitreyādibodhisattvasahasram ālikhet paripāṭyā / samabhāgato dikṣu pūrvādisu / tatra pūrveṇa pañca-sūcika vajrāyudhā dakṣiṇena vajratnadharaḥ paścimena vajrapadmaharā uttaraṇa viśvavajradharā iti / athaiṣāṃ niveśanavidyā nāmāni ca bhavanti /

⑳ om sarva (40b) saṃskārapariśuddhadharmate mahānāyaparivāre svāhā // iti vidyā /

外輪の框に弥勒等賢劫の千菩薩の姿を順次、東方等に等しく描きなさい。そのうち、東方の者たちは五鈷金剛〔杵〕を持つ。南方の者たちは金剛宝を持つ。西方の者たちは金剛蓮華を持つ。北方の者たちは毘首金剛〔杵〕を持つ。

そこで、これら布置の明呪と名称がある。

㉑ オーン 一切の有為の清淨なる法性よ 大理趣の眷属よ スヴァーハー

②16 *oṃ vajrodghāṭaya samaya praveśaya hūṃ* // (H58, DPSk.p.256)

dvivajrāgryāṅgulī samyak saṃdhāyottānato dṛḍham /

vidhārayeta saṃkruddho dvārodghāṭanam uttamam // (H987, DPSk.p.256)

その後で、フーン字より〔変じて〕自身金剛吽迦羅となると想いなさい。

次に、金剛阿闍梨は〔曼荼羅の〕中央に坐して定に入り、

四種の金剛門を意をもって開きなさい。// 1 // (H 857)

②16 オーン 金剛よ〔門を〕開け 三昧耶よ 遍入せよ フーン¹ (H58, R100)

〔二〕金剛頭指を正しく着け、着け押して結び、

怒りを込めて引き裂くのは、開門の最勝〔印〕である。²// 2 // (H987)

【注】1 「オーン 金剛よ〔門を〕開け 三昧耶よ 遍入せよ フーン」*oṃ vajrodghāṭaya samaya praveśaya hūṃ*, DP Sk では *oṃ vajrodghāṭaya samaya praveśaye hūṃ* (p.256) とあり、スコルプスキー氏は、*oṃ vajra open, lead into the pledge hūṃ* 「オーン 金剛よ 開け 誓約に入れ オーン」と訳している。samaya も samaye も呼格であろう。

2 「開門の最勝印」*dvārodghāṭanam uttamam*, Skt. (a,b) *dvivajrāgryāṅgulī samyak saṃdhāyottānato dṛḍham /* 並びに『真実撰経』のチベット訳 (a,b) / *rdo rje'i 'dzub mos legs par ni / sbyar la bkan te bsdams nas su /* (P 69b5) とも多少の相違がある。漢「二手金剛指皆堅。次復堅固仰相合。作彼忿怒打撃相。開壇門印此最上。(大正蔵 18, 380c)

次に、金剛薩埵の加行を具する大瑜伽をなして、如説の相を有する勝者の瓶に金剛杵を付けた花の枝を金剛女の〔印をもって〕搦んで、*oṃ vajrasattva hūṃ* / というこの〔真言を〕百八度誦して、再び、*vajrodaka hūṃ* / (SVU182[218]) と、千八回誦して、(D 115b)世尊金剛薩埵の面前に安置しなさい。残余の瓶などに於ては、諸如来の百八真言を誦して、曼荼羅の外に置くべきである。その後で、満瓶には毘盧遮那等の真言を誦して置くべきである。また、一瓶に於て、金剛薩埵の〔真言〕を百八返誦して、入り口の門に面前して置く。不足の時は吉祥金剛薩埵と五如来に瓶を捧げるべきであり、

oṃ vajrasattvamuṣṭi aḥ / (H564) というのは、阿闍の部の瓶に対してである。

oṃ vajraratnamuṣṭi trāṃ / (H565) というのは、宝生の部の瓶に対してである。

oṃ vajradharmamuṣṭi khaṃ / (H566) というのは、無量光の部の瓶に対してである。

oṃ vajrakarmamuṣṭi haṃ / (H567) というのは、不空成就の羯磨部の瓶に対するもので、百八返誦して〔それぞれの〕部に対して捧げるべきである。同様に満瓶にして捧げるべきである。〔瓶は〕十より少なくなされるべきではないと確かに説かれているからである。

【訳注】SVU182 置瓶

tato 'ñkuśādibhiḥ karmāṇi kṛtvā saptaratnamayaṃ kalaśaṃ mṛṇmayam vākālamūlam uccagrivaṃ lambauṣṭhaṃ mahodaraṃ divyagandhodaḥkaṃ sarvaratnaśadhisarvadhānya-paripūrṇaṃ saphalaṃ sapallvaṃ sadvastrāvabaddhakaṅṭhakaṃ kṛtarakṣaṃ bahiḥ samantād divyagandhānuliptaṃ sragviṇaṃ vajrāṅkitam upari mahāvajrādhiṣṭhitaṃ krodhaterintirī-(sattvavajrī) parigrhitayā vajrakusumatayā / (DPSk.p.256~258)

sarvaśadhibhiḥ śāliyavagodhūmatilamāśaiḥ sarvadhānyaiḥ sugandhodakasita-sugandhair kusumaiś ca paripūrṇaṃ samantato gandhopalīptaṃ sragvinaṃ śrīvajrasattvena sattvavajrīparigrhitaya vajrakusumatayāṣṭottaraśatajaptaṃ /

[②17 *oṃ vajrasattva hūṃ* //]

[②18 *oṃ vajrodaka hūṃ* //]

iti punar aṣṭottarasahasrābhimantritam kṛtvā / bhagavato vajrasattvasyāgrataḥ sthāpayet praveśadvārābhimukhaṃ ca dvitīyaṃ vajrasattvenāṣṭottaraśatajaptaṃ / tenodakenātmanam abhiṣiñcya praveśyakāle śiṣyaṃ vajrasattvavajrīṃ badhniyāt / bandhayed vā / śrīvairocanaḍinām tu kalaśaṃ pratyekam svacihnaṃ bāhyamaṇḍala-bāhyataḥ koṇeṣu teṣāṃ svamantrair aṣṭottaraśatajaptaṃ ? sthāpayet / teṣāṃ api bāhyataḥ pūrṇakumbha/ abhāve śrīvajrasattvasya pañcatathāgatānām ca kalaśat pūrṇakumbhaṃ ca dattvā / sattva-ratnadharmakarmavajrāṅkaṃ svakulamatrair

aṣṭottaraśatābhijaptam / kalaśacatuṣṭayam pūrṇakumbha-catuṣṭayam ca dadyāt /
daśanyūnaṃ na kārayed iti vacanāt //

次に、宝石あるいは土で作った、底が黒くなく、胴が大きくて、首の長い把手の付いた瓶を、珊瑚、金、螺貝、真珠、紅玉といったあらゆる宝石や、ブリハティ¹、カンダカリ²、ハサ³、ダンドートバラ⁴、シェータアパラジタ⁵といった⁶あらゆる葉や、米、大麦、小麦、胡麻、豆といったあらゆる穀物や、妙香水や白い妙なる香りのする花によって満たし、〔瓶の〕周りを塗香で塗り、花環を付け、吉祥なる金剛薩埵〔そのものである〕金剛〔杵〕の標を付け、首を白い美しい布で縛り、美しい枝葉や果実で口を満たしなさい。その〔瓶を〕金剛薩埵の〔マントラ〕を誦し、薩埵金剛女〔印〕をもってつかんだ金剛〔杵〕と花咲く蔓草をもって、百八度び〔加持しなさい〕。

㉑7 オーン 金剛薩埵よ フーン〕⁻⁶

さらに、

㉑8 オーン 金剛水よ フーン

という〔マントラを〕千八度び唱えて、世尊金剛薩埵の面前に置きなさい。また、金剛薩埵〔のマントラ〕によって百八度び唱えた第二の〔瓶〕を遍入の門に面前〔させなさい〕。その水をもって自身を灌頂し⁷、遍入に際し、弟子に〔対し〕金剛薩埵金剛女〔印〕⁸（遍入の印）を結び、あるいは〔弟子に〕結ばせなさい。吉祥なる毘盧遮那〔如来〕等の瓶もそれぞれ各尊の標幟を〔なして〕、外輪の外に隅にそれらの各尊のマントラによって百八度び唱えて置きなさい。それらの外側にも水差しを〔置きなさい〕。〔もし水が〕ない時は⁹、吉祥なる金剛薩埵と五如来たちの瓶から水差しに注いで¹⁰、〔金剛〕薩埵と〔金剛〕宝と〔金剛〕法と〔金剛〕業の金剛相（瓶）を各部のマントラによって百八度び唱えなさい。四つの瓶と四つの水差しを与えなさい。十より少なくしてはならない、とされている。

【注】1 P bri ha sti, D bṛ ha ti, bṛhatī (Skt. 名は、矢野道雄『インド医学概論』朝日出版社、1988年による。)

2 P, D kaṃ ḍa ka ri, kaṅṭhakārikā (?) (同上)

3 P, D ha sa, 不明。

4 P, D daṅ ḍot pa la, doṅḍotpala. (同上)

5 P śe ta a pa ra dsi ta, D śre ta a pa rā dsi ta, 不明。

6-6 下記の「 」内はサンスクリット写本が発見される以前にチベット訳から翻訳し

たものであるが、ここでは本文の『その〔瓶を〕金剛薩埵の〔マントラ〕を誦し』という部分が、㉑7のマントラとして、独立しているので、重複するがここに記しておく。チベット訳により本文にマントラとして組み入れた。

「〔瓶を〕あらゆる葉や、米、大麦、小麦、胡麻、豆といったあらゆる穀物や、香水の香りや白い花の香りで満たして、香りで浸した花鬘を結び、首を白い美しい布で縛り、香りのよい葉と果実で口を飾り、〔金剛薩埵の〕前に近づいて、闍伽水を捧げ、金剛縛をなし、薩埵金剛女〔印〕をなして、金剛花の枝を把って、

㉑7 オーン 金剛薩埵よ フーン

と百八度び唱え、」

7 「自身を灌頂し」 ātmānam abhiṣīṅcya, DPSk.p.258, line.9 には ātmaśiṣy-ābhiṣekaṃ kṛtvā, Tib. bdag nyid dang slob ma dbang bskur ba bya ste (自身と弟子を灌頂し) とある。

8 「金剛薩埵金剛女〔印〕を」 vajrasattvavajrīṃ, P rdo rje sems ma'i phyag rgya, D byaṅ chub sems ma'i phyag rgya. 正しくは sattvavajrī〔mudrā〕か。

9 「〔もし水が〕ない時は」 Skt. abhāve がなぜこの位置にあるか不明。Tib. によれば、daśanyūnaṃ…の一節の冒頭にきている。

10 「瓶から水差しに注いで」 kalaśāt pūrṇakumbhaṃ ca dattvā, Tib. bum pa dang / bum pa gang ba yang dbul bar bya ste, Tib. では共に bum pa と訳されている kalaśa と (pūrṇa) kumbha を瓶と水差しと訳した。Tib. では、(pūrṇa) kumbha を「瓶を満たすこと」としている。そうだとすれば、kalaśāt は kalaśān か。

H207 16) そこにおける、これが一切を遍入せしめる心呪である。aḥ //

慶喜蔵 (D 115b4~, P 131b4~)

次に、曼荼羅の尊格を意によって目の当たりを見ることを現証し、五種供養と殊勝なる飯食によって出来うる限り供養して、自分の顔を如実に覆って、四礼と律儀を持するまでなして、外に設置した瓶の水で自身を灌頂し、五供養を供養し、**samayas tvam** と誦して、薩埵金剛女の〔印を〕結んで、弟子引入の儀則によって入って、左の忿怒拳によって薩埵金剛女〔の印〕を摧破して、**aḥ** という〔心呪〕によって自身に遍入すべきである。

【訳注】SVU183 諸軌則

tato manasā maṇḍalaṃ devatās ca pratya (52b) kṣān niścitya / puṣpādibhiḥ
saṃpūjya catuḥpraṇāmādikapūrvakaṃ / saṃvaram ādāya yathāvat sarvavajrīm
baddhvā praviśet / tato vajrodakaṃ yathāvat pītṅvātmanam āveśayet /
vāmakrodhamuṣṭyā dakṣiṇahastasattvavajrīmadhyamāṅguliṃ punaḥ punaḥphoṭayet /

②19 aḥkāreṇa yathāvad ḍḍhikṛtya tadāveśaṃ yāvat /

vajraṃ tattvena saṃgrhya ghaṇṭāṃ dharmeṇa vādyā ca /

samayena mahāmudrām adhiṣṭhāya hṛdayam jayet // 1 //

iti / pūrvoktavidhiṃ kṛtvā vakṣyamānagāthāpañcakenānujñam udgatāvya karaṇaṃ
cādāya śrīvajrasattvātmanamantram //

次に、意によって曼荼羅の諸天を目の当たりに観想し、花等によって供養して、初めに四礼等を〔なしなさい〕。律儀(サンヴァラ)を受持し、正しく一切金剛女〔印〕¹を結んで〔曼荼羅に〕入りなさい。次に、金剛水を正しく飲んで、自身を〔曼荼羅に〕遍入させなさい。左の忿怒拳によって、右手の薩埵金剛女〔印〕の中指を繰り返し引き裂きなさい。

②19 アハ 字によって正しく堅固になして、その遍入をなし、乃至、

真実〔の象徴〕として金剛杵を把り、法〔の象徴〕として鈴を打ち鳴らし、

三昧耶(本誓)〔の象徴〕として大印を加持し、心真言を誦しなさい。// 1 // (§128-1)

という以前に説いた儀則をなして、〔次いで〕説かれている五種の讃頌²によって許可と称讃と授記とを受持し、吉祥なる金剛薩埵(44b) そのもののマントラをも〔唱えなさい〕。

【注】1 「一切金剛女〔印〕」sarvavajrī, Tib. rdo rje sems ma(金剛女印)とは遍入の印。

2 「五種の讃頌」gāthāpañcaka, 金剛薩埵の讃(SVU91参照)。

H208 17) 次に、如実に教令を求め、また、自加持などを為して、自分の名前(灌頂名)を発音し、[毘盧遮那より金剛鈴に至るまでの金剛〔の印契〕]によって[金剛界曼荼羅を]成就すべし。

慶喜蔵 (D 115b6~, P 131b7~)

「如実に教令を求め」というのについて、そのうち、「如実」という語の意味は、以

下である。すなわち、如実に自身に遍入することと、投花と華鬘を結ぶことと、覆面を解くことと、曼荼羅を示すことと、さらに、薩埵金剛女〔の印〕を結んで、自分の胸〔の処〕で解くことによって遍入を集めることと、一切の灌頂(D 116a)を摂受することをなして、三三昧耶を受持するために悉地の金剛誓誡を受持すべきである。

次に亦た、世尊より真言を受持し、加持と、灌頂と、自身に供養をなして、「我は普賢金剛なり」云々を自分の灌頂名より誦すべきである。

「次に金剛を成就せよ」(H207 17) d) というのは、毘盧遮那の大印を結んで、毘盧遮那の住処において、vajradhātu a / といって、如来の金剛杵を自身であると想って、その金剛杵を vajro 'ham / と観修し、それ自身に、yathā sarvatathāgatās tathā'ham / と観修し、毘盧遮那を自身であると観修すべきことから、同様に金剛遍入に至るまでの大印を結んで、金剛遍入の住処に於て、vajrāveśa aḥ / という〔真言〕によって金剛鈴を自身であると想い、vajraghanto 'ham / といって、鈴の相を観修して、それ自身を vajrāveśo 'ham / といって、金剛遍入に至るまで自身を観修すべし。是の如くならば、その曼荼羅によって、「金剛を成就すること」となるであろう。その分位を相の印そのものに於て金剛語を説いたのである。何故、このタントラに、相の印は金剛の曼荼羅であると説くのかとならば、それは、一切の相の印に於て、金剛というのは疑いがないからである。

【訳注】SVU184 啓請(諸尊の遍入)

tataḥ svādhiṣṭhānādikāṃ kṛtvā “suratavajro 'ham” ity ādy anyataraṃ nāmoccārya
vairocānamahāmudrāṃ baddhva tatsthāne

②20 vajradhātu aḥ // iti / tathāgatavajraṃ ātmānam āveśayed

②21 vajro 'ham // tato

②22 vajradhātur aham // iti / tadvajraṃ bhāvayet / evaṃ yāvadvajrā-
veśamahāmudrāṃ baddhvā tatsthāne

②23 vajrāveśa aḥ // iti / vajraghaṇṭāṃ ātmānam āveśayet /

②24 vajraghaṇṭāham // tato

『金剛頂經』和訳(五)(高橋)

②⑤ vajrāveśo' ham // iti tadghaṇṭām bhāvayed evaṃ vajreṇa sādhitam bhavati /
次に自加持等をなして、「我れは妙樂金剛なり」云々等、いずれかの〔灌頂〕名¹を発して、毘盧遮那の大印を結び、その座位で²、

②⑥ 金剛界よ アハ

と〔唱え〕、如来の金剛〔杵〕に自身を遍入させなさい³。

②⑦ 我れは金剛〔杵〕なり

次に、

②⑧ 我れは金剛界〔如来〕なり

と〔唱え〕、その金剛〔界如来〕を觀想しなさい。

このように、乃至、金剛遍入(金剛鈴菩薩)の大印を結び、その座位において、

②⑨ 金剛遍入よ アハ

と〔唱え〕、金剛鈴の自身を遍入させなさい。

②⑩ 我れは金剛鈴なり

次に、

②⑪ 我れは金剛遍入〔菩薩〕なり

と〔唱え〕、その鈴〔菩薩〕を觀想しなさい。このようであるならば、金剛〔某甲〕として成就する⁴。

【注】1 「いずれかの〔灌頂〕名」 anyataram nāma, P, N mi gang yang rung ba, D ming gang yang rung ba, D. を取る。灌頂名のこと。TAK(P No.3333, 132a3)参照。

2 「その座位で」 tatsthāne, Tib. de'i gnas su, ここでは毘盧遮那の位置であるが、次の金剛遍入(鈴)のところでは金剛遍入(鈴)の位置である。TAK(P 132a3)参照。

3 「如来の金剛〔杵〕に自身を遍入させなさい」 tathāgatavajram ātmānam āveśayet, TAK(P 132a4)「如来の金剛〔杵〕を自身と想い、その金剛〔杵〕を『我れは金剛〔杵〕なり』と觀想して……」。

4 「このようであるならば、金剛〔某甲〕として成就する」 evaṃ vajreṇa sādhitam bhavati, 以上、諸尊遍入の次第(啓請)は、まず「金剛界よ アハ」と言って毘盧遮那の心真言を唱え、毘盧遮那の象徴である金剛杵に自身を遍入させ、「我れは金剛杵なり」と唱え、「我れは金剛界〔如来〕なり」と自覚し、その象徴である金剛杵を觀想するのである。「乃至」(evaṃ yāvat)以下、三十五尊を順次に觀想し、鈴菩薩に至り、金剛

界曼荼羅が完成する。

H208 18) それより、再び金剛阿闍梨は薩埵金剛鉤〔の印〕を結んで、
彈指をなしつつ、一切諸仏を集めるべし。

【慶喜藏】(D 116a5~, P 132a8~)

「金剛〔阿闍梨〕は薩埵金剛鉤〔の印〕を結んで」云々について、以前説いた集会の印を結んで、金剛彈指の音をなして、

om vajra jaḥ vajrasamājaḥ jaḥ hūṃ vaṃ hoḥ / と誦して、

毘盧遮那を始めとして、賢劫に至るまでの一切諸仏を集めるべきである。

【訳注】SVU185 觀仏海会

sattvavajrāṃkuṣiṃ baddhvā vajrācāryas tataḥ punaḥ /
kurvann acchaṭāsamghātaṃ sarvabuddhān samājayet // 1 //

②⑫ om vajrasamāja jaḥ hūṃ vaṃ hoḥ // pravartayan /
tataḥ śighraṃ mahāmudrāṃ vajrasattvasya sevayan /
uccārayet sakṛdvāraṃ nāmāṣṭaśatam uttamam // 2 //

次に再び、金剛阿闍梨は薩埵金剛鉤〔の印〕を結んで、
彈指をなして、一切諸仏を召集しなさい。// 1 // (H 208 (18))

②⑬ オーン 金剛集會よ ジャハ フーン ヴァン ホーホ 〔と〕唱えつつ。
次いで、速やかに大印を金剛薩埵に奉じつつ、
最上の百八名讃を一度唱えなさい。// 2 // (H 208 (20)) (SVU119 参照)

H208 19) その瞬間に、一切諸仏は金剛薩埵を伴い、
曼荼羅に集會し、一切の曼荼羅を満たすであろう。

【慶喜藏】(D 116a6~, P 132b1~)

「その瞬間に一切諸仏は」云々について、「一切の曼荼羅」とは、毘盧遮那等の曼荼羅であって、彼らによってそれ(曼荼羅)が満たされるならば、そのようにいわれるのである。以上のように示して、金剛薩埵等から賢劫までの金剛界の樓閣に(D 116b)安住せる一切諸仏を集めることをなして、金剛阿闍梨は觀察した曼荼

羅を分割して無辺の無量宮に安立し、普く困遶せる理趣によって集めるものとなり、衆をなすのである。というまでである。

H208 20) 次いで、速やかに持金剛（金剛薩埵）の大印（身体）を觀想し、最上の百八名〔讚〕を一度発音すべし。

慶喜藏 (D 116b1~, P 132b4~)

「次に金剛薩埵」云々について、集会したのち、ただちに頂礼等をなして、世尊金剛薩埵の集会した身の秘密である大印の理趣を觀修して、集会して到着したとき、両の膝頭を地に着けて、金剛合掌を転じて呪願の仕草で胸に安置することと、「金剛薩埵、大薩埵」(H197 1) a) 云々の百八名讚を述べるべきである。そこで、喜ぶことになるならば、集会した如来たちを示すこととなり、不壞となるであろう。

208 21) それより、〔十六大菩薩の〕集会によって満足した如来達は堅固となり、自ら成就せる金剛薩埵は友として安住す。

慶喜藏 (D 116b4~, P 132b7~)

「まさに友として安住する」というのは、友のように、成就者に対し、曼荼羅の悉地を与えるであろう、という意味である。

209 22) 次に、一切の門（四門）において、鉤など〔の印〕による作業をなし、大羯磨最勝印をもって、三昧耶〔薩埵〕たちを安立すべし。

慶喜藏 (D 116b4~, P 132b8~)

「次に」云々について、「三昧耶〔薩埵〕たちを安立すべし」というまでで、次に、百八名讚にて稱讚したのち、ただちに以前のように開門をなして、金剛鉤の羯磨印によって、毘盧遮那と阿閼の部を鉤召し、東門に安置すべきである。宝生の部は、南門と近くである。無量光の部は、西門と近くである。不空成就の部は、北門と近くに安置すべきである。

金剛索の羯磨印で各々の門より、各々の場所に引入すべきである。

金剛鎖の羯磨印によって一切を縛すべきである。

金剛遍入の羯磨印によって毘盧遮那等、一切を自在になすべきである。

「最勝の大羯磨印によって、三昧耶〔薩埵〕たちを安置すべし」というのは、それは、羯磨でもあって大でもあることによって、「大羯磨」である。法と羯磨と大印等の業に於て説かれているもの、(D 117a) それが「大羯磨」である。それらに於けるその相は最勝であり、第一である。最勝大羯磨でもあって印でもあることによって「最勝大羯磨印」であり、『金剛頂タントラ』等に説かれているのをよく憶念することである。そこにおいて、悉地の支分は十六であると示すことは、①大印と、②三昧耶〔印〕と、③法〔印〕と、④羯磨印と、⑤鉤召と、⑥引入と、⑦縛と、⑧自在になすと、⑨加持と、⑩灌頂と、⑪三摩地と、⑫供養と、⑬心呪と、⑭印と、⑮真言と、⑯明である。これらは毘盧遮那等を各別に成就すべきために説かれたのである。「曼荼羅の諸尊を成就することは、四印を説くことそのもので、曼荼羅の印と云われる」と、他のタントラに説かれていることに由るならば、三昧耶と法と羯磨と大印の理趣そのものより、毘盧遮那等の如来は超えられるべきではないので、それ故「諸の三昧耶」と云われるのである。

「〔諸の三昧耶を安立すべきである〕の「を」という語は、摂受することで、三昧耶と法と羯磨と大印そのものによって、彼らを安立すべきである。曼荼羅に画かれた毘盧遮那等の身に、毘盧遮那等の智薩埵たちの、法と羯磨と大印の理趣に安住されるべきが、「安立」である。

209 23) 三昧耶最勝印と薩埵金剛など〔の印〕をもって、

ジャハ フーン ヴァン ホーホ と唱えつつ、大薩埵達を成就すべし。

慶喜藏 (D 117a5~, P 133b3~)

「三昧耶最勝の印と薩埵金剛等の〔印〕によって、

このように大薩埵を成就せよ。jaḥ hūṃ vaṃ hoḥ と誦して」

というのは、毘盧遮那等の如来たちが、法と羯磨と大印によって安立されるように、そのように、薩埵金剛女など、作者となるものたちも成就すべきであって、自

ら自在になすべきである。何を唱えてとならば、「**jaḥ hūṃ vaṃ hoḥ**と誦して」と云われ、これによって三昧耶等の共通の四文字成就の心呪を説いたのである。あるものたちは、**jaḥ hūṃ vaṃ hoḥ**と称するのは、(D 117b) これら金剛鉤等の四門衛の印の心呪であると主張している。また、これをどのように知るのかとならば、鉤召等の義を明らかにすることであることのためである。他のものたちが、**jaḥ hūṃ vaṃ hoḥ**と誦して、善巧なる儀則の意によって身中に仏性を入れるのである。と云うのは、ここにおいてもそうであるが、門衛たちの心呪が決定文字であると許可するからであって、**aḥ**というのが遍入の心呪であることのためと、**ho**というのが金剛愛の心呪であることのためである。世尊自身がこの義を説くことをなされたのであって、

「次に、一切最勝などを画いて成就し、

三昧耶最勝〔印〕を結んで、また、**jaḥ hūṃ vaṃ hoḥ**と誦す」

という。これらの義は亦た、ここに示したのみであるけれども、悉地の次第は以下である。

鉤等によって諸の門において事業をなして、金剛夜叉〔の印言〕によって障礙を除遣することと、牆と網をなして、金剛拳によって門を開き、金剛甲冑によって守護し、一切の所作を護って、金剛薩埵は資具を施与し、諸々の三昧耶印によって毘盧遮那等を観見して、以下の次第によって成就すべきである。

そこで、世尊毘盧遮那の三昧耶印を結んで、次のように誦すべきである。

vajradhātu dṛśya jaḥ hūṃ vaṃ hoḥ samyas tvam samayas tvam ahaṃ vajradhātu /

と云って、同様に金剛遍入の三昧耶印を結んで、

vajrāveśa dṛśya jaḥ hūṃ vaṃ hoḥ samyas tvam samayas tvam ahaṃ vajrāveśa /

と云うまでである。

「次に法と羯磨と大印によって安立すべし」ということは、〔先ず〕三昧耶印で毘盧遮那等を成就して、その次に、法と羯磨と大印によって安立すべきである。これは何から知るかとならば、釈タントラに示されていて、『吉祥勝初』より、

「大三昧耶薩埵等 (D 118a) を一切の瑜伽の理趣より三昧耶印を成就して、その後で、他の印と瑜伽すべきである」

と、この義を示している。また、此のタントラ自体からも、

「金剛遍入を成じて、大印を儀則の如く結んで、その前方に、かの偉大な薩埵を觀修す。かの智薩埵を見て、自身に觀修すべし。鉤召し、引入し、縛し、自在になして成就すべきである」(H254 1) , 2))

と説かれているので、『勝初』のみに「三昧耶印を結んで」と説く。何故「儀則の如く」という、その義は以下である。すなわち、金剛合掌と金剛縛を胸に破すべきである。

次に、金剛遍入の印をもって自身に遍入をなして、**vajrasattva** という〔真言〕等を意に誦して、法無我を觀修す。

次に、月輪の形を〔觀修す〕。その〔月輪の〕上に第二の月輪を〔觀修す〕。それらも **vajrasattva** という〔真言〕等の音声を具することによって、金剛であり、何処からもそれは生じるのである。他のものたちは金剛より生じる本〔尊〕の相を想うべきである。

次に、相のつもりになって、金剛薩埵の瑜伽によって自身を金剛薩埵と加持する行によって、自身を金剛薩埵と觀修すべきである。金剛王等の瑜伽は金剛薩埵より生じる本尊の慢〔と同じ〕である。

次に、**mahāsamayās tvam ahaṃ** という菩提心の慢を生じて、本〔尊〕の三昧耶印を結んで、**samayo 'haṃ** (H302) と云って、身と語と心の秘密の慢を生じて、本尊の三昧耶印そのものと、というこの〔真言〕によって、自らを加持して、本尊の大印を結んで、その面前で本尊の儀則を如実に生じて、金剛鉤等の羯磨印にて、

【現智身】面前に安住せる影像に於て智 (D 118b) 薩埵を鉤召し、引入し、縛し、自在になして、

【見智身】再び本尊の三昧耶印を結んで、**vajrasattva dṛśya** 云々によって見ることをなして、

【四明】三昧耶印そのものと、**jaḥ hūṃ vaṃ hoḥ** と誦して遍入すべきである。

【成仏】次に、三昧耶印そのものと、

「**samayās tvam** と誦して、背後に月輪を成就して、

samayas tvam aham と誦し、そこに於て自身を薩埵の身と観修す」(H256 1))

vajrasattva という本尊の心呪もまた誦すべきであると、真実を明らかにする一切印を結ぶ儀則は、「一切印悉地共通悉地広大儀則タントラ」(H254-262「大印成就法広大儀則」)に解かれているのである。それによるならば、三昧耶印によって諸尊を成就して、法と羯磨と大印によって諸尊を安立すべきである。身の秘密を大印の理趣に於て究竟じて尊と女尊等を遍入することがあり、このタントラによっては、さらに大印の後に堅固にすべき羯磨印はない。

【訳注】SVU186 阿闍梨の所作 (H254-256 大印成就法広大儀則) (SVU120 参照)

tathaiva vajrāṅkuśādibhiḥ ākṛṣya praveśyabaddhāvaśīkṛtya vajrayakṣeṇa vighṇotsāraṇaṃ prākāraṃ pañjaraṃ kṛtvā samayavajramuṣṭinā maṇḍaladvārāṇi baddhvā dvyakṣarakavacena sarvarakṣāḥ saṃrakṣyārghadānapūrvikābhiḥ svasamayamudrābhir dṛśyaṃ kṛtvā

②27 jah hūṃ vaṃ hoḥ // pravartayan /

②28 samayas tvam //

②29 samayas tvam aham // iti ca /

svahṛdayāni mantrāṃś cāntre saṃsādhya / dharmakarmamahāmudrābhiś cāmudryābhiṣiñced mudrābhiṣekais tathāgatādin bhadrakalpikaparyantān // tatra sattvavajrādināṃ svahṛdayāny eva dharmamudrāḥ / vajrasattvaratnadharmakarmāṇāṃ karmamudrā mahāmudrāś ca / vajrādyantargatāḥ strīrūpadhāriṇyo vajrasattvādirūpās ca tā iti //

“vāmatathāgatamuṣṭim uttānāṃ kṛtvā dakṣiṇahastatarjanyaṅguṣṭhābhyāṃ kaniyasim ārabhya vikāśya saṃputāñjaliṃ kuryāt” /

iyaṃ maitreyādināṃ samayamudrā vidyā caiṣāṃ pūrvoktā / tām eva vidyāṃ teṣāṃ jihvāsu nyased iyaṃ teṣāṃ dharmamudrā // aḥkāreṇa svahṛdi viśvavajram niṣpādya teṣāṃ lekhyānusārato mahāmudrāṃ baddhvā karmamudrā bhavanti / svahṛdi pañcasūcikāṃ vajram vicintya lekhyānusārato eva teṣāṃ mahāmudrā bandhanīyāḥ / saivaṃ ca vidyā sāmānyeti//

同様に、金剛鉤等の〔印〕によって鉤召と引入と縛と自在をなし、金剛葉叉の〔印とマントラ〕によって一切の障礙の破壊と牆と網をなして、三昧耶金剛拳をもって曼荼羅の諸門を縛し、二文字 (om tuṃ) の甲冑によって一切の守護者たちを守護し、閻伽水の施与〔など〕の以前になした¹各尊の三昧耶の印等をもって〔曼荼羅を〕見て、

②27 ジャハ フーン ヴァン ホーホ

と唱えつつ、

②28 汝は三昧耶なり

②29 我れと汝は三昧耶(平等)なり (H 256)

と、また²〔唱えなさい〕。各尊の心真言とマントラを最後に成就し、法〔印〕と羯磨〔印〕と大印とによって刻印し、印灌頂によって、〔五〕如来を始め賢劫の辺際に至るまで灌頂しなさい。

そのうち、薩埵金剛〔女〕等の各尊の心真言こそ法印である。金剛薩埵、〔金剛〕宝、〔金剛〕法、〔金剛〕業の羯磨印と大印は、金剛〔杵〕などの中に入った女身を有し、また、それらは金剛薩埵等の色身を有する。

「左の如来拳を上向きになし、右手の頭指と大指の二本によって³小指から始めて開いて、虚心合掌をなしなさい。」

これは弥勒等〔千仏〕の三昧耶印であり、これらの明〔呪〕は以前に説いた⁴。それらのその明〔呪〕を舌に置きなさい。その明〔呪〕が彼らの法印である。アハ字によって自身の心臓に毘首金剛〔杵〕を置き、それら〔弥勒等千仏〕の画像に依拠して大印を結べば、諸々の羯磨印が生じる。自身の心臓に五峯金剛〔杵〕を想い、画像に依拠してそれら〔千仏〕の大印を結びなさい。また、同様に、その明〔呪〕は共通である。

【注】1 「閻伽水の施与〔など〕の以前になした」 arghadānapūrvikābhiḥ, いわゆる大印成就法広大儀則 SVU70 以下。

2 「と、また」 iti ca, SVU77, 78 を参照。

3 「右手の頭指と大指の二本によって」 dakṣiṇahastatarjanyaṅguṣṭhābhyām, Tib. lag pa g'yas pa'i mthe bong dang mdzub mo gnyis kyi, とあるが、gnyis kyi は gnyis kyis と instr. に読むべきであろう。

4 「これらの明〔呪〕は以前に説いた」 vidyā caiṣāṃ pūrvoktā, 「これらの明〔呪〕」とは、千仏名のことか。

209 24) それより、仏陀(毘盧遮那如来)などの一切の大薩薩埵達は集会より鉤召せられ、また、よく引き入れられ、縛せられ、彼(阿闍梨)の思いどおりになる[であろう]。

【慶喜蔵】(D 118b4~, P 135a5~)

「それより、仏陀など」云々について、「それより」というのは、諸門に於て鉤等による事業をなしてから[ということ]、「仏陀など」とは、すなわち、毘盧遮那を始めとして、賢劫に至るまでの大薩埵をすべて集めて、集会をなさしめることなど如実であるならば、「鉤召され」云々と述べられるのである。

鉤召は金剛鉤によってである。引入は索によってである。縛は鎖によってである。その自在というのは、その成就者の金剛遍入によって遍入することで、毘盧遮那等が自分の自在となることである。何故、そのようであるかとならば、それ故、一切の諸門に於て、鉤等の事業をなしてというのである。

次に、**vajrasattva**と誦して、金剛宝三昧耶印なるもの、それによって如来たちを灌頂すること、弥勒等も亦た、そのもので(D 119a)、灌頂すべきである。金剛薩埵等は、金剛界自在母等を五仏の印によって灌頂すべきである。

次に、金剛薩埵の曼荼羅の一切の尊に供養の資具を捧げて、十万対の衣、或いは一万、或いは千対の衣、或いは毘盧遮那等はそれぞれ各一对の衣、それぞれに間に合わなければ、すべてに共通の一对の衣と、種々なる幔幕と、四隅に種々の旗を設けること、傘蓋と幢と旗なども、金剛葉叉[の真言]と金剛薩埵[の真言]と om 字を七度誦して、一切の尊に捧げるべきである。

vajraspharaṇa khaṃと云って、百本の花の枝、或いは四本の花の枝、或いは一切の花に対しても、金剛火と花の明[呪]を完誦して、一切の妙香と含香等も金剛薩女と香の明[呪]等を誦し、樟腦と沈香と乳香と旃檀等を伴った薫香のために調合した香囊十万、或いは一万、或いは千の香囊、或いは百、間に合わなければ十の香囊を金剛火と薫香の明[呪]を完誦して、一切の諸尊に捧げるべきである。

吉祥印(svastika卍字)と十万の功德を有するものを非常に巧妙な飲食と、種々

様々な副食によって満たされた器十万、或いは一万、或いは千、或いは百、或いは十を金剛火[の明呪]を完誦して、**om akāro mukhaṃ sarvadharmānām ādyanutpannavāt** / と誦して、捧げるべきである。

灯油等は灯火の数千、或いは乃至、四つの大器を満たすことに於て、金剛火と灯火の明[呪]を誦すことと、**vajraspharaṇa khaṃ**と誦して、一切の尊勝に捧げるべきである。音楽の樂章千、或いは音楽の樂章十において、降三世の陀羅尼曼荼羅(D 119b)に説かれる音楽の明[呪]を完誦して、**vajraspharaṇa khaṃ**と云う[真言]によって捧げるべきである。舞と音楽等による諸々の供養も、**om**と**hūṃ**を完誦して捧げるべきである。環釧と耳環と頂髻と宝冠等も金剛宝の繒綵によって捧げるべきである。華鬘によって飾り、莊嚴して、瓔珞と半瓔珞で莊嚴され、半満月で莊嚴された塔門が心地好い鈴などを付けている。また、馬と象と牛の群をよく観察することなども、hūṃ字と om を完誦して、**vajraspharaṇa khaṃ**という[真言]と[伴に]、一切如来に捧げるべきである。

【訳注】SVU187 諸供養(R 大正蔵18, 248b)

(1) tataḥ pūjāṃ kuryād arghaṃ dattvā / vastrayugalakṣaṃ daśasahasraṃ sahasraṃ śataṃ pratyekaikaṃ vā sarvasāmānyam / nānāprakārāṇi vitānāni catuḥkone vicitrapatākāva-saktāni / chatrapatākās ca **omkāreṇa vajrasattvena ca saptam abhimantrya** /

(2) puṣpavṛkṣaśataṃ caturo vā vṛkṣān sarvapūṣpāṇi ca pūrvavad abhimantrya /

②⑩ **om vajrasphara khaṃ** // iti niryātayet //

(3) sarvagandhān savāsāṃś ca vilepaṇasugandhikān gandhavidyayā / karpūrāgaru-turuṣkāṇi candanādisaṃmiśrāni dhūpavidyayābhimantrya / dhūpaghaṭikālakṣaṃ daśasahasraṃ sahasraṃ śataṃ vā daśanyūnaṃ na kāryam /

(4) ghṛtapradīpādīlakṣādisaṃkhyāṃ pradīpakuṇḍasahasraṃ śataṃ daśakuṇḍāni catvāri vā / pūrvavat pradīpamantreṇābhimantrya /

(5) svastikam āditaḥ kṛtvā balyupahāraṃ lakṣarūpakaṃ daśasahasraṃ śataṃ daśasaṃkhyam vā nānāprakārāṇi ca bhakṣyāni pūrvavad eva /

②⑪ **akāro mukhaṃ** // ityādinā sarvadevatābhyāṃ niryātayet /

『金剛頂経』和訳(五)(高橋)

(6) daśavādyasahasrāṇi daśavādyākāreṇa vādyamudrābhir vajramuṣṭibhyāṃ
karāṅgulibhir vādyābhinaye / daśaparakāraḥ tadyathā viṇāvāśśamurajamukundakāṃsi-
bherimṛdaṅgapaṭahaguṇjatimilābhinayaś ceti /

(7) vādyanaṭanartakamakuṭakaṭakakunḍalādipūjās ca / oṃkāreṇa hūmkāreṇa
vābhimantrya nipātayet /

(8) tathā paṭāvalambanā kāryā srak cāmaravibhūṣita / hārārdhahāraracitārdha-
candropaśobhita /

turagāhastigoyūthā dātavyās ca sukalpitāḥ /

torāṇāni ca ramyāṇi ghaṇṭādisahitāni ca // 1 //

(9) tato vajralāsyādibhiḥ sampūjya / “sarvasattvārthaṃ kurudhvaṃ sarvasiddhaye”
iti / sarvatathāgatavijñaptiṃ kuryāt //

(1) 次に、供養をなさない。鬘伽水を捧げ、一組の衣服を十万組、一万組、千組、百組、あ
るいは一組ずつを、すべてに共通に〔捧げなさい〕。〔曼荼羅の〕四隅において、様々な種類
の幔や、種々なる幡を懸けなさい。また、傘蓋や幡をオン字によって、また、金剛薩埵の〔マ
ントラ〕によって、七度び加持して〔掲げなさい〕。

(2) 百本の花や樹を、あるいは四本の樹を、またすべての花を以前のように加持して、

㊦ オーン 金剛周遍よ カン

と〔唱えて〕献じなさい。

(3) 良い薫のすべての香と、良い香りの塗香を、香の明〔呪〕によって〔加持し、捧げなさい〕。
樟脳とアガルと乳香と梅檀等を混ぜ合わせたものを焼香の明〔呪〕によって加持し〔捧げな
さい〕。十万、一万、千、あるいは百の香爐を〔捧げなさい〕。〔その際、〕十より少なくして
はならない。

(4) 十万など〔一万、千、百の〕数量の酥灯を満した千、百、十、あるいは四つの燭
器を以前のように、灯火のマントラによって加持して〔捧げなさい〕。

(5) 初めに卍〔菓子〕を供え、十万種、あるいは一万、百、十の数量の献供を、また、種々
の食物を以前のように、

㊦ ア字は門なり

云々等の〔マントラを唱え〕、一切の諸天に献じなさい。

(6) 十種の楽器から成る一万の楽器を、楽器の印、〔すなわち二手〕金剛拳になし、手指
によって楽器を〔打つような〕仕種を〔なして捧げなさい〕。十種とは、すなわち琵琶、簫、太

鼓、小太鼓、鉦、大太鼓、腰鼓、戦鼓、グンジャ、ティミラーの仕種である。

(7) また、楽器と舞と踊と宝冠と釧と耳飾等の供養をオン字によって、あるいはフーン
字によって加持して献じなさい。

(8) 同様に、布を吊るし、払子で飾り、瓔珞や半瓔珞で飾り、半月〔形の飾り〕で荘嚴
した花鬘を作りなさい。

また、よく装備された馬や象や牛の群れを捧げなさい。

また、鈴等を付けた美しい塔門を捧げなさい // 1 //

(9) 次いで、金剛嬉等〔八供養菩薩の印とマントラ〕によって (46a) 供養し、「一切の
悉地のために、一切有情の利益をなしたまえ」(H 209 (25)) と、一切如来に請願をなしな
さい。

【注】1 一応詩型にしたが、Tib. は詩型になっていない。

209 25) 次に、秘密供養によって、偉大な者たちを伴える〔四仏?〕を満
足せしめ、“彼(阿闍梨)は偉大な者たち(大威徳)を喜ばしめ”
「汝等は、一切の成就のために、一切有情の利益をなしたまえ」と言
うべし。

慶喜蔵 (D 119b3~, P 136a6~)

次に、八供養と羯磨曼荼羅が説くところの十六供養によって正しく供養して、〔金
剛〕嬉等の四秘密供養によって曼荼羅の諸尊を喜ばせて、一切如来に対し、阿闍
梨は「一切の悉地を成就せんがために、有情利益をなしたまえ」と勧請すべきで
ある。

次に、他のタントラに説かれる儀則によって、外に神饌を施す。次に、護摩の
儀則によって、吉祥金剛薩埵の真言によって息災護摩を百八なして、吉祥毘盧遮
那等の心呪によっても、焼施を七度捧げるべきである。その後で、曼荼羅を目の
当たりに見るものとなるか、或いは声、或いはお姿等の相を得るものとなるまで、そ
れまで、念誦と観修をなすべきである。

以上は、一切曼荼羅における金剛阿闍梨の事業である。

『金剛頂経』和訳(五)(高橋)

慶喜蔵 (D 119b3~, P 136b2~)

「一切の曼荼羅に於ける金剛阿闍梨によるこのような事業をなす」というのは、第四章に説かれる色形の曼荼羅等の一切の曼荼羅において、一切の薩埵の瑜伽の自性を有する金剛によって暗示された阿闍梨が「金剛阿闍梨」であって、彼は暗示の義のみを尽すけれども、宝蓮華の(D 120a)阿闍梨等によってもこのように事業をなすという意味である。

以下灌頂段。

執筆者紹介（論文掲載順）

田中文雄

真言宗豊山派総合研究院現代教化研究所所長
東京都江戸川区 十念寺住職

倉西賢亮（憲一）

真言宗豊山派総合研究院宗学研究所研究員
大正大学専任講師
東京都江戸川区 真光院中

横山裕明

真言宗豊山派総合研究院宗学研究所研究員
大正大学総合佛教研究所主任
東京都足立区 吉祥院中

高橋尚夫

真言宗豊山派総合研究院院長
大正大学名誉教授
埼玉県春日部市 大王寺住職

原稿応募規程

- 内 容 『豊山学報』の伝統を継承する学術的な論文、あるいは文献資料校訂(翻刻を含む)・翻訳。
- 応募資格 大正大学豊山学会所属の教員。
真言宗豊山派総合研究所所属の者(養成所研修員を除く)。
大正大学総合佛教研究所所属の真言宗豊山派教師。
真言宗豊山派総合研究院院長または同研究所長の推薦を受けた者。
- 原稿枚数 原稿用紙五十枚以内(資料・図表等を含む)。
- 入 稿 編集委員会による査読の結果、許可を得た者に限って掲載を認める。

編集後記

今年も新型コロナウイルスの感染が治まらず、宗務所の閉鎖等もあり、すっかりコロナ騒動に翻弄されてしまつたが、高橋尚夫、田中文雄、倉西賢亮(憲一)、横山裕明の四先生より玉稿を頂き、『豊山学報』第六十四号を無事に発行することができた。

高橋尚夫先生には、引き続き『金剛頂経』和訳(五)をご寄稿いただいた。今回は、前回で完了した三種三摩地に続く第四・灌頂作法に入り、その中の「一」百八名讃による勧請と「二」金剛界曼荼羅の図絵と「三」曼荼羅

における阿闍梨の所作とを説く部分について、『金剛頂経』本文の梵文和訳と、対応するアーナンダガルバ(慶喜蔵)とシャーキャミトラ(釈友)の註釈の主要部分の蔵文和訳を、ご提示いただいた。また、「二」と「三」には、梵文原典が存在する、アーナンダガルバ(慶喜蔵)撰の『サルヴァヴァアジュローダヤ(一切金剛出現)』より対応する部分の梵文とその和訳が附されている。今回で、真言宗が所依とする不空訳の三巻本『金剛頂経』の第二巻まで完成したことになるが、高橋先生には、三巻本、さらには四大品の翻訳の完成という壮大な偉業を無事成就されることを心よりお祈りする。

田中文雄先生は、仏教と比較しつつ、『道蔵』および蔵外文献を駆使して、道教における十王信仰と儀礼の成立過程を精緻に解明されている。『道蔵』には、仏教の十王信仰を取り入れた、閻摩を始めとする十王による死者の審判という十王法事の信仰と、これに基づく十回の追善・逆修の法要儀礼に、道教の神である真君名と天尊名を関連させて説く文献が存在する。また、十王および真君の名前は現れないが、追善法要においてこの天尊を十方に配して礼拝する儀礼を説く文献もみられる。さらに、蔵外文献には、十方に忌日・真君・天尊・十王が配当された十王法要儀礼が説かれていることを指摘し、この方位の重視が、道教における十王信仰と儀礼の特色を形成したことを明かされている。

数珠は普段から馴染みが深いのが、インドの後期密教においてこの数珠がどのように発展展開したかについて、倉西賢亮(憲一)先生より大変興味深い研究報告を頂いた。倉西先生は科研費の助成を受けて、精力的に『サンヴァローダヤタントラ』とその註釈書である『パドミニ』の研究に取り組まれている。『サンヴァローダヤタントラ』はサンヴァアラ系密教の基本的文献であり、全三十三章のうち、第十二章には数珠の作成法や使用法などが説かれている。未だ校訂されていなかった第十二章について、四本の梵文写本とチベット語訳等を用いて厳密に文献操作を施した

校訂テキストとその和訳を提示し、さらに『パドミニー』の該当する部分の厳格な梵文校訂テキストと和訳もご提示頂いた。

横山裕明先生からも、インド密教の梵文写本を扱った原稿を寄稿して頂いた。横山先生が取り上げた『底哩三昧耶王成就法』は、弘法大師が「底哩三昧耶経」として請来され、不動讃の典拠ともされる不空訳『不動使者念誦法』とも関係の深い文献である。一世紀ほど前に梵文の校訂本が公刊されていたが、新たに四本の梵文写本を参照し、さらにチベット語訳も用いて、最新の文献学の成果を反映した、より精度の高い緻密な再校訂がなされている。今回は、全体の三分の一ほどについて、梵文とチベット語訳の校訂テキストを提示した後、その和訳を掲載して頂いた。最後に、全ての原稿に目を通して頂いた高橋尚夫総合研究院院長と小林政彦教化センター長をはじめ、コロナウイルス騒動の中でご尽力いただいた教化センターの事務担当の各位と制作担当のノンブル社に、そして玉稿を頂いた先生方に、心より感謝し厚く御礼申し上げる。

なお、前の第六十三号の編集後記中の誤記を、真言宗豊山派ホームページ・総合研究院リポジトリの電子版において訂正させて頂いた。

(S. K. 記)

『豊山学報』編集委員会

- 委員長 木村秀明 (宗学研究所所長)
委員 藤田祐俊 (宗学研究所常勤研究員)
石井祐聖 (事相研究所所長)
田中康寛 (事相研究所常勤研究員)
名取芳彦 (布教研究所所長)
田中宥弘 (布教研究所常勤研究員)
田中文雄 (現代教化研究所所長)
守 祐順 (現代教化研究所常勤研究員)

令和三年三月二十日印刷
令和三年三月三十一日発行

豊山学報第六十四号

編集人 木村秀明
発行人 高橋尚夫
製作 (株)ノンブル社

発行所

真言宗豊山派総合研究院

〒112-0022
東京都文京区大塚五丁目四〇番八号
真言宗豊山派宗務所内
電話〇三(三九四六)一三九九